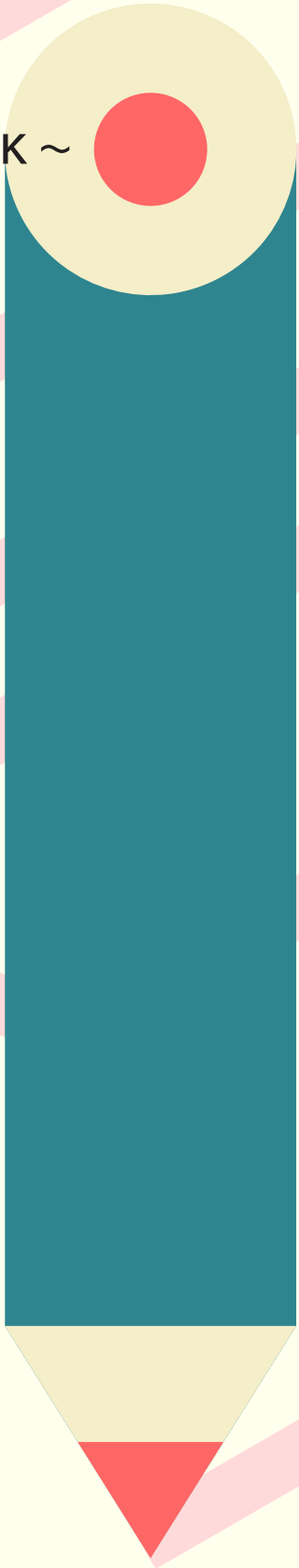
誰もが
自分を発揮できる
学校づくり

～多文化共生アイディア BOOK ～



はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、開発途上国への国際協力を行っていますが、国際協力を通じ培ってきた経験や知見を日本の学校教育に還元する開発教育支援事業を行っています。新しい学習指導要領では、総則編の前文に「持続可能な社会の創り手の育成」が明記され、持続可能な開発目標（SDGs）が教科書に掲載されるようになりました。これを受け、JICA は、SDGs の達成に向けた取り組みを実施している組織として、これまで以上に開発教育支援事業の強化・充実を図っています。
さて、近年、日本に在留する外国人は増加の一途をたどっており、学校に在籍する外国人児童生徒も年々増加しています。日本政府からは、「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（令和3年度改訂）」が策定され、現在、様々な取り組みが行われています。
外国につながる児童生徒への教育の充実においては、ひとりひとりの日本語能力を的確に把握し、きめ細かな指導を行うことにより、必要な学力等を身に付け、学校生活において、自信や誇りを持って自己実現を図ることが課題として取り上げられており、母語・母文化の重要性への配慮や、日本人と外国につながる児童生徒が互いを尊重しながら共に学ぶ授業などに取り組むとされています。

このような背景を踏まえ、JICA は 2021 年度に新たに「多文化共生の文化」共創プログラムを実施しました。本プログラムには、多文化共生に関する授業実践、多文化共生を意識したクラスや学校づくりに取り組んだ経験を持つ 14 名の教員の方々が全国から参加されました。フィールドワークを含む全 3 回のプログラムで「多文化共生」について議論を重ね、参加者それぞれのこれまでの取り組み事例の共有、効果的な取り組みや直面した課題、生徒やクラス、学校に起きた変化・変容等について話し合い、学び合いました。本研修が、多文化共生のための対話を深めていく機会となり、何等かの形で参考になることを願っております。

本プログラムの参加者が、それぞれの経験や知見をもとに考察した事例から、本冊子「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK ～」が出来上がりました。授業や学校内での実践、課外活動での取り組み、保護者との連携、外部との連携、そして教員自身の学びや姿勢等、たくさんのアイディアが掲載されています。本冊子が、今後、学校における「多文化共生の文化」を育むためのきっかけやヒントとして、多くの教室・学校・地域での実践の一助となれば幸いです。
最後に、本研修にご協力いただいた多くの皆様に、この場を借りて心から御礼申し上げます。

独立行政法人　国際協力機構（JICA）
広報部　部長　竹田幸子

誰もが自分を発揮できる学校づくり
～多文化共生アイディア BOOK ～

目次

1. 誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK ～について …… 3

2.「多文化共生の文化」共創プログラムについて
（1）プログラム概要 …… 4
（2）プログラムでの学びから生み出したメッセージ …… 5
（3）プログラム出席者一覧 …… 8

3. プログラムを振り返って
多文化共生の文化とは - 教室・学校・地域で取り組むために - …… 9

4. 多文化共生の文化をつくるための活動アイディア集
活動アイディア集の見方 …… 11
活動アイディア集の一覧 …… 12

＜活動アイディア集＞
千葉県立桜が丘特別支援学校 …… 14
石川県立いしかわ特別支援学校 …… 16
旭川市立緑が丘小学校 …… 18
神戸市立摩耶小学校 …… 22
別添資料（絵本リスト） …… 24
大和市立上和田小学校 …… 28
神戸市立義務教育学校港島学園（小学部） …… 30
川上村立川上第二小学校 …… 34
北海道江別市立江別第二小学校 …… 36
清真学園高等学校・中学校 …… 38
宮城県宮城第一高等学校 …… 40
愛媛県立土居高等学校 …… 42
岐阜県立東濃高等学校 …… 44

5. 資料
（1）研修資料：JICA 東京 高崎分室 国際協力推進員（外国人材・共生）海老原 周子氏 講演資料 …… 51
（2）多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト …… 60

6. 付録
JICA って？ …… 73
学校で活用できる JICA 国際理解教育 / 開発教育支援プログラム …… 74

1

誰もが自分を発揮できる学校づくり
～多文化共生アイディア BOOK ～について

「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK ～」（以下本冊子）は、2021 年度 JICA 地球ひろば「多文化共生の文化」共創プログラムへの参加者が、自身の経験や知見、さらに本プログラムから得た学びをもとに、活動のアイディア集として、様々なアイディアをまとめたものです。

本冊子は、教室、学校および地域で必要とされている多文化共生に向けた取り組みのために、活用されることを目的としています。

2 「多文化共生の文化」共創プログラムについて

(1) プログラム概要

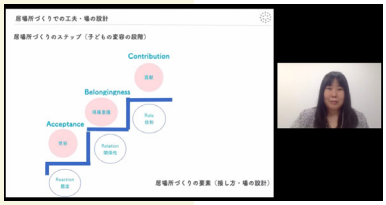
2021 年度 JICA「多文化共生の文化」共創プログラムは、【「多文化共生の文化」をつくるために、私たちにできることは何か？】をテーマに、国際理解教育 / 開発教育に関する授業実践や、外国ルーツの児童生徒に対する取り組んでいる教員が、児童生徒やクラス、学校に起きた変化や変容等のそれぞれの経験を共有し、お互いに学びを深めるための新規プログラムです。全 3 回の研修には全国から 14 名の教員が参加し、講演やダイアログを通して今後実践できる取り組みを考えました。

第 1 回目 ｜ オンライン

11/7 SUN
13:00-17:00

『参加者同士のつながりを深める・多文化共生を知る』

基調講演
未来に続く「多文化共生」を実現する文化づくり
～居場所づくりの実践を通じて、子ども達が教えてくれたこと～
JICA 東京　高崎分室　国際協力推進員（外国人材・共生）
海老原 周子 氏



ダイアログ
多文化共生の取り組み事例共有
参加者がこれまでに学校で実践してきた「多文化共生」への取り組みや、今後やってみたい取り組みを小グループで共有し合いました。

第 2 回目 ｜ 対面 /JICA 横浜

1日目
11/27 SAT
13:00-18:00

『多文化共生の街づくり、コミュニティづくりを見て学ぶ』

フィールドワーク①
横浜市国際交流協会　鶴見国際交流ラウンジ訪問
横浜市国際交流協会　鶴見国際交流ラウンジ
館長補佐　沼尾　実 氏

フィールドワーク②
NPO 法人 ABC ジャパン訪問
NPO 法人 ABC ジャパン
安富祖　樹里 氏　　理事長　安富祖　美智江 氏

2 日目
11/28 SUN
9:30-15:00

『学校での「多文化共生の文化」づくりを考える』

基調講演
「多文化共生の文化」をつくるために私たちにできることは何か？
横浜市立上飯田小学校 国際教室担当　菊池　聡 氏

ダイアログ
学校に「多文化共生の文化」をつくるために
フィールドワークや講演を踏まえ、個々の考えをブレインストーミングするワークショップを行いました。さらに自身の勤務校においてどんな取り組みができるかを考え、小グループで共有しました。

第 3 回目 ｜ オンライン

12/12 SUN
13:00-17:00

『「多文化共生の文化」をつくるためのアイディア共有』

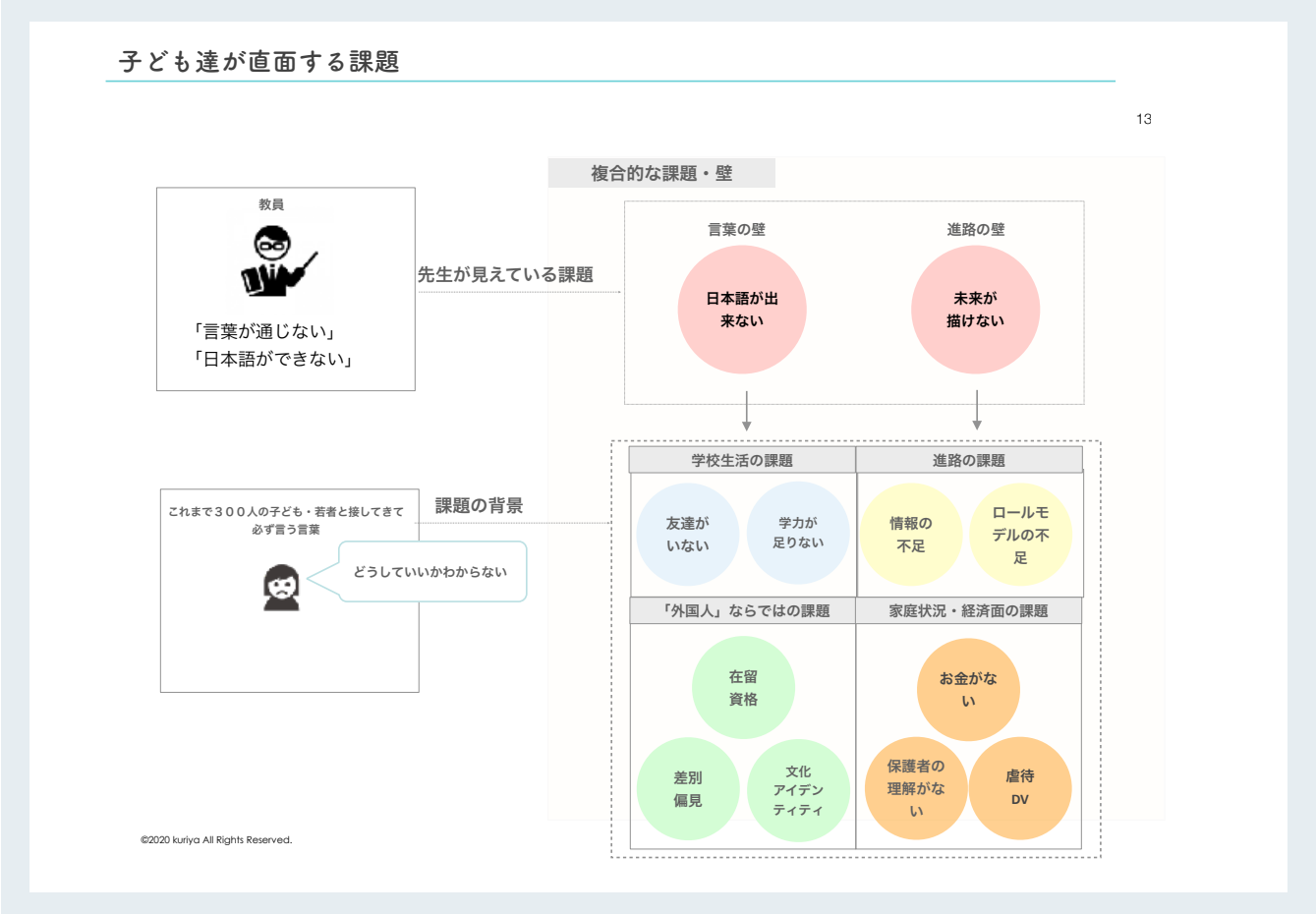
グループでのアイディア共有・発表
第 2 回目プログラムでのダイアログを踏まえ、自身の学校で「多文化共生の文化」をつくるためのアイディアを発表し、他の参加者からのコメントや質問、フィードバックの時間を設けました。

プログラム総括・研修全体の振り返り
このプログラムで得たことや参加者同士での学び合いから、参加者全体としての「多文化共生の文化」に関する定義・概念整理をするため、プログラム全体の総括を行いました。

（2）プログラムでの学びから生み出したメッセージ

「多文化共生の文化」共創プログラムでは、基調講演や多文化共生、外国籍・外国ルーツを持つ日本人の支援を行う機関への訪問を通して、それぞれの参加者の学校が抱える課題や取り組みについて、対話を重ねながら学びを深めてきました。

基調講演①として、JICA 国際協力推進員（外国人材・共生）の海老原氏から、外国ルーツのある児童生徒の支援について紹介いただき、教員から見えている課題の背景には様々な原因が隠れているということを説明いただきました。
生徒の多くが訴える悩みは「相談する人や友達がいない」ということから、どうしていいかわからない、という状況になっている場合があると指摘しています。日本語ができないことによる学力の問題や「友達がいない」ということの背景には、差別・偏見への恐れ、在留資格や文化、自身のアイデンティティに関わる外国人ならではの課題があるといいます。また、未来が描けないという進路の壁についても、情報が不足していること、ロールモデルが不足しているという進路選択の課題だけではなく、お金がない、保護者の理解がない、虐待や DV といった家庭状況などもその背景にある課題として紹介しています。

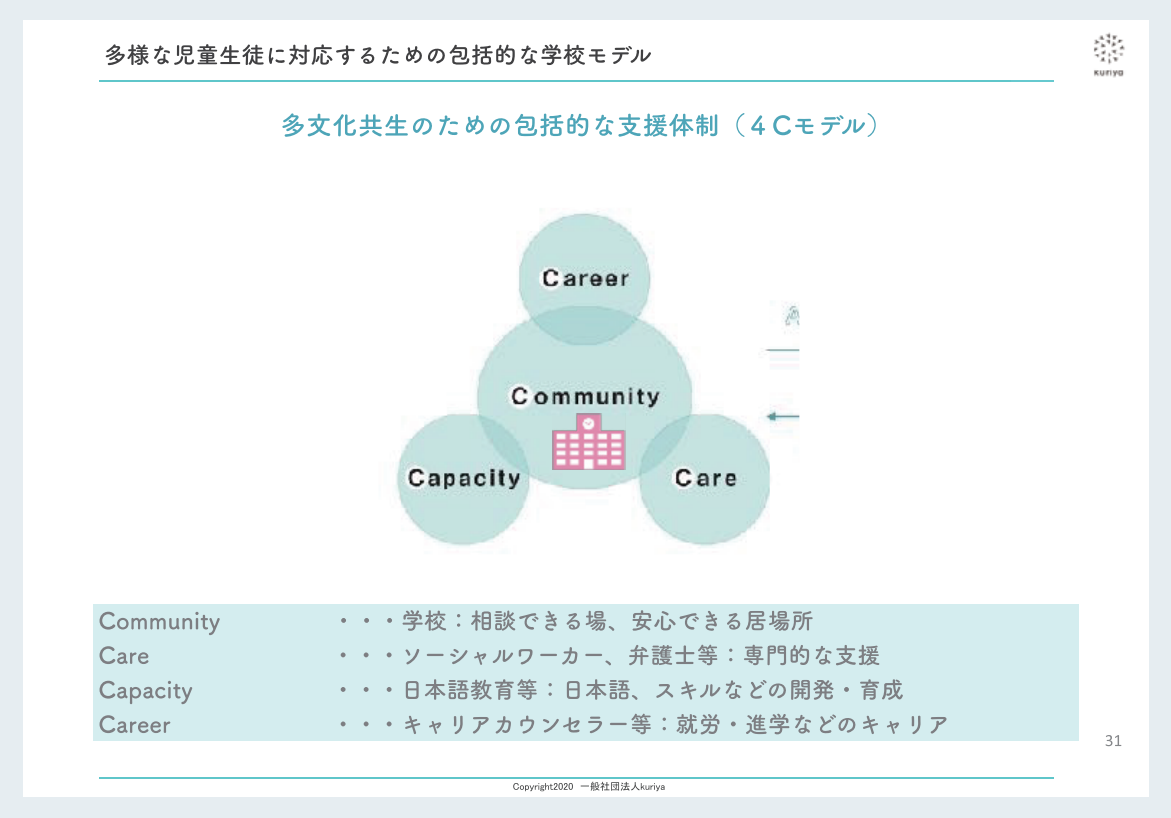


© 一般社団法人 kuriya

これまで外部機関として学校と連携してきた事例として、生徒の学校内外での居場所（友達ができる場所、素になれる場所）を作ることや、自分の強みを見つけ社会と繋がる活動を通して児童生徒の出番を作り、体験を通して自己肯定感を高めていく活動を紹介いただきました。
最後に、多様な児童生徒と「共に」を考える文化を醸成するには、学校だけでは限界があるため、外部との連携を活用する仕組みや体制が必要だと強調されました。多文化共生のために必要な4つの C

1. コミュニティ（学校、相談できる場、安心できる場所）
2. ケア（ソーシャルワーカー、弁護士等の専門的支援）
3. キャパシティ（日本語教育等：日本語、スキルなどの開発・育成）
4. キャリア（キャリアカウンセラー等：就労、進学などのキャリア）

という包括的な支援体制を紹介、学校自体が多様な人材や団体と共に連携し、頼ることが大切だとお話されました。



© 一般社団法人 kuriya

鶴見国際交流ラウンジの沼尾氏からは、横浜市鶴見地区の多文化共生にまつわる歴史的背景から現状についてご紹介いただきました。それぞれの言語での行政サービス支援や、学習支援をしていくことで、学校の外に寄り添ってくれるお兄さん・お姉さんがいる居場所を作ることで、進路意識の刺激や、社会と繋がる経験を提供していました。

多文化共生に向けた学校づくりのための「基盤づくり」として、我々がすぐにでも取り組めるものは、国勢調査の都道府県、各市区町村別の外国人在住者数を用いて、自身の勤務校とその地域にどのくらい外国ルーツの児童生徒がいるのか現状把握をしていくことでした。幼保小連携、小中連携で、外国につながる子どもたちの在籍を共有化することも大切であると確認しました。また、園、学校及び地域が連携して外国ルーツの子どもたちと日本人の子どもたちのつながりを継続し広げることが、外国人と日本人が互いに地域の構成員として認め合い、多文化共生の地域づくりの原動力となることも確認しました。加えて、勤務校の地域に住む外国人・外国ルーツの児童生徒の構成を見ながら、どうしてこの地域に住んでいるのか、その地域的背景、歴史的背景があれば調べていくことが大切であるということを強調されていました。

当事者である児童生徒に対しては、「眼差しだけでも支援になる」と話され、その子のことを本気で思って見守るということが大切だと、支援する側のあり方について大切なメッセージをいただきました。

鶴見地区は早い段階から、沖縄や朝鮮からの移住者が多い地域でした。その後南米に繋がる人が移住してきましたが、その多くがかつて沖縄からボリビアへ移住した人々の関係者で、その後鶴見に移住したという歴史的な背景につながるそうです。こうした鶴見の沖縄・南米コミュニティの支援をしている、NPO 法人 ABC ジャパンの安富祖氏からは、日本人と外国人が交流する機会が少ない、移住者の生活基盤が不安定で情報が不足していること、授業についていけない子どもがいることなどの課題が共有されました。そのため、大人の自立支援（日本語教室、日本語能力試験や電気工事士試験対策を、現場で使われる日本語の説明とともに教授する）、心のサポート（移民特有の心理的サポート）、被災地支援、コミュニティづくりといった活動を学校で取り組んでいます。

子どもたちの支援においては、学校によって支援体制がバラバラであったり、教育制度が違うことから、学校の仕組みや文化などを理解するための多言語ハンドブックの作成や、家庭学習支援、フリースクールを通した居場所づくり、進学案内や就職支援をオンラインでも実施しているそうです。親や先生だけではなく、他の大人にも背中を押してもらえること、一緒に考えてくれるような大人がいることの重要性や、自分のルーツからアイデンティティを持つために自分を知ること、親同士で仲良くなる機会を作るといった草の根の活動が、現場では求められていることであるということを学びました。

横浜市上飯田小学校の国際教室担当　菊池先生からは、学校を通して実践してきた、多文化共生に向けた学校での取り組みに

ついて紹介いただきました。「我々は『多文化教員』として、『日本人』であることを前提とした教育ではなく、民族的少数者の多様な価値観と文化を尊重し、文化的多様性や多様な学習スタイルを奨励して、言語文化を学習カリキュラムに取り入れた『多文化教育』の構築を目指さなければならない。」と、多文化教育のあり方について話されました。そして具体的な支援として、日本語で同様に学ぶことが難しい場合、母語で学ぶ機会を作ること、文化間を移動する子どもたちを自主的に同化させないために、様々な 異文化に触れる機会を作ること（ 他多言語による朝の挨拶、みんなの国の紹介コーナーの設置 ）、少人数授業による個に応じた支援（ 少 人数授業や通訳がついて授業に参加、母語での学習支援、ベトナム語・中国語相談窓口、情報発信等 ）、といった当事者へのアプローチ、そしてマジョリティへのアプローチの重要性を指摘しました。運動会や多文化共生を盛り込んだ学習活動、画一的な計算方法ではなく、それぞれのやり方の計算方法を学ぶ機会や、海外の国を知ろう集会といった学習活動を通して、外国籍・外国ルーツを持つ児童が対等な構成員として社会に参画する環境を整えていったとのことでした。

学校からの配布物の全て（学校だより、学級だより等）日本語のルビを入れる、PTA 会議を夜に開催する、PTA 代表（複数名で会長職を分担する）を海外ルーツの保護者にするなど、国際教室担当だけではなく、一般的な先生にもできるような小さな取り組みを推進して、周囲を巻き込むことの必要性を考えました。最後に、多文化共生は日本人に対するものであり、マジョリティ側の受け皿を整えることの重要性を強調しました。

プログラム参加者はこうした学びや事例の共有を経て、他の参加者による様々な校種からの視点を踏まえ、自身の学校でどのような視点を持って、どのような部分を推進することで多文化共生の文化が構築されるか、その概念をまとめました。

- 「多文化共生の文化」の前提となる考え方として、特別支援教育の視点も交えながら、一人一人の教育的ニーズを把握し、持てる力を高めていくことができる状態。
- 多文化は外国だけではない、他者も異文化であるという認識を持つこと。
- 社会に多文化の受容が無意識に当たり前にできている状態。
- 背景にある価値観として社会の構成員の一員として、共に寄り添い生きるため、それぞれのニーズに合わせた支援をする共助型の教育観を持つこと。

とまとめました。

さらにそこから、どのような取り組みや関わる人たちのあり方が多文化共生の文化をつくることができるか、対話を進めました。

大切な視点	
多数派	マジョリティへの理解促進を図ること
同調から協働へ	同調圧力からの脱却、自由の相互承認、帰属意識の醸成
学びの目指す目標	他者への尊重、平等・対等意識、当事者意識を持てる人に、誰にでも違いはあると気づき、認める、違いと共に共通点も見つけ認め合えるようになる、知ることを楽しむ、過去・現在・未来を知る姿勢
目指す人材像	母語・母文化の保持ができている、自分が自分でいられる、自分のありのままを受け入れられる、自分が何者か自覚的できている、自分が好き、など、アイデンティティや自己肯定感が確立されている状態

取り組むポイント	
居場所	心理的に安心でき、誰もが安心して過ごせる場づくり、それを包み込む豊かな土壌
機会	他者と、外部と繋がる機会、海外や多様な文化を体験できる機会、子どもが発信できる機会
システム（制度）	コーディネーター制度、地域との連携、保護者の支援、理解促進、組織力・体制
同調から協働へ	同調圧力からの脱却、自由の相互承認、帰属意識の醸成

(3) プログラム出席者一覧

参加者

	名前	都道府県	所属	職名・担当業務
1	塚田 初美	北海道	旭川市立緑が丘小学校	教諭 理科専科
2	宮浦 匡典	北海道	北海道江別市立江別第二小学校	教諭
3	三浦 学	宮城県	宮城県宮城第一高等学校	教諭・情報化推進リーダー
4	網敷 俊志	茨城県	清真学園高等学校・中学校	教諭 数学・理科 研究部
5	上原 秀司	長野県	長野県川上村立川上第二小学校	教諭・特別支援教室
6	森 裕紀子	千葉県	千葉県立桜が丘特別支援学校	教諭・高等部主事
7	兵頭 絵梨	神奈川県	大和市立上和田小学校	教諭・外国語担当等
8	箸本 淳也	石川県	石川県立いしかわ特別支援学校	教諭・学年主任
9	和田 さとみ	岐阜県	岐阜県立東濃高等学校	講師・教務国際主任
10	石動 徳子	兵庫県	神戸市立義務教育学校港島学園	児童支援担当
11	阪井 園子	兵庫県	神戸市立摩耶小学校	主幹教諭、1 年生担任、主任
12	安田 誠	大阪府	箕面自由学園中学校・高等学校	中学校　グローバルコース責任者
13	大和田 彩	高知県	高知県立室戸高等学校	教諭
14	越智 由佳	愛媛県	愛媛県立土居高等学校	教諭

主催、運営事務局

所属		名前	職名
主催	JICA	竹田 幸子	JICA 広報部長
		齋藤 克義	JICA 広報部 地球ひろば推進課 課長
		加藤 眞佐美	JICA 広報部 地球ひろば推進課
		前橋 俊輔	JICA 東京 市民参加協力第一課 学校教育アドバイザー
運営事務局	一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）	木村 大輔	GiFT ダイバーシティ・ファシリテーター グローバル教育プロデューサー
		鈴木 沙織	グローバル教育コーディネーター
		忍 頼子	グローバル教育プロデューサー
		福田 美穂	事務局長

3 プログラムを振り返って

多文化共生の文化とは - 教室・学校・地域で取り組むために -

近年、日本に在留する外国人は増加の一途をたどっており、学校に在籍する外国人児童生徒も年々増加しています。「多文化共生」を授業で扱ってきた先生も多いのではないでしょうか。

日本の将来を見据えると、多文化共生、即ち多様性・包摂性のある社会を実現するために、社会全体として「多文化共生」の意識を涵養し、一人一人が包摂的な社会をつくる担い手としての意識を持つことが、持続可能な社会づくりの基盤となることが考えられます。例えば、シンガポールやカナダといった多文化・多国籍な環境にある国々では、文化的・宗教的・民族的に様々なアイデンティティの元に生まれ育った人々が共に暮らすため、生涯教育として異文化理解や多文化共生、多元的なアイデンティティの理解に向けた取り組みをしており、学校教育としても多文化教育の実践が重ねられています。

私たちが日々考える多文化教育、多文化共生とはどのようなことでしょうか？
「多文化共生」という言葉を通すと、主に外国人や外国にルーツのある児童生徒だけを対象とする認識になりがちです。しかし、新学習指導要領の教育理念にあたる前文には、育むべき資質・能力に「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」と記載されています。

そして、なぜ多文化共生に向けた取り組みが大切なのでしょうか？
ユネスコ憲章前文では、これまでの歴史の反省から「戦争は人の心で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不審のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。」と述べられています。
また、2015 年に国連で採択された SDGs（持続可能な開発目標）では、「誰も取り残さない社会」の実現のための指針が示されています。
この考えは、学習指導要領にも反映され「持続可能な社会の創り手の育成」が明記されています。

■ 多文化共生に向けたこれまでの取り組み

総務省では、2006 年に「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、地方自治体に多文化共生の推進に係る指針や計画、グッドプラクティスを紹介してきました。
2020 年には、外国人住民の増加・多国籍化、在留資格「特定技能」の創設、多様性・包摂性のある社会実現の動き、デジタル化の進展、気象災害の激甚化といった社会経済情勢の変化を踏まえ、現在の社会動態を鑑み「新たな日常」の構築に向けプランが改訂されています。具体的な課題として以下の4点が挙げられています。

1. コミュニケーション支援（行政・生活情報の多言語化（ICT の活用）、相談体制の整備、日本語教育の推進、生活オリエンテーションの実施）

2. 生活支援（教育機会の確保、適正な労働環境の確保、災害時の支援体制の整備、医療・保健サービスの提供、子ども・子育て及び福祉サービスの提供、住宅確保のための支援、感染症流行時における対応）

3. 意識啓発と社会参画支援（多文化共生の意識啓発・醸成、外国人住民の社会参画支援）

4. 地域活性化の推進やグローバル化への対応（外国人住民との連携・協働による地域活性化の推進・グローバル化への対応、地域における留学生の就職促進）

本研修で登壇した JICA 国際協力推進員（外国人材・共生）の海老原周子氏によると、2008 年から 2018 年の 10 年間で、公立高等学校における日本語指導が必要な外国籍の生徒は2. 7倍、日本国籍の生徒は2.5 倍に増加しており、公立学校（小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・義務教育学校・特別支援学校）では、日本語指導が必要な児童生徒は1.5 倍に増加しているとのことです。それに伴い、日本語指導の拡充や国際教室の設置条件の拡大などが、政策として期待されています。

一方で、言語の壁は子ども達が抱える課題の中の一部分ということも述べられました。文化の壁、家庭状況、経済状況、友人や相談相手の不足や、自己肯定感を育む機会が限られていることなど、背景には様々な課題があります。
「多文化共生の文化」とは、授業での実践、学校行事や校内の制度・環境や外部機関との協働などを通して、学校に関わる児童生徒・教員、保護者といった様々なステークホルダーで包摂的な文化をつくるための取り組みです。
本研修でも登壇した横浜市立上飯田小学校の菊池聡氏は、ラグビー日本代表のリーチ・マイケル氏の「多様な背景を持った選手がお互いに学べる。」「ラグビー日本代表は日本の現実だし、未来の日本を先取りしている。」という言葉を引用し、今の日本社会が既に多様であること、その上で当事者の支援に当事者の支援に加え、マジョリティに対する理解促進のための取り組みや、学校づく作りが大切だと強調していました。

本冊子「誰もが自分を発揮できる学校づくり～多文化共生アイディア BOOK ～」では、新学習指導要領にもあるとおり、学校の中にある多様性、様々な価値観や背景から構成される児童生徒達が、お互いを尊重し、協働できるような学校作り、つまり、授業を含む学校全体としての「文化づくり」が重要であると考えています。

JICA 地球ひろば・教員向け研修運営事務局
一般社団法人　グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
GiFT ダイバーシティ・ファシリテーター / グローバル教育プロデューサー
木村 大輔

4 多文化共生の文化をつくるための活動アイディア集

活動アイディア集の見方

本活動アイディア集は「多文化共生の文化」共創プログラム参加者により執筆され、
各アイディアにつき以下の内容で構成されています。

1 学校概要
- 学校名
- プログラム参加者（執筆者）
- 全校児童生徒数
- 学校教育目標

2 学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

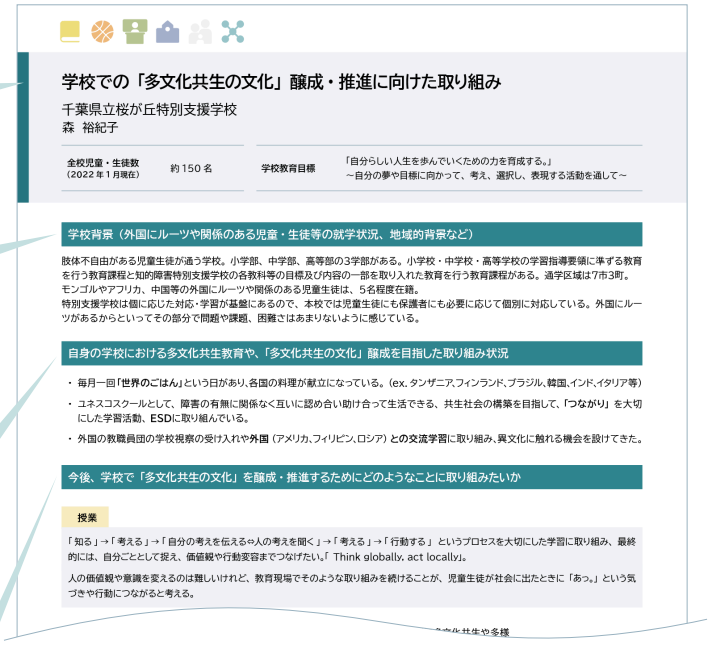
この部分では本プログラム参加者（執筆者）や学校・地域に関する情報を明記しています。

3 自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指したこれまでの取り組み状況

この項目では、これまでにこの学校で取り組んできた、「多文化共生の文化」づくりに関わる活動について記されています。

4 今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

この項目では、本プログラムでの学びを踏まえて、参加者（執筆者）が今後取り組むことを計画している「多文化共生の文化」づくりにまつわる活動や、その考えを示しています。上部のアイコンはこの項目の内容について示したものです。



学校での「多文化共生の文化」醸成・推進に向けた取り組み

千葉県立桜が丘特別支援学校
森　裕紀子

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	約150名	学校教育目標	「自分らしい人生を歩んでいくための力を育成する。」～自分の夢や目標に向かって、考え、選択し、表現する活動を通して～

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

肢体不自由がある児童生徒が通う学校。小学部、中学部、高等部の3学部がある。小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に準ずる教育を行う教育課程と知的障害特別支援学校の各教科等の目標及び内容の一部を取り入れた教育を行う教育課程がある。通学区域は7市3町。
モンゴルやアフリカ、中国等の外国にルーツや関係のある児童生徒は、5名程度在籍。
特別支援学校は個に応じた対応・学習が基盤にあるので、本校では児童生徒にも保護者にも必要に応じて個別に対応している。外国にルーツがあるからといってその部分で問題や課題、困難さはあまりないように感じている。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

- 毎月一回「**世界のごはん**」という日があり、各国の料理が献立になっている。(ex. タンザニア、フィンランド、ブラジル、韓国、インド、イタリア等)
- ユネスコスクールとして、障害の有無に関係なく互いに認め合い助け合って生活できる、共生社会の構築を目指して、「**つながり**」を大切にした学習活動、ESDに取り組んでいる。
- 外国の教職員団の学校視察の受け入れや**外国**（アメリカ、フィリピン、ロシア）**との交流学習**に取り組み、異文化に触れる機会を設けてきた。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

授業

「知る」→「考える」→「自分の考えを伝える⇔人の考えを聞く」→「考える」→「行動する」というプロセスを大切にした学習に取り組み、最終的には、自分ごととして捉え、価値観や行動変容までつなげたい。「Think globally, act locally」。

人の価値観や意識を変えるのは難しいけれど、教育現場でそのような取り組みを続けることが、児童生徒が社会に出たときに「あっ。」という気づきや行動につながると考える。

国際教室

国際教室がある学校
外国にルーツをもつ児童・生徒の支援を行う「国際教室」が設けられている学校であることを示しています。

アイコンの説明

アイディア集に記載している内容をアイコンで示しています。

授業	児童・生徒向けに、授業の中で取り入れることのできる「多文化共生」について記しています。
課外活動	児童・生徒向けに、学校行事等の課外活動として取り組むことのできる「多文化共生」について記しています。
教員の学び・あり方	「多文化共生の文化」をつくるための、教員が学べる環境、教員の姿勢・あり方について記しています。
校内の仕組み	「多文化共生の文化」をつくるための、校内の制度や仕組み、カリキュラムについて記しています。
保護者	「多文化共生の文化」をつくるための、保護者に向けた活動や保護者を巻き込む活動について記しています。
外部連携	「多文化共生の文化」をつくるための、外部機関と連携した活動について記しています。

多文化共生状況は学校や地域により異なります。本アイディア集においても、その環境的な前提が多様であることから、まず次ページの「活動アイディア集の全体像」を確認の上、ご自身の関心のあるものからご覧ください。

活動アイディア集一覧

ページ	学校名／都道府県／全校児童・生徒数（2022年1月現在）		学校背景･地域背景（原文より一部抜粋）
14	**千葉県立桜が丘特別支援学校**	千葉県　約150名（小学部・中学部・高等部合計）	肢体不自由がある児童生徒が通う特別支援学校で、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に準ずる教育を行う教育課程と、知的障害特別支援学校の各教科等の目標及び内容の一部を取り入れた教育を行う教育課程がある。モンゴルやアフリカ、中国等の外国にルーツや関係のある児童生徒は、5名程度在籍。
16	**石川県立いしかわ特別支援学校**	石川県　424名（小学部・中学部・高等部合計）	肢体不自由と知的障害の2つの障害種に対応する総合型の特別支援学校であり、児童・生徒は県内の広範囲の地域から通っている。6学部のうち、肢体不自由部門小学部には、外国ルーツの児童は現在在籍していないが、来年度入学予定である。他の特別支援学校にも外国にルーツや関係のある児童・生徒の就学はあると考えられる。
18	**旭川市立緑が丘小学校**	北海道　231名	旭川市全体の外国人児童数は 14 名、帰国児童数は 9 名。その中で本校の外国につながる児童数はごく少数である。校区内に旭川医科大学や専門学校があり、外国人留学生の姿はよく見かける。先住民族であるアイヌの学習は、主に3・4年の社会科や総合的な学習の中で行われている。
22	**神戸市立摩耶小学校**	兵庫県　395名	外国につながりをもつ児童は割合として多くはなく、またどの子も、日常生活の日本語に大きな問題は感じられない。PTA 活動が盛んで、さまざまな教育活動に協力してくださる地域の方々に見守られて、地域との関わりが深い学校である。 別添資料（絵本リスト）：P24-27
28	**大和市立上和田小学校**	神奈川県　273名	外国につながる児童は、全体の6%在籍している。卒業後は地域の公立中学校に進学するケースが多く、ほとんどの児童は9年間を共に過ごす。地域の背景として、難民定住センターが市内にあったことから、アジア諸国につながる子どもが多い。その他、入管法改正後に南米系のコミュニティーも増えている。コロナ禍以前の2018年は、新しく増えた市民の53%が外国籍だったというデータがある。
30	**神戸市立義務教育学校港島学園（小学部）** 国際教室	兵庫県　560 名	校区に留学生会館や国際研究機関があり、市の中心地に近いことから、地域には外国人が多く在住している。近年では国際結婚も多いことから、外国につながりをもつ児童が多い。小学部では、アジア・中東・ヨーロッパ・アフリカ諸国など約 20 か国・地域にルーツをもつ児童が、全児童数の 12%在籍している。このような状況から、小学部には国際教室（外国につながる児童への日本語指導・適応支援・教科学習支援などを行う教室）が設置され、日本語指導加配教員が 1 名配置されている。

授業　課外活動　教員の学び・あり方　校内の仕組み　保護者　外部連携

ページ	学校名／都道府県／全校児童・生徒数（2022年1月現在）	学校背景・地域背景（原文より一部抜粋）
34	**川上村立川上第二小学校** 長野県　73名	八ヶ岳東麓、千曲川源流の高原野菜の産地。国際結婚によりアジアなどの外国にルーツを持つ保護者もいる。農業に携わっている家庭では身近に技能実習生がいる。広くアジアの国々から集まっているものの、文化的な交流はほとんどない。
36	**江別市立江別第二小学校** 北海道　593名	外国にルーツや関係のある児童は2％程度。（今後の調査で増える可能性がある。）外国にルーツをもつ児童には、飲食店や中古車販売の仕事に携わる保護者が多い。屯田兵開拓の地であり、その当時から住み続ける家庭が多い土地柄である。
38	**清真学園高等学校・中学校** 茨城県　中学校　420名 高等学校　480名	私立の中高一貫進学校。近年は地元出身者の子女の割合が多くなり、この中には外国にルーツや関係のある生徒も少なくなく、保護者対応などでコミュニケーションに不安を感じる場面も見られる。すでに近隣学校の中には、外国籍の保護者を持つ生徒の割合が増えている学校もあり、今後はこのような生徒が増えてくるものと考えている。
40	**宮城県宮城第一高等学校** 宮城県　831名	外国にルーツや関係のある生徒は把握している限りそれほど多くないものの、学校が位置する仙台市では、外国人人口は増え続け、現在約1万3千人の外国人が生活している。その中で雇用された人、定住する人や母国から家族を呼び寄せる人も増え、仙台市の小中学校では、全体で150名の外国籍の児童生徒が在籍している。
42	**愛媛県立土居高等学校** 愛媛県　241名	当市は紙製品関連の売り上げが日本一で、本校では、卒業後に四国中央市の紙関係の企業に就職する生徒が70％以上を占める。外国にルーツや関係のある生徒数は少数でである。工業が盛んであるため、外国人労働者が町に多くいるが、移住者が少ないこともあり、分断されている印象を受ける。
44	**岐阜県立東濃高等学校** 岐阜県　327名 国際教室	平成18年に外国人生徒選抜が実施されてから、外国につながる生徒数は年々増加傾向にあり、令和3年度は、全校生徒327名のうち、148名の生徒が外国につながる生徒で全校の45％を占めている。今年度の外国につながる生徒の国別内訳人数は、フィリピン（85名）、ブラジル（56名）、中国（3名）、ペルー（1名）、ドイツ（1名）、ルーマニア（1名）、パキスタン（1名）である。

学校での「多文化共生の文化」醸成・推進に向けた取り組み

千葉県立桜が丘特別支援学校
森　裕紀子

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	約150名	学校教育目標	「自分らしい人生を歩んでいくための力を育成する。」 ～自分の夢や目標に向かって、考え、選択し、表現する活動を通して～

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

肢体不自由がある児童生徒が通う学校。小学部、中学部、高等部の3学部がある。小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に準ずる教育を行う教育課程と知的障害特別支援学校の各教科等の目標及び内容の一部を取り入れた教育を行う教育課程がある。通学区域は7市3町。
モンゴルやアフリカ、中国等の外国にルーツや関係のある児童生徒は、5名程度在籍。
特別支援学校は個に応じた対応・学習が基盤にあるので、本校では児童生徒にも保護者にも必要に応じて個別に対応している。外国にルーツがあるからといってその部分で問題や課題、困難さはあまりないように感じている。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

- 毎月一回**「世界のごはん」**という日があり、各国の料理が献立になっている。（ex. タンザニア、フィンランド、ブラジル、韓国、インド、イタリア等）
- ユネスコスクールとして、障害の有無に関係なく互いに認め合い助け合って生活できる、共生社会の構築を目指して、**「つながり」**を大切にした学習活動、**ESD**に取り組んでいる。
- 外国の教職員団の学校視察の受け入れや**外国**（アメリカ、フィリピン、ロシア）**との交流学習**に取り組み、異文化に触れる機会を設けてきた。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

授業

「知る」→「考える」→「自分の考えを伝える⇔人の考えを聞く」→「考える」→「行動する」 というプロセスを大切にした学習に取り組み、最終的には、自分ごととして捉え、価値観や行動変容までつなげたい。「Think globally, act locally」。

人の価値観や意識を変えるのは難しいけれど、教育現場でそのような取り組みを続けることが、児童生徒が社会に出たときに「あっ。」という気づきや行動につながると考える。

- 準ずる教育課程の児童生徒を対象とした授業では、**総合的な探究（学習）の時間**に多文化共生や多様性の理解につながる内容を必ず扱う。
- 知的障害と肢体不自由を併せ持った児童生徒を対象とした授業では、**総合的な探究（学習）の時間**や**生活単元学習**の時間等に多文化共生や多様性の理解につながる内容を扱う。児童生徒にとって身近な「衣・食・住」をテーマにすると興味関心が高く、意欲的に学習に取り組めることが多い。
- 音や映像、画像などの聴覚や視覚情報を多く取りいれることはもちろんのこと、「香り」「触感」「味」など、より実感を伴いやすいような体験活動を多く取り入れた授業を展開する。（例：外国の服を着る、触る、外国の料理を作って食べる、スパイスの香りをかぐ、等）

自己理解
他者理解
価値観
共生の意識

課外活動

自分が知らない世界を知ること、多くの人に出会うことは、多様な価値観に触れ新しい発見や気づきにつながり、児童生徒の視野を広げることにつながる。「本物に触れること」「実体験」を大切に。

- **校外に出てたくさんの人や場所に触れる機会**を設けたり、**外部講師を招いての授業**の機会を設ける。外国の文化に触れること、日本の歴史や文化に触れること、日本も外国も両方大切。
- 児童生徒たちがより多くの方と出会い、様々なことを体験することができるように、**ユネスコスクール**や**オリパラ教育推進校**という強みを生かして交流学習の機会を設定する。

機会・場を創る

学校全体へのなげかけ

何か新しいことを・・・という志も大事だが、「既存のものを発展させていく」という視点も大事。同僚に対して「負担感」を感じさせないようにしながら進めていくこと、まずはいくつかの学級単位や学年単位、学部単位で。それを少しずつ全校へと広げていく。いきなりではなく少しずつ賛同者を増やしていく。できることから少しずつ。児童生徒が変われば、「いいかも！？」と感じる教員が増え、「私もやってみようかな」という人が増えれば good。

既存の取組や
環境を発展させる
生徒主体
周りを巻き込む

- 世界のごはんの日にその国の音楽を流してもらえるように呼びかける。
- 世界のごはんの日の献立紹介掲示板は、今は教員が作成しているが、掲示板に児童生徒も関われるように担当教員に提案する。
- 図書コーナーの充実。多文化共生や異文化理解につながる絵本の購入と特集コーナーの設置を担当教員に提案する。

教室・学校内の環境

視覚的な情報は、障害の有無や国籍等にかかわらず、多くの人にとって理解しやすいことが多い。ユニバーサルデザインやシンボルマーク、ピクトグラム等を学校内でも多く取り入れていけるとよい。それが誰にとっても生活しやすい環境の実現につながる。

また、掲示物や特設コーナーの設置は視覚的に情報を伝える力があるので、効果的に利用するとよい。常に目にしていると自然と意識が向上していくことにつながる。

視覚情報
ユニバーサル

- トイレや特別教室の表記を日本語だけでなくピクトグラムを使用する。
- 授業や部活動、課外活動等の様子を掲示物にして廊下に掲示する。ESDやオリパラ教育、道徳教育等は廊下に「〇〇コーナー」「〇〇掲示板」という場所を常設で設置し、校内の児童生徒・教職員・保護者の目に触れるようにするだけでなく、地域の方や来校者にも見ていただけるようにする。

学校運営

組織として取り組めるように校内分掌の中に担当者を位置づける。

組織力
つながり

- 本校ではESDという分掌があり、小中校それぞれの学部に担当者がいて、学校全体でESDに取り組んでいけるように組織づくりをした。もし、外国にルーツや関係のある児童・生徒が増えた場合、各担任だけで解決することは難しくなるので、校務分掌の中に担当者を位置づける。担当者が窓口となって外部組織との連携を図ったり、学校全体で対応できるような組織づくりを行ったりする。

外部との連携

地域の方には、本校のことをより多くの方に知っていただくこと、本校児童生徒職員は、地域の方にどのような方がいるのかを知ることが第一歩。そしてお互いに困っていることやニーズを把握し、よりよい社会を築いていくためにできることを一緒に考え行動していきたい。

つながり
外部連携
生徒主体

- 本校での取り組みを地域の方に知っていただき、地域の方も一緒に「多文化共　生や共生社会の構築」について考え取り組んでいけるよう、**ミニ集会**で**生徒達**が「ESD」や「多様性」、「多文化共生」の視点での**話題提供者**になり、一緒に話し合いをして**意見交換**する場を定期的に設ける。
- 肢体不自由の児童生徒たちがどのような視点をもって「生活のしにくさ」を感じているのかを、本校職員にむけてだけでなく、児童生徒達自身が地域の方や近隣の小中高校の児童生徒や先生方などにも伝える機会を設ける。
- 地域の方と児童生徒、教職員が一緒に何かを実施することでお互いのことを知り合える！一緒に地域の清掃活動をしてみてはどうか？という声があがっているので、実現させたい。

交流・共同学習による「マジョリティからマイノリティへの気遣い」精神の育成

石川県立いしかわ特別支援学校
箸本 淳也

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	424名	学校教育目標	児童生徒の障害の状況及び特性に基づいた教育を行い、将来の自立をめざして一人一人の生きる力を伸ばし、自分らしく心豊かに生きていこうとする人間を育てる。

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

本校は、肢体不自由と知的障害の2つの障害種に対応する総合型の特別支援学校であり、それぞれ小学部、中学部、高等部の6つ学部に424名の児童・生徒が在籍している。児童・生徒は県内の広範囲の地域から通っている。また、外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況については、学校内で情報共有がされていないのが現状である。私が在籍している肢体不自由部門小学部には、現在、該当する児童は在籍していないが、来年度、入学予定である。他の特別支援学校にも外国にルーツや関係のある児童･生徒の就学はあると考えられるが、就学状況等の詳細については不明である。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

本校や本県では、外国にルーツや関係のある児童・生徒が就学している教室はかなり少ない。また、**特別支援学校では、国籍の違いによる言葉の壁や学校生活での困り感等は児童・生徒の実態から、通常の学校よりも小さいと思われる。ただ、特別支援教育そのものが「多文化共生の文化」の醸成を目指した取り組みのヒントになるのではないか。**特に、特別支援学校と通常の学校で行われている「交流及び共同学習」は、双方の異なった文化の共生や「多文化共生の文化」の醸成を目指した取り組みの1つである。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

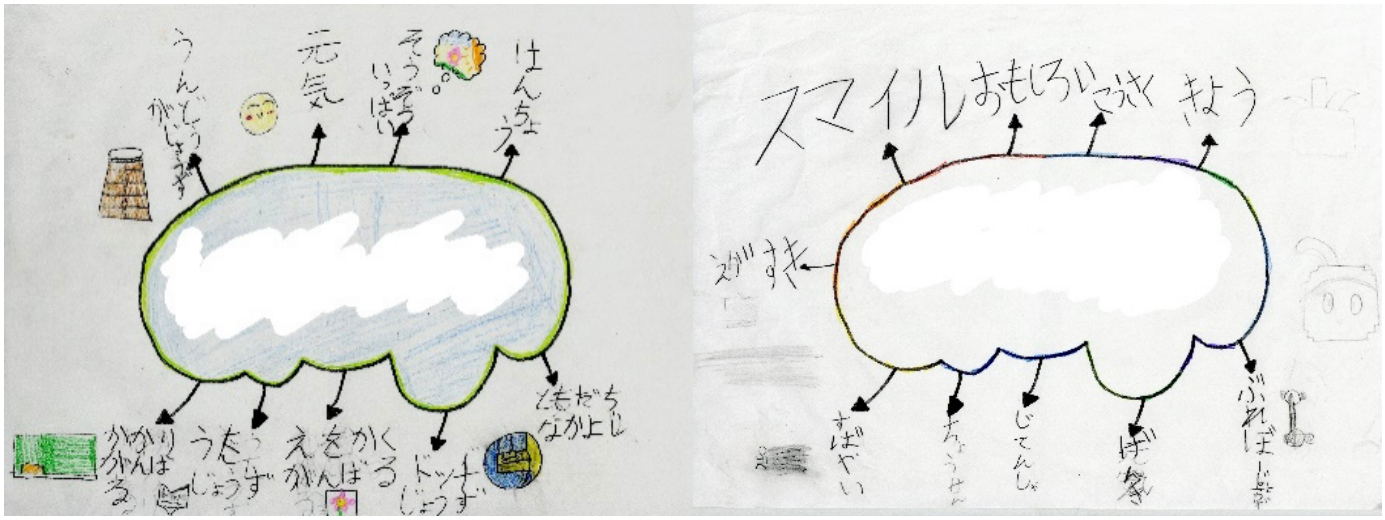
まずは、**本校、本県における外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況について把握し、児童・生徒の困り感について知りたい。**各校で情報を整理、発信、共有できる体制づくりが必要だが、現状、特別支援教育コーディネーターや英語科部会等が中心となるのではないか。また、本校でも、来年度、対象の児童・生徒が入学予定であり、今後、外国にルーツや関係のある児童・生徒が転入学した場合の具体的な支援や環境整備について、先進校から情報を得て、整理していきたい。さらに、「みんな違って、みんないい。」や「マジョリティからマイノリティへの気遣い。」の精神を育む特別支援教育や国際理解教育の理解や啓発は、「多文化共生の文化」の醸成・推進につながると考えるので、それらの実践を積み重ね、成果等を通常の学校に発信させていきたい。中でも「交流及び共同学習」は、その充実を目指して本校でも実践を積み重ねている。実践例として12月に行ったオンラインでの居住地校交流の様子を以下に報告する。

Hello・bye-bye

T小学校の子どもたちと
児童 A のオンライン交流
＜居住地校交流＞

本校児童 A は重度の肢体不自由と知的障害があり、音声でのスムーズなコミュニケーションは難しい。今年度、コロナウィルス感染症拡大予防のため、間接的に居住地校交流を行っていた。人懐っこく、学校生活では人とのかかわりを楽しんでいる A だが、オンラインでの交流は難しい一面があった。しかしながら、T 小学校の子どもたちの成長にもつながることを願い、担任の先生と準備を進め、12 月にオンラインでの交流を実施することにした。これまで何度か手紙でのやりとりを行っていたので、当日は相互の理解を深めるとともに、「自分自身の強み」や「日本の強み」をいっしょに考え、クイズ形式で発表したり、合唱を楽しんだりする活動を行った。活動を楽しむとともに子どもたちは、自己や自国の理解を深めることができた。

交流が終わった後、担任の先生は、「交流の準備を進める中で、言葉で伝えることが難しいところは身振り手振りで伝えようとし、どのようにすればAさんに伝わるか、Aさんに楽しんでもらえるか等、Aさんのことを気遣いながら、みんなで考え、取り組んでいた。」また、「自分の強みをプリントに記載する際、とてもネガティブだった子がAさんに伝えようと、自分の強みを書いている姿がとても嬉しかった。」と子どもたちの変化や成長を話していた。
この交流を通して、「自己肯定感や自己理解を高めることが他者や他の文化を認め、その理解を深めること」や、「マジョリティ側の気遣いや心の成長が共生の文化の醸成や推進の大きなポイントになること」を改めて感じた。



自分の強みを伝えよう

学校のマジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る　～授業実践と授業の公開を通して～

旭川市立緑が丘小学校
塚田　初美

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	231名	学校教育目標	考える子ども　豊かな子ども　強い子ども

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

- 旭川市全体～外国人児童数 14 名　帰国児童数 9 名　旭川市の小学校数 53 校（*1）
- 本校の外国につながる児童数～ごく少数
- 校区内に旭川医科大学や専門学校があり、外国人留学生の姿はよく見かける。
- 先住民族であるアイヌの学習は、主に3・4年の社会科や総合的な学習の中で行われている。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

- 本校における外国につながる児童の対応は、「本人・保護者・担任などの訴え→教務担当者等による聞き取り→教育委員会に日本語支援を要請→支援員と担任との打ち合わせ→支援」である。
- 多文化共生教育をテーマにした研修会等は行われていない。
- 北海道教育委員会ＨＰに「帰国・外国人児童生徒が生き生きと学校生活を送るために～受け入れと指導のＱ＆Ａ～」が提示されている。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

取り組みたいこと　**学校のマジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る ～授業実践と授業の公開を通して～**

■ はじめに

北海道は、外国人が各地に散らばる「散在地域」である。道は、日本語指導が必要な生徒が学校に4人以上在籍するか、2カ国語以上の対応が必要な場合、教師１人を加配できるとしているが、指導が必要な生徒の数が少なく、短期間で帰る生徒が多いこともあり、多くの外国人が住む「集住地域」とは状況が異なっている。（*2）
少子高齢化の進展や経済のグローバル化を背景に、外国人労働者は今後も増加すると考えられ、外国につながる児童・生徒の人数が少ない本地域においても、多文化共生に向けた取組は重要である。

■ マジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る～その理由

多文化共生社会の実現に向けた取組においては、マイノリティ（外国につながる児童・生徒）への支援とマジョリティ（受け入れる日本人）への教育という両面から捉えていく必要がある。
私の立場（理科専科教師）からできることは主にマジョリティ側へのアクセスである。外国につながる子どもと関わったことのない子どもたちは「日本語を教えてあげる」「優しくしてあげる」といった上から目線的に捉えてしまう傾向がある。逆に、学級に外国につながる子どもが在籍している場合は、外見や文化のちがい、言動への違和感などから「わかり合うこと」の難しさを感じている様子が見られる。

*―マジョリティ（日本人）の観点による共生の考え方の見直しである。これまで、しばしば、マイノリティの人びとをどのように主流社会に溶け込ませていくかということが課題であった。しかしそれではマイノリティを「客人」のままにとどめてしまい、「日本人化」しない人びとは、これを異質視し、遠ざけるばかりとなる。マイノリティの人々も仲間として迎え、共に歩むためには、マジョリティの人びとこそが現在のマイノリティの抱える問題を理解し、また理解することで自ら変わり、共に解決していく姿勢に立たねばならない。そのためには、**マジョリティにも多文化共生教育**が必要である。―*（*3）（太字は筆者加筆）

上記のようなことから、私の取り組みたいことを「マジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る」とした。そのことによって、日本人の子どもの視野が広がったり、新しい価値観を身につけることができたりして、それぞれの子どもたちの人生がより豊かになることが期待でき、さらに世界の人々と共に地球規模の問題解決に向けて行動しようとする持続可能な社会の創り手の育成につながると考えたのである。

■ 授業実践と授業の公開を行う理由

授業は、教師にとって最も身近で、多文化共生社会の実現に向けての効果が期待できる方法であり、その授業を本校や近隣校の先生や公開することにより「外国につながる子どもに関わる問題」について知らない、知る機会がない先生たちにも興味や関心をもってもらえるのではないかと考えた。さらに、JICA 等の関連機関担当者による授業参観を通して、情報を共有したり連携を深めたりし、学校を含む地域全体に多文化共生の文化を広げたいという願いがある。

私の取組・学校のマジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る

関連機関との連携

・JICA/JICA旭川
・北海道開発教育ネットワーク(D-net)
（→冬のセミナーにて模擬授業の実践）
・東川町多文化共生室
（→日本語ボランティアに登録）
・川村カ子トアイヌ記念館
（→アイヌ の文化理解だけではなく多文化共生に向けた取組を模索）

本人・保護者支援

～校内支援体制の構築を提案～
＊学校全体で取り組む
＊合理的配慮（丁寧なアセスメントと本人のニーズに合わせた支援）
＊自分らしく過ごせる居場所づくり（自己肯定感を向上させる、母語の保持、アイデンティティの確立等）
＊保護者支援（学級通信の記事にイラストを添付するなどの配慮）
（＊→あるとよいと考えられるもの）

「学校に多文化共生の文化の素地を創る」に向けて大切だと考えること

先行研究・事例の活用

・鶴見国際交流ラウンジの沼尾さんの話
・NPO法人ABCジャパンの安冨祖さんの話
・JICA東京　高崎分室　海老原氏の講演
・横浜市立上飯田小学校　菊池氏の講演
・菊池聡氏の著書
・横浜市立潮田小学校の実践
・本プログラム参加者の実践

学校図書館の活用

・本を授業に取り入れる
・「多文化共生図書」のコーナーの設置の提案
・学校司書や「司書の会」と連携
・読書活動や図書委員会活動（本の紹介や読み聞かせ等）での取組

■ 授業実践例

単元名：	「同級生が外国につながる子どもだったら」
実施教科・領域：	道徳・特別活動等
対象学年：	小学校高学年以上
関連する SDGs	10 番　16 番

単元のねらい

- 肌の色のちがいで人を種類分けできないことを知る。
- 外国につながる子どもが抱えている問題を知る。
- 日本の子どもが違和感を覚える「外国につながる子どもの言動」の背景を考える。
- ちがいを認め合って共に生きようとする心情を育てる。

主に使用する資料

①「同級生は外国人！?」の絵本（別添資料 38（P22）参照）
② 横浜市立潮田小学校の動画
③「『ハーフの子供たちのために』～八村塁のルーツへの誇りと自信」の記事

授業づくりの視点

- 「『～してあげる。』という関わり方を超えて『〇さんがいるからこそ自分の人生が豊かになる』という視点をもつことができるように活動を工夫する。
- 将来、外国人や外国につながる子どもと摩擦を起こさないための教育ではなく、摩擦は起きるだろうから対処するためのスキルや心情を育てておくという視点をもって授業づくりをする。
- 参加体験型手法を用いて自分事として捉え、共感的理解を深められるようにする。
- 視覚的な支援および学習の流れの明確化等により、ユニバーサルデザインの授業にする。

授業の展開と作成した教材の紹介

ねらい1：肌の色のちがいで人を種類分けできないことを知る

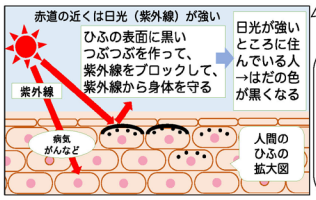
クイズ：人間は、肌の色のちがいで、黒人や白人などの種類に分けられる。〇か×か？

同じ犬という種類だけど、チワワ とかプードルとか種類に分けられるよね。人間は？

資料を見て正解を考えよ

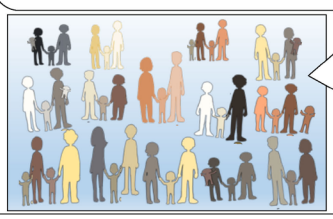
人類は約 10 万年前～20 万年前に赤道アフリカで誕生した。

長い歴史の中で見ると、全ての人間はアフリカ出身で、肌の色は濃かったということになる。（＊4）



紫外線はがんなどの病気を引き起こすけど、一方で身体に必要なビタミンDを作る働きがある。

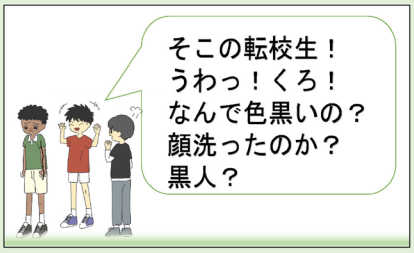
人類は、アフリカから、いろいろなところへ移動した。
北極近くは、紫外線が弱いので、少しでも多くの紫外線を吸収してビタミン D を作りたい。→紫外線をブロックする黒い粒はいらない→北極近くに住んだ人の肌の色は白くなった。



そしてまた、人々は移動して、肌の色のちがう人と結婚して、子どもが生まれて･･･肌の色は多様になった。（＊5）

ねらい2：外国につながる子どもが抱えている問題を考える～外見による差別

発問：「あなたのクラスに外見が外国人の子どもが転校してきたとします。あなたは、すぐに友達になりました。でも休み時間に、別のクラスの子どもがその子をからかっています。その子は言い返したいけど我慢している様子です。あなたは、からかっている子どもに何と言いますか」



外見のことで差別された八村塁選手は、自分の肌の色のことをどう思っているでしょうか（＊6）

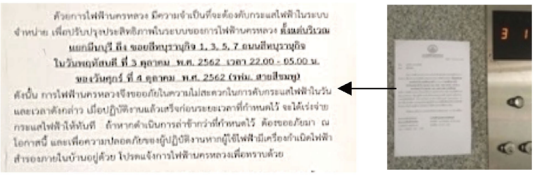
日本にいるときは、黒人に見られたけど、アメリカではアジア人にも見えるらしい。
アメリカには、いろいろな肌の色の人がいる。だから、周りと同じじゃなくてよかったなと思いました。
みんなが同じだったらやっぱつまらないなと。

自分のプレーを見て、
自分の言葉を聞いて、
自分のストーリーを知って
ハーフであることに
誇りや自信を持ってほしい。

見かけがちがうからこそ、自信を持ってほしいなと思います。

ねらい3：外国につながる子どもが抱えている問題について考える
～日本語や日本の文化・ルールがわからない

授業者の経験談
タイで暮らしていた時にエレベーターの中にタイ語で書かれた貼り紙がありました。タイ語が全く読めなかったので、「エレベーター故障のお知らせだ」と勝手に思い込み、エレベーターに閉じ込められるのではないかと不安になりました。さらにタイ語の「助けて～」の言い方もわかりませんでした。言葉がわからないと本当に大変だなあと思いました。

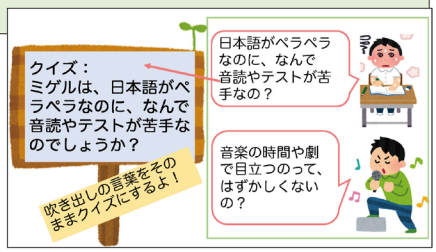


想像してみましょう。
あなたは、親の都合で外国の学校に転校することになりました。学校に行ってみると聞いたことのない言葉でみんなが喋っています。
先生が黒板に書く文字も全く読めません。

発問：親の都合で外国から日本に来た子どもたちの困っていることはどんなことでしょうか

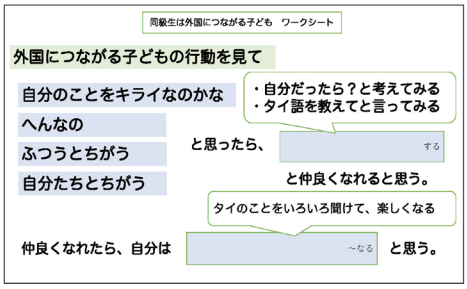
ねらい4：日本の子どもが違和感を覚える「外国につながる子どもの言動」の背景について考える。

「同級生は外国人！？」の中の「リンちゃん」「ミゲル」「ミンダ」「アット」の話を読みましょう。
それぞれの話の中の「どうしてだろう？」「なんか違うな」と思うことに線を引きましょう。
「なんで～なの？」という先生の説明から、クイズを作りましょう。



まとめ：「外国につながる子どもと～すると仲良くなる」「仲良くなると、自分は～になる」を考える。

発問：日本の子どもは、優しくしたり、親切にしたりしたのに仲良しになっていません。実際に外国につながる子どもがたくさんいる小学校の動画を見てみましょう。
・外国につながる子どもと仲良くなるためにはどんなことをすればよいのでしょうか。
・仲良くなることは、あなたにとってどんなことでしょう。↓



おわりに

潮田小学校の動画を見た児童の感想に「お互いの文化や意見を尊重していてこれが「平和」だと何度も思った。」「日本人が無理やりやっているわけでもなくて、外国人が日本人のペースに合わせているわけでもなく、仲良く自分のペースで生活をしていて楽しそうだった。」「日本の子どもも外国につながる子どもも共存して生活していて、このようなことができたら、戦争もなくなるんじゃないかと思った。」などが見られた。
また、八村選手の記事への感想も多く見られた。参観した先生たちからも「学校に必要な取組だ」といった好評価をいただいた。「授業を通して、学校のマジョリティの中に多文化共生の文化の素地を創る」という取組は一定程度の成果が上がったと考えている。
本取組は、多文化を「外国の文化」と捉えた内容となっているが、多文化共生を「異なる価値観をもっている人々の共生」と捉えることが、素地づくりの進展に向けて必要なことだと考えており、今後の活動に生かしたいと思う。

〈参考・引用資料〉

＊１　令和２年度旭川市学校基本調査
＊２　遠藤美波（2019/12/16）「日本支援、ボランティア頼み」
　　朝日新聞デジタル版（北海道）
＊３　日本学術会議低減（2014）「教育における多文化共生」
　　https://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kanji/pdf22/siryo195-5-13.pdf
＊４「光老化」啓発プロジェクト委員会 https://www.hikari-rouka.org
＊５　ピーター・スピアー（1982）松川真弓訳「せかいのひとびと」評論社
＊６　宮地陽子（2019）「ハーフの子供たちのために」
　　八村塁のルーツへの誇りと自信 Number Web
　　吉富志津代（2018）「同級生は外国人！？」汐文社
　　ホランキャスター取材（2020）外国籍の子どもが通う小学校の取り組み　Nスタ YouTube
　　中山京子他（2020）「「人種」「民族」をどう教えるか」明石書店
　　ニーナジャブロンスキー（2009）肌の色にまつわる幻想を打ち砕く TED
　　塚田初美（2019）タイ Thai 通信 18 号
＊授業の詳細は、東京書籍「教室の窓・北海道版 人種・人権）SDGs」４月発行予定（web 版あり）をご覧ください。

低学年におすすめ、ワクワク感あふれる「多文化共生」の土壌づくり

神戸市立摩耶小学校
阪井　園子

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	395名	学校教育目標	希望（のぞみ）は高く広くもち　自らをきたえる子

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

90年以上の歴史ある小学校。摩耶山の麓、河内国魂神社（五毛天神）を下った坂の途中に位置し、高台から海も見えるという、自然が身近に感じられる学校である。3代に渡って本校に通ったという家庭も多く、地域からとても愛されている学校である。PTA活動も盛んで、登下校の見守り隊を始め、さまざまな教育活動に協力してくださる地域の方々に見守られて、子供たちは育まれている。家庭力が高く、地域との関わりが深いこともあって、礼儀正しく、きちんと言葉を遣うことのできる、落ち着いた児童が多い。外国につながりをもつ児童は割合として多くはなく、またどの子も、日常生活の日本語に大きな問題は感じられない。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

☆ 2021年度　日韓中「ストーリーテリングを通じた多文化・多様性教育に関する授業」3、4年生
☆ 2018～2021年度　SDGsに関する取り組み

6年「摩耶っ子SDGsにチャレンジ」（JICA地球ひろば主催の国際理解教育 / 開発教育実践者向け研修、開発教育指導者研修）
1、4、6年「学校教員による持続可能な未来の担い手を育む評価手法開発事業」（ACCU）
4年「エコメッセージ絵画コンクール」
5年「SDGsオリエンテーション」

上記のように、学年の先生方と協力して取り組んできた。3年生以上に対しては、総合的な学習などで、「国際教育」や「多文化共生」の学習を行ってきたが、低学年における取り組みはこれからである。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

そこで、低学年に焦点を当てて、中学年以降の「多文化共生」の学習につながる取り組みを考えたい。

低学年におすすめ、ワクワク感あふれる「多文化共生」の土壌づくり

メタ認知がまだ発達していない低学年の時期に適した、楽しく感性に響くような「多文化共生」の学びを創造したい。そこで、以下2つの取り組みを考えた。

■　1. 絵本を通した「多文化共生」

子供たちにとって、絵本の読み聞かせは楽しみの一つである。本校には幸いにも学校司書がおり、毎週図書の時間に読み聞かせを行っている。また、担任もすき間の時間を利用して、継続的に読み聞かせを行ってきた。更に、「多文化共生」の視点を意識して読み聞かせを行いたい。

ポイント

他者理解・多様な価値観を追体験
出会う機会、世界を楽しむ・興味を持つ機会

☆学校司書との連携（システム作りの一例）

- **図書館に「多文化共生」の絵本コーナーを設置。低学年にも分かるように、タイトルを工夫した。**
- **学校司書の協力を得て、神戸市のネットワークを利用し、「多文化共生」につながる絵本の情報を集めて貰った。**

この取り組みを通して、「多文化共生」は、外国につながる多文化だけではなく、様々な視点から考えられることが改めて分かった。ジェンダー、障害、更には左利きなどレアキッズのための絵本も紹介された。そういった意味では隣にいる友達とも「多文化」であり、一人ひとりの個性を大切にすることが「多文化共生」であることが確認された。それらをまとめて、テーマに応じた絵本リストも作成することができた。（絵本リスト参照　P22-25）

☆授業における実践例

- 道徳科「ありがとうがいっぱい」→絵本「てをつなぐ（鈴木まもる　金の星社）」 37（P24）
- 道徳科「せかいのこどもたち」→絵本「It's a small World　みんなとなりどうし (アーサー・ビナード講談社)」 5（P22）
（音楽科で、歌を歌うことも。）

■ 2. 演劇的手法・インプロビゼーション（即興演劇）を用いた「多文化共生」

遊びやゲーム感覚で、楽しみながら自然な状態での学びを行うことができる。演劇的な活動の中では、価値観の共有を前提とせず、勝ち負けを競わず、変わることをよしとする。友達と、そして自分自身との「対話」的なコミュニケーションを行うことができる。

ポイント

自己理解 (自己肯定感)・他者理解・sympathy(同情) から empathy(共感) へ
みんなちがってみんないい
自分が好きになる、自分らしくいられる、肯定感を得られる、（安心できる場作り）

☆体育科　表現の学習・準備運動（参考文献「子どもたちとレッツ！インプロ！」鈴木聡之　晩成書房）

- 忍者修行〈大人数〉 サークルに並ぶ。
①手裏剣回し。隣の人に、投げて、キャッチを繰り返す。
②遠くの人にも投げる。
- ミラー<2人組>
2人で向き合い、1人が動いたら、もう1人は鏡に映っているその人のつもりで一緒に動く。
- シャドウ<2人組>
１人が動くと、もう１人は、その人の後ろで影のつもりで同じ動きをする。
- ミラー&シャドウ〈グループ〉
縦の列同士が向き合い先頭同士は「ミラー」のルール、後ろに並んでいるメンバーは「シャドウ」のルールで動く。→先頭を入れ替えて繰り返す。
- ナイフとフォーク<2人組>
2人で相談せずに(声を出さずに）身体を動かして出題されたタイトルの形（物）になる。（上手に「モノマネ」することを目指すのではなく、自分の好きなように「 変身」する。）掛け声「(ナイフとフォーク)、3・2・1・変身！」で、2人は、互いの動きをよく見ながら（相手のアイデアを察し合いながら）ナイフとフォーク１本ずつになるように身体を動かす。「 変身！」のところで静止し、互いの形を確認する。もしナイフ2本 orフォーク2本になっていたら、「譲っても」OK あるいは、そのまま「譲らなくても」OK である。「譲らない」意志も、喋らず、身体表現にこめて伝え合う。
- ふりかえり忍者〈大人数〉 だるまさんがころんだの忍者バージョン
オニ (殿 or 姫) が「そこにいるのはだれじゃ?」と目隠しして言う間に、忍者グループは宝物 (バトン・帽子など) を取り戻しに行く。木や花に化けて、近づく。ばれたら、スタートの忍者屋敷に戻る。宝を取り返した後は、宝を誰が持っているのかばれないように、スタートまで戻る。

☆国語科　物語教材において・・・登場人物になりきる・心の声など

どの学校でも動作化などは行われているだろう。場面に応じて演劇的手法を用いることで、その人物の立場に立ち、自分事として考えることができる。理解が深まる。

☆道徳科　ロールプレイ・役割演技

教科書でも推奨されている活動でもある。

☆学級活動　ゲーム感覚で行う、クラスづくり・仲間づくり

みんなで「楽しさ、笑顔を共有できる。誰もが自分が自分らしくいられる場づくりを行うことができる。

別添資料（絵本リスト）

神戸市立摩耶小学校より提供

＊欄外参照

No.		分類	書名	著者名	出版社	出版年	対象	内容	テーマ
1	＊	E	あおいろペンギン	P. ホラチェック 作 青山南 訳	科学同人出版社	2021	低～	見た目が違うことで仲間はずれにされる青いペンギン。夢に見た白いクジラの歌を歌うと…。	違いへの理解 自己肯定感
2	＊	E	あなたがだいすき	鈴木まもる 作	ポプラ社	2002	低～	あなたがいるだけで私はしあわせ	思いやり
3		E	アフガニスタンの少女マジャミン	長倉洋海	新日本出版社	2010	低～	アフガニスタンの山間に暮らすマジャミンの生活を写真で追う。	異文化
4		E	いっしょにおいでよ	H.M. マギー文 P. ルメートル 絵 なかがわちひろ 訳	廣済堂あかつき	2018	中～	世界をすてきなところにするためにできることは？やや抽象的。 作者と画家は、テロを身近で経験した。	友情 平和 相互理解
5		E	イッツ・ア・スモール・ワールド みんなとなりどうし	A. ビナード 日本語詩 J. チョウ 絵	講談社	2012	低～	ディズニーの“イッツ・ア・スモールワールド”を日本語の詩にしたもの	友情 平和 相互理解
6	＊	E	いろいろいろんなかぞくのほん	M. ホフマン ぶん R. アスクィス え すぎもとえみ やく	少年写真新聞社	2018	低～	世界にはいろんな形の家族があることを紹介。	家族 LGBT 多文化 相互理解
7		E	いろいろいろんなからだのほん	M. ホフマン ぶん R. アスクィス え すぎもとえみ やく	少年写真新聞社	2019	低～	からだつきは人それぞれだが、同じところもたくさんある。からだについていろんな角度から考える。	からだ 違いへの理解
8		E	いろいろかぞく	T. パール 作・絵 ほむらひろし 役	フレーベル館	2005	低～	世界にはいろんな形の家族があることを紹介。No. 5より、説明や内容がシンプル、カラフルな絵で、低学年にわかりやすい。	家族 LGBT 多文化 相互理解
9	＊	E	ええところ	くすのきしげのり 作 ふるしょうようこ 絵	学研プラス	2012	低～	わたしには「ええところ」が一つもないとしょげるあいちゃんと、そんなあいちゃんのええところを探しだす友だちのトモちゃん。	違いへの理解 自己肯定感 思いやり
10	＊	E	王さまと王さま	L.D. ハーン / S. ナイランド 文・絵 A. ゲルマー 訳 眞野豊 訳	ポット出版	2015	低～	王子様がひとめぼれしたのは、 花嫁候補の姫の兄の王子さま。絵がユニーク	LGBT
11	＊	E	おんなじ、おんなじ！でも、ちょっとちがう！	J.S. コステキー＝ショウ 作 宮坂宏美 訳	光村教育図書	2011	低～	アメリカ人の男の子がインドの男の子と文通でお互いのことを紹介しあう。同じところ・違うところの発見。	異文化 相互理解 違い
12	＊	E	おんなのこだから あなたへ 14	R. クリスチャンソン 文 にもんじ まさあき 訳 はたこうしろう 絵	岩崎書店	1996	低～	『あなたへ』のシリーズに含まれる。 女の子だから〇〇、男の子だから〇〇という先入観に疑問をなげかける。	ジェンダー
13		36	女の子だから、男の子だからをなくす本	ユン・ウンジュ 文 イ・ヘジョン 絵 すんみ 訳 ソ・ハンソル 監修	エトセトラブックス	2021			ジェンダー
14	＊	E	かっくん：どうしてボクだけ しかくいの？	C. メルベイユ 文 J. ゴフィン 絵 乙武洋匡 訳	講談社	2001	低～	まるい両親から生まれたしかくいかっくんが、悩みながら自分の良さを発見する。	違いを尊重
15			からあげビーチ レアキッズのための絵本	N. キリーロバ 古谷萌 五十嵐淳子	文響社	2021		ベジタリアン・宗教・アレルギーなど、その人の背景によって食べられないものがある人がいることの紹介。	違い 多文化への理解
16		E	カラーモンスターがっこうへいく	A. レナス 作 大友剛 訳	永岡書店	2020			
17	＊	E	カレーのおうさま	山本祐司 作	ほるぷ	2020	低	カレーといえば…食材たちはみな自分がカレーの王様だと言い張る。どの食材が欠けてもおいしいカレーにはならない。	個性 違いの尊重
18	＊	E	くまのトーマスはおんなのこ ：ジェンダーとゆうじょうについてのやさしいおはなし	J. ウォルトン 作 D. マクファーソン 絵 かわむらあさこ 訳	ポット出版プラス	2016			ジェンダー
19	＊	E	くれよんのくろくん	なかやみわ 作・絵	童心社	2001	低	くろくんは、絵を台無しにするからと、真っ白な画用紙に絵を書く仲間に入れてもらえない。	個性 違いの尊重

20	*	E	さっちゃんのまほうのて	田畑精一 作	偕成社	1985	中～	さっちゃんの右手には指がない。ままごとあそびでお母さん役をさせてもらえないさっちゃん。先天性四肢障がい児	違いを尊重障がい
21	*	E	じぶんだけのいろいろいろさがしたカメレオンのはなし	レオ＝レオニ 作 谷川俊太郎 訳	好学社	1978	低～	じぶんのいろをさがしもとめるカメレオン	違いを尊重個性
22		E	ジョージと秘密のメリッサ	A. ジーノ 作 島村浩子 訳	偕成社	2016	中～	外見は男の子だが、内面は女の子のトランスジェンダーの子の思い	LGBT
23	*	E	すき！I like it!	ほん・えすん 作 サタケシュンスケ 絵	教育画劇	2018	低～	いぬはねこがすき！ねこはねずみがすき！みんなのすきがひとつになる。日本語と英語併記	相互理解
24	*	E	すきなことにがてなこと	新井洋行 作 嶽まいこ 絵	くもん出版	2021	低～	「ぼくは〇〇がすき、でもね、△△はにがて。こんなときは△△がすきなAちゃんがいっしょに△△してくれるよ。」の繰り返しで、だれにでも好きなこと、苦手なことがあることがわかる。	得意 不得意 他者への理解
25		E	すごいね！みんなの通学路 ～世界に生きる子どもたち～	R. マカーニー 文 西田佳子 訳	西村書店	2017	低～	いろいろな国の子どもたちの通学路を写真で紹介	異文化を知る
26		E	すずちゃんののうみそ自閉症スペクトラム(ASD)のすずちゃんの、ママからのおてがみ	竹山美奈子 文 三木葉苗 絵 宇野洋太 監修	岩崎書店	2018	低～	自閉症スペクトラムのすずちゃんに代わって、お母さんがすずちゃんの障害の特徴を、幼稚園児対象にわかりやすい言葉で語る	障害 違い
27	*	E	スプーンくん	A.K. ローゼンサールぶん S. マグーン え 石津ちひろ やく	BL 出版	2010	低～	スプーンくんは、フォークさんやナイフさんのようにはできないことを嘆くが、実はスプーンにしかできないことを発見し、自信を持つ。人が主人公ではないが、低学年にはわかりやすい。	自己肯定感 他者への理解
28		38	世界のあいさつ みるずかん・かんじるずかん	長新太 さく 野村雅一 監修	福音館書店	1989	中～	世界のあいさつを、古くから言葉や暮らし方を同じくする人々のグループごとにイラストで紹介。	異文化を知る
29		38	世界のともだち シリーズ 全36巻	長倉洋海 ほか	偕成社	2013～	低～	1冊につき一国の子どもを取り上げ、その子のいろんな生活を写真で紹介。国の説明もあり。	異文化を知る
30	*	E	せかいのひとびと	P. スピアー 絵と文 松川真弓 訳	評論社	1982	中～	世界中の様々な人種・家族の形・服装など、多様な世界をイラストで紹介	多文化 違い
31		E	ぞうのエルマー	D. マッキー 文と絵 きたむらさとし 訳	BL 出版	2002	低～	ゾウの群れの中で、エルマーだけはカラフルなパッチワーク模様だった。違うことが魅力なのだとエルマーを通じてゾウ達が発見する。	個性 違いの尊重
32	*	E	そらをとびたかったペンギン だれもが安心して存在できる社会へ	申ももこ 作 shizu 協力 はやしみこ 絵 佐藤恵子 解説	学苑社	2017	低～	みんなと同じように空を飛んだり、おしゃべりしたりできず、悲しい思いをしたペンギンは、水の中だと楽になることを発見する。巻末に大人の読者向けの解説あり。子どもの反応がとても良かったとのこと。	発達障害への理解
33		E	大統領を動かした女性ルース・ギンズバーグ：男女差別とたたかう最高裁判事	J. ウィンター 著 S. イナースト 渋谷弘子 訳	汐文社	2018	高～	学校・職場で固定観念から来る性差別・人種差別に直面した女性が、努力を重ねて最高裁判事になり、不平等な法律改正を手掛けるまでになる伝記絵本	ジェンダー人種差別 男女差別 困難の克服
34	*	E	たかこ	清水真裕 作 青山友美 絵	童心社	2011	中～	平安朝そのままの女子が転入してくる。言葉・服装が全く違うが、感情はみんなとよく似ている。	多様性 相互理解 違い
35		E	たからものはなあに？	あいだひさ 作 高林麻里 絵	偕成社	2009	低～	なつかは、赤ちゃんの時、「あかちゃんのいえ」から来た。お母さんはなつかを引き取るまでのわくわくした気持ちを語る。	養子
36	*	E	タンタンタンゴはパパふたり	J. リチャードソン・P. パーネル作 H. コール 絵 尾辻かな子・前田和男 訳	ポット出版	2008	低～	実際に NY の水族館であったオスのペンギン同士の子育て	LGBT
37		E	てをつなぐ	鈴木まもる 作	金の星社	2017	低～	男の子が家族と手をつなぐ、家族は先生と、先生は町の人と…手はどんどんつながっていく。	友情 平和

38		33	同級生は外国人!? 多文化共生を考えよう ①どうしてルールが守れないの？ ②どうして頭にスカーフを巻いているの？ ③日本がきらいなのかな？	松島恵利子　編著 吉富志津代　監修	汐文社	2018	中～	同級生が外国人の場合に、子どもが感じる違和感、なぜ？を解説。短いマンガじたてのエピソードが入っており、低学年でもとっつきやすい。	異文化を知る 認め合う
39	＊	91	どうぶつがっこう	トビイ　ルツ　作	PHP 研究所	2014	低～	動物たちが先生で、人間の子どもとシマウマの子どもが生徒のどうぶつ学校。教わるのは、「実験・観察・研究」を通して「心の目」で「自分を観察すること」。読み物だが、わかりやすい。	自分を知る 違い 認め合う
40	＊	E	とんでもない	鈴木のりたけ　作	アリス館	2016	低～	羨ましがられるが、実際は…外から見ただけではわからない悩みを動物で描く。同じ作者で大変そうにみえるけれどそんなことないという内容の『なんでもない』もあり。	いろいろな方向から考える 違い
41	＊	E	どんなかんじかなあ	中山千夏　作 和田誠　絵	自由国民社	2005	低～	目が見えないとはどんな感じか想像。	障がい 違い 思いやり
42	＊	E	ナージャの5つのがっこう	N. キリーロバ　作 市原淳　訳	大日本図書	2018	低～	作者が家族の仕事の関係で、5 か国の小学校に通った経験から、各国の小学校の違いを紹介。身近なことが国によって全く違うので興味を持ちやすい。	文化の違い
43		E	なんみんってよばないで	K. ミルナー　作 小寺敦子　訳	合同出版	2019	低～	これから難民として国を逃れる親子。遠く知らない異国で、何をなくしたくないか、単純な文章で語りかける。低学年でもわかりやすい。	難民 異文化
44	＊	E	にじいろのしあわせ	M. ブンド J. トウィス　作 E.G. ケラー　絵 服部理佳　訳	岩崎書店	2018	低～	米副大統領が飼っている実在のオスウサギが主人公。ウサギのマーロンが恋したのは、オスのウサギだった。	LGBT 個性の尊重
45		E	ねえさんの青いヒジャブ	I. ムハンマド S.K. アリ　作 H. アリ　絵 野坂悦子　訳	BL 出版	2020	中～	イスラム教の女性が髪を隠すヒジャブを買ってもらったねえさんが、初めてヒジャブを巻いて学校に行く日を、妹の目から描く。凛としたねえさんと、からかう男子。巻末にヒジャブについての解説あり。	異文化の理解 思いやり
46		E	ねえねえ、もういちどききたいな　わたしが うまれたよるのこと	J.L. カーティス作 L. コーネル　絵 坂上香	偕成社	1998	低～	両親に生まれた夜のことをくりかえし聞く女の子。しかし、彼女は両親と血縁関係にない。	養子
47	＊	E	ねこのジョン	なかえよしを　作 上野紀子　絵	金の星社	2020	低～	おおぜいのきょうだいたちと一緒にネコのお母さんに育てられた犬のジョン。成長途上で、きょうだいと自分との違いに気づく。	養子
48	＊	E	はがぬけたらどうするの せかいのこどもたちのはなし	S. ビーラー作 G.B. カラス　絵 石川烈　監修 こだまともこ　訳	フレーベル館	1999	低～	抜けた乳歯をどうするか、世界各地の風習をイラスト入りで紹介	異文化を知る
49		E	ハンダのびっくりプレゼント	I. ブラウン　作 福本友美子　訳	光村教育図書	2006	低～	友だちにプレゼントの果物を持っていくハンダの話。登場する動物や果物・風景はケニアが舞台。子どもたちもケニアのルオ人の子どもがモデル	異文化 違い
50			ヒミツのひだりききクラブ レアキッズのための絵本	N. キリーロバ 古谷萌 五十嵐淳子	文響社	2021		左利きについての理解を深める	違い
51		E	ピンクいろのうさぎ	たかおゆうこ	講談社	2021	低～	むれで 1 匹だけピンク色のうさぎは、同じ色の仲間を探しに旅に出る。たどりついたのは、様々な色のうさぎの群れ。	ジェンダー 他者への理解
52	＊	E	ピンクがすきってきめないで	N. オンス　文 I. グリーン　絵 ときありえ　訳	講談社	2010	低～	女の子だけどピンク色はきらいで黒色やクモやクレーンが好きな私。男の子だけど、女の子らしい遊びが好きな友達。「らしさ」に対する先入観への抵抗。	ジェンダー
53	＊	E	ピンクになっちゃった	L. リカーズ　作 M. チェンバレン　絵 明橋大二　訳	1万年堂出版	2013	低～	目覚めると、全身ピンクになっていたペンギンは、同じ色の仲間を探しに出るが…。 いろいろな色の生き物がいることを発見。	個性 違い 多様性
54	＊	E	ふたりママの家で	P. ポラッコ　作 中川亜紀子　訳	サウザンブックス	2018	中～	ママが 2 人の主人公の家にはいろんなルーツの子どもたちが育つ。冷たい目で見る人もいるが、地域に溶け込み、愛情たっぷりに育つ子どもたち。典型的ではない家族の在り方	LGBT 家族 違い 血縁関係にない親子

55	＊	E	へんなの	中山千夏　文 山下雄三　絵	自由国民社	2004		成長して性が決まる海の生き物の話	LGBT
56	＊	E	ぽぉぽぉぽぉってどんないみ？	シン・ヨンヒ　作	岩崎書店	2021	低～	リスンくんと友だちになりたいウサト。でもリスンの言葉はわからず、リスンもウサトの言葉はわからない。 何とかして理解しようとするウサト。	多文化 違い
57	＊	E	ぼくだけのこと	森絵都　作 スギヤマカナヨ　絵	偕成社	2013	低～	家族の中で、クラスの中で、ぼくだけ〇〇なこと、を次々と挙げていく。世界で「これはぼくだけのこと」だと胸を張れることは？	自己肯定感
58	＊	E	ぼくのピンク：みらいのこころをつくる絵本	小田中裕子　作 I. サーリネン　訳 河原奈苗　装画	clover 出版	2020	中～	ピンクが好きな男の子のお話 やや抽象的　高学年くらい向けかもしれない。	ジェンダー 自己肯定感
59		E	ポリぶくろ、1まい、すてた	M. ポール　文 E. ズーノン　絵 藤田千枝　訳	さ・え・ら 書房	2019	中～	アフリカのガンビアに住む少女が、捨てられたポリぶくろの害に気付き、再利用して財布にする事業を始める。	環境・女性の自立･異文化･貧困
60		E	ママとパパをさがしにいくの	H. ケラー　作・絵 すえよしあきこ　訳	BL 出版	2000	低～	トラの両親に育てられたヒョウのお話。新しい家族に迎えられて暮らすことの幸せを描く。	養子
61	＊	E	みえるとかみえないとか	ヨシタケシンスケ 作 伊藤亜紗　相談	アリス館	2018	低～	ちがいについて考える。 視覚障がい者がどのように歩くかをイラストでわかりやすく解説。そこから違う立場の人への理解を深める。	違い 障がい
62		E	みずをくむプリンセス	S. ヴァーデ　作 P.H. レイノルズ　絵 さくまゆみこ　訳	さ・え・ら 書房	2020	低～	遠いところまで水くみにいかなければならないアフリカの女の子の話	違い 異文化
63		E	みんなとちがうきみだけど	J. ウッドソン　作 R. ロペス　絵 都甲幸治	汐文社	2019	高～	みんなと違う見た目、言葉…転校生の視点で、輪に入ることに躊躇する気持ちと、ちょっとしたことで心を開いていく様子を描く。文章が少しわかりにくい。	違い
64	＊	E	ライオンになるには	E. ヴィアー　作 きたむらさとし　訳	BL 出版	2019	低～	「ライオンはおそろしくてあらっぽくあるべきだ」などの固定観念の打破	固定観念 違いへの理解
65	＊	E	ルブナとこいし	W. メデュワ　文 D. イヌュ　絵 木坂　涼　訳	BL 出版	2019	低～	お父さんと難民キャンプにいるルブナはこいしが友だち。ある日、アミールという少年と友達になるが、お父さんが家を見つけたことで、別れの日が来る。	難民 友だち
66	＊	E	レッド：あかくてあおいクレヨンのはなし	C.M. ホール 上田勢子　訳	子どもの 未来社	2017	低～	本当は青いクレヨンなのに、赤いラベルを貼られたレッドは、何をやってもうまくできないが、本来の自分を発見するとどんどんできることが増えてくる。	LGBT 違いへの理解
67		38	わたしのくらし世界のくらし 地球にくらす７人の子どもたちのある１日	M. ラマス　作・絵 おおつかのりこ　訳	汐文社	2018	低～	イタリア・イラン・ペルー・インド・ロシア・ウガンダ・日本の７人の子どもたちについて、住んでいるところ、家族・着るもの・食べるもの・学校の様子などを、落ち着いた色合いのイラストで紹介。見開きで７か国が一目でわかるように作られていてわかりやすい。	異文化 違い
68	＊	E	わたしはあかねこ	サトシン　作 西村敏雄　絵	文溪堂	2011	低～	きょうだいの中で、１匹だけ赤いネコは、まわりから同情、心配されるが、本人は全く動じない。自分を好きでいることの大切さ。低学年でも読みやすい	個性 自己肯定感 違いへの理解
69		E	私はどこで生きていけばいいの？ ～世界に生きる子どもたち～	R. マカーニー　文 西田佳子　訳	西村書店	2018	低～	普通の暮らしをしていた人々が、紛争などによって、平和な地を求めて国を出なければならなくなる。難民の気持ちを写真と言葉で訴える。	異文化 難民
70	＊	E	わたしも水着をきてみたい	ストルク　作 G. シュペー　絵 きただいえりこ　訳	さ・え・ら 書房	2017	中～	異文化の理解 ソマリアからスウェーデンに来た少女が水着を着られるようになるまで。	異文化の相互理解

注：基本的に低学年でも読める絵本を中心にリストアップしました。（中には高学年向けのものもあります）　2022/1 現在

他者を尊重し、受けとめることができる子どもたちの育成

大和市立上和田小学校
兵頭　絵梨

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	273名	学校教育目標	考える子　心ゆたかな子 たくましい子　やりぬく子

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

外国につながる子は、全体の6%在籍している。地域の背景として、難民定住センターが市内にあったことから、アジア諸国につながる子どもが多く、また入管法改正後に南米系のコミュニティーも増えている。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

特別支援学級に在籍する子も6%おり、その中でさらに外国につながるという子もいる。全体的に子どもたちの背景は多様で、認め合い、ともに成長できる関係づくりは必須である。校内研究では「相手の意見を尊重する雰囲気づくりと伝え方の工夫をしていけば、子どもは自分の考えをもち、相手を意識して伝えられるようになる」と仮説を立て、実践している。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

**異なる文化に出会ったときに「それもいいよね」「なるほど」「そうなんだ」と、
他者を尊重し、受けとめることができる子どもたちの育成を目指す**

■ 自己肯定感をはぐくみ、互いを大切な存在だと認めあうことができるような関係づくりに努める

①教師が、子どもたちの文化に寄り添い、受けとめる

教師を含め、子どもたちも異なる背景をもっている。実態を把握し、集団と「同じ」でないことを、すぐに否定しない。子どもは環境や関係によって、ちがう姿を見せる。その子に合う環境やツールが見つかれば、一緒にゴールを目指すことができる。「同じ」を強制するより、集団の中で「ちがい」をどう生かしていくかを、ともに考えるよう努めることが共生への一歩だと考える。教師が子どもたちと向き合い、ちがいを尊重する姿勢を大事にすることが、学級づくりや関係づくりの基盤となると考える。

②子どもたち同士のあたたかな関係づくりをサポートする

自分に自信がなければ、他者と同じことに安心し、より共通点の多い仲間を求めるだろう。しかし「ちがいはあって当たり前」「ちがいがあるって、おもしろい」と、子どもたちが実感できる取り組みを継続することで、自分のちがいを認め、自己肯定感を高めるきっかけにしてほしい。また、ちがいを子どもたち同士が共有し、認めあうことで、あたたかな関係づくりにもつながると考えている。一歩外に踏み出して、他者とわかりあい、高めあう経験を重ねれば、成長した自分が待っていることに気づいてほしい。

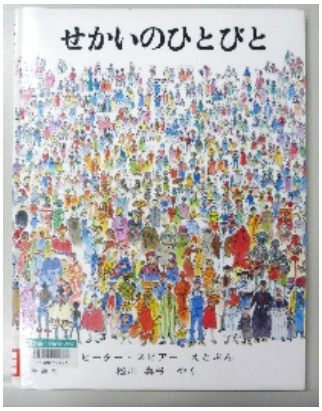
③異なる文化との出会いを楽しむことができるような仕掛けをつくる

他者が発信したこと（意見や考えなど）について、進んであたたかな反応ができるよう、授業やワークショップで使う教材を工夫する。良かったものは校内で共有し、広く活用してもらうことで「誰かにとっていいものは、みんなにとっていいもの」だと、先生方にも実感してほしい。
（例）低学年や特別支援学級にもおすすめの、反応のための「サイン」
2019年度教師海外研修に参加した際、実践のために作ったもので、以後、校内で使われている。

④市の情報を活用する

外国につながる児童・生徒および保護者に寄り添い、スムーズに日本の学校教育に入っていけるように、大和市教育委員会が作成した資料（※）は、日本と他国とのちがいを知るきっかけにもなった。
※ https://www.city.yamato.lg.jp/gyosei/shiseijoho/kokusai_heiwa/gaikokujinnokatahe/9529.html
（参考：大和市教育委員会「楽しい学校」）

■ 低学年でも理解が易しい「絵本」を活用し、多様性に触れる機会をつくる



①多様な世界…ピーター・スピアー『せかいのひとびと』評論社 2014 年

JICA との連携

職員の方に来校していただき、一年生に向けて道徳（国際理解・国際親善）の出前授業をお願いした。アフリカ・マラウイで出会った子どもたちの写真を見ると、子どもたちは「こわい」と、つぶやいた。しかし、話をすべて聞き終わる頃には「ボールを自分たちで作るなんて、すごいね」という感想をもっていた。マラウイの子どもたちの、見た目だけではわからない暮らしや背景（＝文化）を知ることで、親近感をもち、ちがいを受けとめていることがわかった。そこで、次の活動を計画した。

他国の子どもたち（今回はマレーシア）との合同ワークショップ（2/ 1実施予定）

「じぶんは　なにいろ？」…画用紙に印刷された〇（丸）に、自分の思う「自分の色」を自由に塗る。マレーシアの子どもたちと見せ合い、話し合う。最後にふり返る。
解説シンプルな活動だが、色々な気づきが生まれることに期待している。例えば、マレーシアの子どもたちの色を見て「自分と同じ」と気づけば、それは「ちがう国の子とでも、同じところがある」「隣の席の子とでも、ちがうところがある」と知るきっかけになる。「みんなの色が並ぶと、おもしろい」と話す子は「いろんな色がある方が楽しい」「カラフルってわくわくする」と、感じている子かもしれない。

ワークショップ後に『 せかいのひとびと』の読み聞かせ 30（P23）

「みんな同じだとつまらない」「ちがっているって、すてきでしょ」と、はっきりと書かれているので、最初に聞いてしまうと「カラフルに塗らなければいけない」と、思う子がいる恐れがある。自由な発想を大事にしたいので、今回は最後に本を読もうと考えている。

②多様な人…ヨシタケシンスケ『みえるとか　みえないとか』アリス館 2018 年

マレーシアの子どもたちとの合同ワークショップを受けて、学級で実践したい活動 61（P25）

「じぶんは　なにせいじん？」…『みえるとか　みえないとか』を読む。自分が宇宙人だったら、どんなできることやできないことがあるのか、設定をつける。絵を描いたり、ポーズをとって写真に撮り、書き込んだりしてもよい。あたたかな反応をすることを約束とし、友だちと共有する。最後にふり返る。
解説『みえるとか　みえないとか』は、作者が「目の見えない人は世界をどう見ているのか」と考え、作られた絵本だそうだ。からだの特徴や見た目は乗り物で、本当の気持ちや苦労やしたいことは、その人にしかわからない、と書かれている。①ワークショップのとき、同じクラスの友だちでもちがうところがあり、それも素敵だと子どもたちが気づいていれば、先に絵本を読んでおきたい。互いにオープンな関係ができているからこそ、自分の「見た目ではわからないちがい」を表現できると思う。時期を考えて実践したい。

③多様な家族…メアリ・ホフマン『いろいろいろんな　かぞくのほん』」 6（P22）

少年写真新聞社　2019 年

図書委員会の子どもたちによる読み聞かせ

状況によるが、通常は、雨の日に図書委員会の子どもたち（高学年）が、低学年に向けて読み聞かせを行っている。多文化共生のヒントになるような本を取り入れたい。学年を越えて感想を共有することで、特別感のある魅力的な活動になると考えている。
『いろいろいろんな　かぞくのほん』は、現代における「ファミリー」の変化を捉え、多面的・多角的に家族について考え、見つめることができる絵本である。一番身近な存在であるはずの家族でも、気持ちはそれぞれちがう。低学年にとっては「家族のかたちって、いろいろあるんだ」と知るチャンスになるし、高学年にとっては「そう言えば、自分の家族はどんな気持ちなのだろう」と、心に家族の姿が浮かぶ時間になるのかもしれない。ただ、自分の家族と友だちの家族を比べて悲しい思いをしている子がいれば、読むときに配慮が必要である。

「誰もが安心して過ごせる学校」を目指して

神戸市立義務教育学校港島学園（小学部）
石動　徳子

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	560名	学校教育目標	豊かな心　確かな学力　健やかな体

※本校は義務教育学校のため、小学部と中学部がある。「全校児童数」は小学部での児童数。

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

- 地域には外国人が多く在住している。
  →校区に留学生会館や国際研究機関があり、市の中心地に近い。近年では国際結婚も多い。
- 外国につながりをもつ児童が多い。
  →小学部では全児童数の12%が在籍。約20か国・地域と幅広く、アジア・中東・ヨーロッパ・アフリカ諸国など。

⇒地域や学校の状況により、小学部には国際教室（外国につながる児童への日本語指導・適応支援・教科学習支援などを行う教室）が設置され、日本語指導加配教員が1名配置されている。なお、本校では国際教室を「ワールドルーム」と呼んでいる。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

「誰もが安心して過ごせる学校」を目指して
（違いを認め、共通点にも目を向けながら、互いの文化や考え方を理解し、学び合う。）

■ ① To, With　外国につながりをもつ児童

≪一人一人のルーツを大切にし、児童の自己肯定感を高めるために≫

日々の日本語指導や教科学習支援の中で

- 児童が自分の国について話す機会をつくる。（例：話型をもとに、自分の国の行事を日本語で紹介する。）
- 中学部との連携。中学部の生徒も週1回程度ワールドルームへ来て、一緒に学習する。
- 担当教員が日本語を指導するだけでなく、児童から母国の文化や言葉を教えてもらう姿勢をもつ。
- 他の児童と比べない。個人の伸びを認め、褒める。
- 目の前にいる児童が、いま何を必要としているのかを見極める。

ワールドルーム発表会（3 学期）

- 自分の国の紹介や 1 年間の頑張りなどを、児童が日本語でスピーチする。担任をはじめ、他教員にも見てもらう。後日、在籍学級でも発表する。
- 発表会後は、ミニ保護者会（情報提供、保護者同士が繋がる場）を行う。

他校とのオンライン交流

- オンラインを活用し、他自治体の学校とも繋がることができる。「自分の国について」「日生活で苦労すること」「自分が感じる日本の良さ」などについて語ることで、日本語に対する自信が高まると共に、自分のルーツや現在の生活について児童自身が振り返る機会となる。交流相手である日本人児童にとっても、日本や自分たちの生活について客観的に　見つめる機会となる。

他校とのオンライン交流（※コロナ前の写真です）

母語・母文化を大切にした学習活動

- 「地球っ子タイム」…日本文化を体験し、自分の国の文化を発信する（月1回程度）。
- 多言語アナウンス…式や行事の中で、自分のルーツの言語で司会をする。児童が活躍する貴重な機会になる。
- 運動会での多言語応援（※コロナ前）
- 母語教室…現在は、フィリピンにルーツをもつ児童が集まり、タガログ語教室（ 週 1 回程度）を行っている。

≪多数派が少数派の文化を理解し、大事にする環境をつくるために≫

委員会活動（本校では「交流委員会」が行う）の工夫

- 毎朝、校門に立って、友達の国の言葉であいさつ。他にも、友達の国に関するクイズや、海外の絵本の読み聞かせなどを行う。

「総合的な学習の時間」や「外国語・外国語活動」の活用

- 国際理解教育…3～5年生は年間 10 時間程度。6 年生は年間 30 ～ 40 時間程度。（総合の柱が「国際」）
  ※ 6 年「 港島ワールドプロジェクト」（11 時間）
  地域・学校の特性や在留外国人支援団体の活動を理解し、自分たちができる「協力」や「共生」を考え、行動へとつなげる単元学習。その中で、以下の内容を取り入れる。
  - 外国につながりをもつ児童が、自分の国の文化や日々感じていることを発信。
  - 越境体験（シミュレーション）を通して、児童の困り感に気づく。
  - 神戸の歴史（外国との関わり）を理解し、自分たちの地域に誇りをもつ。
  - 6 年生が、学んだことを他学年児童へ発信。
- 外国語・外国語活動…外国につながりをもつ児童の国の文化を理解する絶好の機会。また、英語を母語にしている児童が活躍できる機会でもある。

「外国につながりをもつ児童からの発信」「越境体験」は、特に有効！

日々の学校運営

- 違いだけでなく、同じにも目を向ける。好きなもの（スポーツやアニメなど）で繋がる。
- 教員が児童の国や文化に関心をもつ。

■ ② To, With（外国籍）保護者

〇手紙や通知表の翻訳（母語支援員のお力を借りて）
〇家庭訪問や個別懇談会での通訳（母語支援員のお力を借りて）

■ ③ With　校内教員

〇学級担任との日々の情報交換を大事にする。
〇児童理解研修の内容を工夫する。

- 教員が一人一人の背景を知る。
  （例：渡日時期や理由、家族や家庭内言語について、宗教上配慮すること、進路予定など）
- 疑似体験などを通して、児童の困り感に気づく。
  （例：英語表記の算数の文章題を解いてみる、「やさしい日本語」ワークショップ、生活言語と学習言語について）

〇加配教員として、外国につながりをもつ児童だけでなく、学習理解の緩やかな児童への支援も合わせて行う。
〇学級担任の負担を少しでも軽減できるようにする。

外国につながりをもつ児童への支援は、他の児童にもつながる！

■ ④ With　他機関

〇（外国につながりをもつ児童の）放課後学習教室との情報共有
〇校区の警察との連携（情報モラルや防犯、交通ルールなどを、多言語で保護者に周知）
〇教育委員会管轄の「日本語サポートひろば」との情報共有
（※「日本語サポートひろば」…日本語学習が必要な児童への巡回指導、教員への研修や情報提供、児童や保護者への母語支援などが行われている。）

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

■ ① To, With　外国につながりをもつ児童

≪一人一人のルーツを大切にし、児童の自己肯定感を高めるために≫

卒業・帰国児童の話を聴く機会をもつ

- ロールモデルを知ることで、自分の将来をイメージする。

母語・母文化を大切にした学習活動

- 多言語アナウンス：「通訳」と捉えられ、時間の都合上省かれるケースもあるので、なぜ行っているのかを校内で周知する。
- 母語教室：多言語という本校の状況を踏まえ、言語を増やす。

「地球っ子タイム」より、ルーツの言語で「書き初めをしよう」

≪多数派が少数派の文化を理解し、大事にする環境をつくるために≫

外国につながりをもつ児童の発信

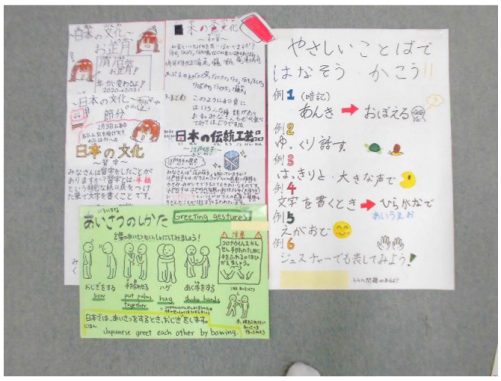
- 「地球っ子タイム」では、外国につながりをもつ児童だけでなく、日本人児童も一緒に体験する。

「総合的な学習の時間」や「外国語・外国語活動」の活用

- 神戸の歴史とともに、日本人が海外で受け入れられてきた歴史を知る。（神戸海外移住センターの資料を活用）
- 6 年生が、学んだことを中学部や地域へも発信する。

日々の学校運営

- 言語以外の表現の場を大事にする。
- みんなで一緒にやり遂げる学習の中で、個々の強みを生かす。
- 「～ができない」⇒その児童やその保護者だからできることがある、という視点の切り替え。



6年総合「港島ワールドプロジェクト」より、児童の作成物

■ ② To, With（外国籍）保護者

保護者同士がつながる機会をつくる。また、保護者への情報提供を丁寧に行う。

- 文化の違う学校生活を理解するためにも、保護者同士のつながりが不可欠。保護者会だけでも毎学期に行いたい。特に年度当初に行うことで、新１年生の保護者が加わりやすい雰囲気を作る。
- よく「郷に入れば郷に従え」と言われるが、その「郷」が外国人保護者にとって分かりにくい。情報を丁寧に伝えるようにする。（実物や写真を見せる、なぜこの学習や行事を行っているのかを説明する、など）

■ ③ With　校内＆他校の教員

校内での児童理解研修の内容を工夫する。

- 小中合同で行う。可能であれば、外部講師を招聘する。
  ※日本語支援の知識がなくても OK、「まなざし」を大切にする。

他校の教員との繋がりをつくる。

- Teams を活用して、担当教員や学級担任が悩みや学びを共有し、繋がりを広げていく。教材や研修に関する情報共有も行う。

※知っておいていただきたいこと
日本語を話している ≠ 授業で学習する内容が分かる

- **生活言語能力**　習得するのに約６か月
  →学校で、先生や友達との関わりの中で身に付けていく。
- **学習言語能力**　習得するのに約５～７年
  →授業の中で培われる。
  授業の中でしか出てこない日本語が、私たちが思う以上に多い。
  また、同じ言語でも、教科によって意味が変わるものがあることに注意。

例：5年社会「人にやさしい自動車づくり」⇔「環境にやさしい…」
　ようす…国語「人物のようす」⇔理科「種のようす」

校内での児童理解研修資料より

職員室の中も、個々の武器を生かして
「多文化共生」を作っていけたら…！

■ ④ With　他機関

（外国につながりをもつ児童の）放課後学習教室との情報共有

- 共動で夏休みの宿題教室も行う。

集団での学びの中にも、「個」が尊重される学びの導入

川上村立川上第二小学校
上原　秀司

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	73名	学校教育目標	心豊かな子　考える子　やりぬく子

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

八ヶ岳東麓、千曲川源流の高原野菜の産地。国際結婚によりアジアなどの外国にルーツを持つ保護者もいる。農業に携わっている家庭では身近に技能実習生がいる。広くアジアの国々から集まっているものの、労働力として期待されているだけで文化的な交流はほとんどない。仕事のノウハウは一世代前に依存することが多く、価値観もまた影響を受けるため、新しいもの、異文化、違いを忌避する傾向もある。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

校内においても、特別な援助ニーズを持つ児童や外国にルーツのある親を持つ児童は少数派として、同化や同調といった、日本の方法に統合する形をとっている。学力テストのスコアに対する学校内外の期待も重なり、学校の信望してきた価値観や文化へのハードルはかなり高い。

文化差への適応は新入生、1年生の課題とも重なるため「スタート・プログラム」を展開し、その適応のパフォーマンスを評価してもらうことで、有効性の検証としてきた。

実施したプロジェクトは「ひょうたん池復活プロジェクト」「明るいトイレプロジェクト」「遠足　DE　プラゴミ拾い」である。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

集団での学びの中にも、「個」が尊重される学びの導入を実施したい。

■「生活・総合」

SDGsの目標を学んで、身近な問題解決を学校の外に向かってプロジェクトできるようにしていく。「今自分達にデキルコト」（各NPO、JICA等との連携）よして、外部団体や校外のリソースを織り込んでカリキュラムを編成していけるようにする。

■「特別活動・児童会」

校内で自分達自身の身近な問題解決ができるような、評価基準（クライテリア）を共創していく。「楽しい学校」プロジェクト

■「教科教育とカリキュラムマネージメント」

- 社会、理科とのリンク：虫や動物から学ぶこと、プラスチックごみ、水の循環、アジアの国々、農業を通して教科間の学びの往還を実施
- 国語、数学でのサポート：ICT 機器の活用、デイジー教科書（ 読むことが困難な児童生徒を対象とした教科書）の活用、人的なサポート
- 英語講師：フィリピンで英語ってどう使われてるの？
- 数字だけに捉われない評価：パフォーマンス評価（ルーブリック）の導入、フィードバックからの目標改善のルーティーン化

■ 問題解決（Problem Solving）から解決構築（Solution Building）へ

解決後のイメージを作ろう 「もし全てが解決したとして、何が見えるかな？」という視点を作り、自 分ごと化につなげる

■ 問題の周辺にあるリソースに気づく仕掛け

土
Soil

厳しくも豊かな環境と命あるものを全てを育む「生活・総合」の体験的な学習
土や水や空気で生き物が繋がっていること。生物多様性に学ぶ 川上犬ジュンと遊ぼう。校庭リンクでスケートを楽しもう。
千曲川源流や金峰山の森に生きている虫や魚、鳥、木や花とつながろう。水と空気で広げよう。

心
Soul

多様な価値が認められるように、過去の地域のリーダーから学ぶ。
満蒙開拓義勇軍、千曲川上流部ダム計画から、「土」や「家族」を守り繋いだ先人の思いに触れよう。
僕が、私が、生きている意味を見つけよう。

社会
Society

多文化共生に向けた地方農村の新しいデザインの模索。
小さな共同体のために、共感と寛容に溢れる持続可能な学校コミュニティーづくり。
いろんな国から来たお兄さんお姉さんたちも家族がいるよ。

※すでにある解決・小さな例外を探そう
「それ、どうやったの？」

※今をスケーリングしよう
「解決を 10 として今いくつ？」「どう？」

※今自分にできること
「そのスケールを 1 上げるには何をしようか？」
ここを子どもたちと共創共同する。

「多文化共生の文化」の意識や認識を広げていくための「職場環境作り」

江別市立江別第二小学校
宮浦　匡典

全校児童・生徒数 （2022 年 1 月現在）	593名	学校教育目標	◎自ら学び、考え表現する児童の育成 ◎優しい心をもち、美しいものに感動する子の育成 ◎自らからの意思で、忍耐強く行動する児童の育成 ◎丈夫な身体と強い体力をもった児童の育成

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

◎外国にルーツや関係のある児童：2%程度（今後の調査で増える可能性がある。）
◎屯田兵開拓の地であり、その当時から住み続ける家庭が多い土地柄である。
◎外国にルーツをもつ児童には、飲食店や中古車販売の仕事に携わる保護者がいる。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

◎第6学年での実践　総合的な学習の時間「国際理解教育（多文化共生教育）」（全 15 時間）

1. 100 人村ワークショップ（国際理解教育出前講座の活用）
2. ネパールからナマステ、トルコからメルハバの授業実践（オリジナル教材）
3. SDGs 調べ、グループ学習、スライド制作（SDGs CLUB: 日本ユニセフ協会の資料を活用）
4. ベトナム人留学生との交流（ベトナム人協会、青年海外協力協会と連携）

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

今回は、「多文化共生の文化」の意識や認識を広げていくための「職場環境作り」について考える。今年度、本校地区では、小中連携による9年間を通したカリキュラムづくりを進めてきた。その中で、SDGs の視点を取り入れ、総合的な学習の時間と生活科において実践を行った。このカリキュラム作成のプロセスを活用し、「多文化共生の文化」の醸成と推進について考えていく。

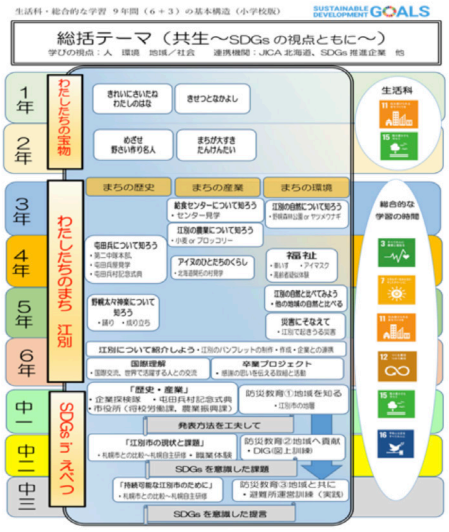


図1　生活科・総合的な学習の時間9年間の基本構造

■ 1. 自校の現状分析（SWOT 分析）

- **外国にルーツをもつ子どもの割合を知る。**
- **外国にルーツをもつ子どもや家庭の様子を知る。（学校や家庭での生活の様子・困り感）**

「多文化共生の文化」の醸成・推進に関わる自校の現状分析を以下に記す。

Strength（強み） SDGs の視点を取り入れた カリキュラムと小中連携の取組	**Weakness**（弱み） 外国にルーツをもつ児童の在籍の少なさによる 多分化共生への理解の低さ
Opportunity（機会） 関係機関（JICA、市国際交流センター、 各種研究協議会とのつながり	**Threat**（脅威） 仕事の多様化による職員の多忙感や 負担感の増加、カリキュラムの硬直化

■ 2. 計画から行動へ（PDCA のサイクル）

- 外国にルーツをもつ子について知る。
  →職員の理解のための研修の場を設定
- 校内の支援体制を確立する
  →学習支援と保護者支援・市の国際交流課との連携
- 特別支援部との連携（支援体制、情報共有）
- 小中連携（情報共有）
- 関係機関とつながる。
  →市国際交流センター、JICA 北海道、各種研究協議会
  ＊研究協議会に JICA 職員等を招いての研修やワークショップの実施。市内の学校の情報共有。
- 教育課程に多文化共生を位置付ける。　など

図2　総合的な学習の時間　全体計画

■ 3. 校内の組織作り、教育課程作成の具体

今年度、カリキュラム作成において、意識してきたことを以下にまとめる。

（1）目的とゴールを示す

各学年の年間指導計画（生活科・総合的な学習の時間）の加除修正版を作ることをゴールとした。そのために、年3回の研修を計画した。第1回（5月）は、JICA の方を講師として招いてワークショップの実施、第2回（8月）は、各学年のこれまでの取組状況の共有、第3回（2月予定）は、各学年の年間指導計画の作成を予定している。

（2）負担感を減らし全員で作り上げる

はじめに、SDGs のロゴを加えた図1と図2の全体構造図を示した。各学年の指導計画についてもサンプル（図3）を提示し、現在行っている学習内容が、SDGs の 17 の目標のうち、どの目標と関連があるか考え、授業を行うようにした。

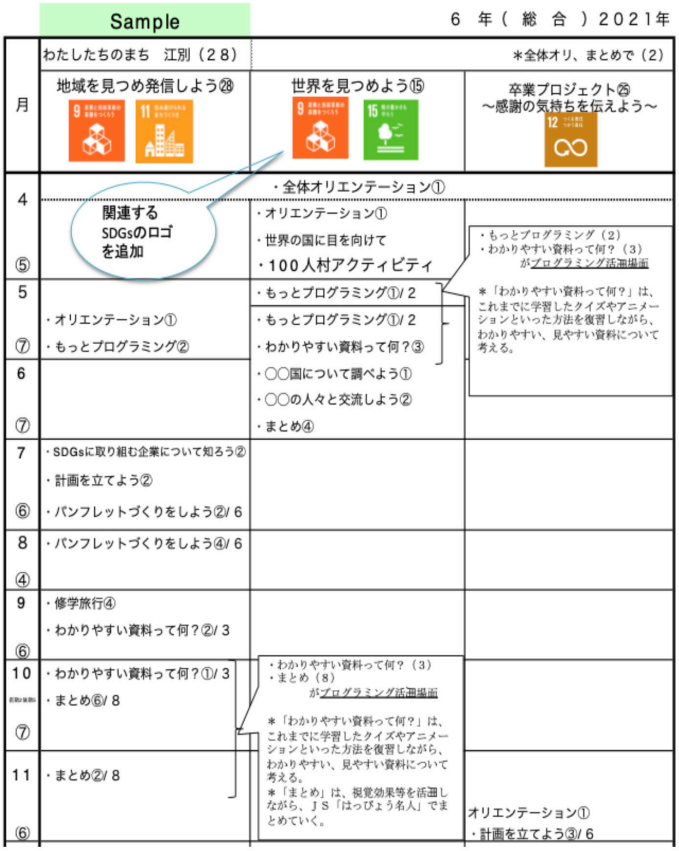


図3　総合的な学習の時間指導計画（6学年サンプル）

■ 4. おわりに

特に「今あるものを生かして負担感を減らす。」「職員全員で作り上げる。」ことを心掛けた。持続可能な文化の形成には、時間はかかっても「職員全員で作り上げること」や、カリキュラムのように「形として残していくこと」が大切だと考える。来年度は、これに「多文化共生の文化」の視点を加えた取組を実施していく予定である。

「Learning for Empathy」を意識した「エンパシーを育む数学の授業」

清真学園高等学校・中学校
網敷　俊志

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	中420名 高480名	学校教育目標	生徒の意欲を高め、学ぶ力をどこまでも深める教育の実践

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

茨城県鹿行地域にある私立の中高一貫進学校であり、約40年前の創立当時は，入学する生徒の多くが鹿島開発に伴って他地域から来た誘致企業の子女だった。しかし、現在では地元出身者の子女の割合が多くなり、この中には外国にルーツや関係のある生徒も少なくなく、保護者対応などでコミュニケーションに不安を感じる場面も見られるようになってきた。すでに近隣の学校の中には、外国籍の保護者を持つ生徒の割合が増え、その対応が必要となっている学校もあり、今後はこのような生徒が増えてくるものと考えている。

Fig.1　学校の様子

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

オーストラリアの姉妹校やタイの提携校などとの国際交流の機会を学校行事として長年続けており、学校間の文化交流などを実施して、生徒・教員の異文化理解に努めている。また、**中国出身の保護者の協力による、年間を通じた中国語の公開講座（生徒・保護者が参加可）**を実施し、その中で中国文化の紹介なども行っている。このような取り組みには、自主的に参加する生徒・教員も少なくはないが、自校の生徒・保護者への対応においては学校全体としての取り組みはなく、**各教員がそれぞれ対応しているのが現状であり**、多文化共生のための取り組みは今後の課題と考える。

Fig.2　タンザニアの学校

私自身は、2017年度の教師海外研修でタンザニアを訪問してから国際理解教育に関心を持ち、2018年度には総合的な学習の時間に行っている課題探究の1つとして、国際教養ゼミを開講し、約30名の生徒とともに、SDGsをテーマとした学びの機会を持った。SDGsの17の目標、169のターゲットの中にある「目標4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」の「4.7　2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」については、日本でもESDとして進められている。しかし、これらを学ぶ中で気づいたことは、国際理解教育（異文化理解）に留まるだけでは多文化共生は困難であり、どのような学びが多文化共生の文化を醸成できるのだろうかということだった。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

UNESCOでは2019年に「Learning for Empathy」が教員交流と支援のプロジェクトとして取り組まれている。また近年話題となったブレイディみかこ著『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』60（P25）の中でも、「エンパシー」は「他者の靴を履く」という英語の定型表現があると書かれていた。そこで私は「多文化共生の文化」の醸成に必要な要素の1つが、この「エンパシー」ではないかと考え、この**「Learning for Empathy」を意識した「エンパシーを育む数学の授業」**に取り組みたいと思っている。

具体的な中学校数学の授業計画として、まずそれぞれの家庭の文化の違いを知るために、授業の始めに数学の内容をテーマとしたチェックインを行う。たとえば，始めに食事の際の食べ物の分け方や、買い物の際のお金の払い方、お年玉の使い方など、**日本の中だけ見ても、育った家庭によって文化は大きく異なることを意識**させ、さらに小学校の教科書でも取り上げられている世界の国々での四則演算の筆算の違いなど、**算数・数学では同じ物事に対する見方・考え方にも違いがあることを学ぶ。**

これらを導入として、実際の学習内容である2次方程式などでも、数学の正解に至る過程には多数の解法が存在するので、できるだけ多く

の解法を見つけること、それらの解法がどのような点に着目しているかを意識させる。生徒は、正しい答えにたどり着くといった共通目標に対するアプローチにも、様々な考え方があることを学び、考え方の違いには、文化的な背景の違いがあることが多いことを学ぶことができる。そして、授業の最後には、他の生徒の解法を共有し、その生徒がどのように考えたか、エンパシーを意識した振り返りを行いたいと考えている。実際に行っている授業では、これらのワークショップを行いやすい人数と向きになるように、数学教室の机の配置も工夫した。

佐藤学の『教育の方法』によれば、「東アジアの国々の学校は、多人数の教室で黒板とチョークと教科書による一斉授業の様式が支配的」であり、「これらの国々の学校教育では「個性」や「創造性」よりも「正解」と「効率」が重視される傾向」がある。そして、このような授業形態で「「模倣的様式」の学びを支えているのは「模倣」という概念」であり、これと比較される「「変容的様式」の学びの根底には「アイデンティティ」の探求」があると指摘している。「多文化共生の文化」は、「模倣」を重視する同調圧力の強い場ではなく、生徒個々の「アイデンティティ」が尊重される心理的安全性が保障される場を構築することが欠かせない。 また「多文化共生の文化」には、日頃から教員・生徒に考え方の「自由の相互承認」も必要であると、私は考えている。

新しい学習指導要領では「「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実」が掲げられており、また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、昨年度一気に進められたGIGAスクール構想により、生徒1人1台端末の学習環境も整備された。これらの学習資源を活用して、実際の中学校数学の授業では、端末を利用した生徒の「個別最適な学び」とともに、教室内の座席を工夫したグループ学習による「協働的な学び」を通じて、個々の生徒の考え方を意識しながら生徒のエンパシーを育み、「多文化共生の文化」の醸成・推進を目指したいと考えている。

Fig.3 小学校教科書

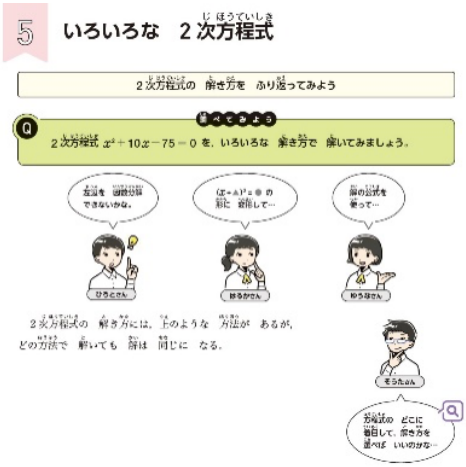


Fig.4 中学校教科書

Fig.5 数学教室の机の配置小学校教科書

引用参考文献

石井遼介（2020）『心理的安全性のつくりかた』日本能率協会マネジメントセンター
佐藤学（2010）『教育の方法』放送大学叢書
苫野一徳（2014）『教育の力』講談社現代新書
ブレイディみかこ（2019）『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社
ブレイディみかこ（2021）『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ』文芸春秋
マシュー・サイド（2021）『多様性の科学』ディスカヴァー・トゥエンティワン
小学校算数用 文部科学省検定済教科書『新しい数学 3』東京書籍
中学校数学科用 文部科学省検定済教科書『新しい数学 3』東京書籍

マジョリティへのアプローチとしての学びのデザイン

宮城県宮城第一高等学校
三浦　学

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	831名	学校教育目標	個性の確立・社会性の陶冶・職業教育・明るい生活の創造

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

本校においては、外国にルーツや関係のある生徒は把握している限りそれほど多くない。しかし、勤務校が位置する仙台市は、外国人人口は増え続け、現在においては約１万3千人の外国人が仙台で生活している。そのような中で外国人の雇用も増え定住する人や母国から家族を呼び寄せる人も増え、仙台市の小中学校では 150 名の外国籍の児童生徒が在籍している。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

勤務校において多文化共生教育等を目指した取り組みはほぼ行っていないのが現状である。しかし、総合的な探究の時間や教科教育の中で取り組みは行われているものの本質的な学びになっているかは疑問である。ICT機器による調べ学習で終わっている。先日、多文化共生に興味・関心を持つ生徒がいるのも現状なので、小さな取り組みではあるが私の授業で少しでもそのような場を構築できないか検討しているところである。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

学校における多文化共生の「文化」とは何だろうという問いがまず浮かんだ。「多文化共生」というと、まず、最初に外国人というイメージが浮かぶ。学校ということを考えると教師・生徒も様々な文化で生活してきた集団であると考える。そこでどのような学校を創っていくのかが大きなポイントになる。教師の面を考えると帰属意識や同調圧力が働き、何か新しいことを創ることは敬遠されがちである。そこの問題をどのようにクリアにしていくか検討していかないといけない。そう考えると教師に決定権を委ねる必要が出てくる。そこで最低限の共有として SP（＝スクールポリシー）を教師が自分事として決める場が必要になるのではないかと考える。卒業時にどのような生徒になって欲しいか、生徒を育てるためにどのような学校を創りたいかが教師が自分事としてビジョン共有できる場をつくる必要性がある。本校では今夏に上記の学校目標を具現化していくために SP をワークショップ形式で教師が決めていった。

生徒の方に目線を向けて考えると本校は宮城県内の多くの地域から通学している。そのことを考えるだけで「多文化」になっていると考えられる。そこで教員が生徒をまとめていくためのファシリテーションスキルが必要になる。現在、多くのところで言われているが「Teaching」から「Learning」への転換。生徒が自主的に学びを深めていくために一緒に支えていくためのスキル及び学びが自走していくための手段を持つことが大切になる。

先日の研修で菊池先生からのお話しの中で「マジョリティからマイノリティへ寄り添う」、「ダイバーシティの考え方」、「多様性に基づく社会を構成する」などのお話があった。外国人へのアプローチがメインだったが、言い換えると、学校という社会にも共通する部分が多くあった。私が個人で学ばせて頂いているパブリックリレーションズの概念（個人や組織が最短距離で目標や目的を達成する「倫理観」に支えられた「双方向コミュニケーション」と「自己修正」をベースとしたリレーションズ活動）がそのまま該当していたので、この考えをベースに大学受験にとどまらず、生徒の未来に向けて多くの学びを提供できるためのスキルを教師自らが磨いていくことが必要不可欠でないかと考える。このような学びこそが教師が自分をリフレクションし、アンラーニングし自己を再構成していくことに繋がる。

現在、仙台市を含め宮城県には多くの外国人が居住している。そして、仙台は東北の玄関口として今もこれからも多くの人々の往来が行われる。そのよう現状の中で、今後、生徒たちは外国人のみならず、自分たちと異なる文化圏の人たちとの新たな出会いが必然と訪れるはずである。そのような機会もあることを考え、授業においてＰＢＬ型の授業の実践の中で、起こりうる未来を考えるスペキュラティブ・デザインの考えを生徒と共に行っていきたい。生徒がこれからの時代に必要な力として、複雑になった社会に対して諦めるのではなく、未来を自分の言葉で語り、生徒が自分たちの願う未来になるように自走していける生徒を育成していきたい。

■ 授業デザイン（2022 年1月中旬～末に授業実施予定）

（1）授業の目的

①生徒が主体的に学びに向かう姿勢を育む。

②学習指導要領で求められている「生きる力」を育き、持続可能な社会の担い手を育成する。

③教科学習と総合的な探究の時間を接続させることで、生徒の未来のキャリアを考える。生徒の未来を考える上で、「自分生徒の生き方、在り方と一体的で不可分な課題」を考える場とする。

④生徒自身が問いを創り、その問いに対して仮説をたて（アブダクション）、自ら行動していくスキルを学ぶ。

⑤生徒と実社会を接続する場として考えていきたい。

（2）授業プログラム

①今までの地理の学びの復習

- 「自分」について認識し、他者との関わりとの中でどのように社会で生きていくかを考える。
- この世界で「 取り残されている人は誰か？」を考える。
- 自分の考えだ 取り残されている人たち」の理想の状態と現実の状態を考え､そのギャップを埋めるためには何をすれば良いのかを考える。

②アイディアの組み合わせ

- 3人グループとなり、持ち寄ったアイディアを統合する。
- 世界の諸課題は相互に連携しており、互いのアイディアをクロスさせることで、同時に世界の諸問題を解決していくためのアイディアを考えていく。
- アイディアを深めていくためにＱＦＴ(※1) を利用し、問いを創り、そこから仮説を設定し、自ら考案したアイディアを創ることを視野に入れさせていく。

③アイディアの収束（アントレプレナーシップ的な思考を利用する）

- 自分たちが考えたアイディアと自分の進路と結びつけ、高校卒業時の進路、さらには社会に出た時の現実世界の諸課題を解決していくために思考を身につける。

④ SDGs との関連

SDGs という言葉を出すことなく、本授業を通し、SDGs の3要素を生徒に意識させたい。

- 誰一人取り残さない世界を作る
- 世界（自分）を変革する
- 経済、社会、環境が調和の取れる世界を目指す。

	知識理解	思考判断表現	学びに向かう姿勢
単純関係	多文化共生社会とは何かについて、地理で学んだ実例を振り返ることができる。	地理で学んだ多文化共生について考えるために、この世界で「取り残されている」人たちはどのような人たちかを考えることができる。	グループ内で自分たちが考えたことを共有し、互いに持ち寄った諸課題を同時に解決していくことを考えることができる。
複雑対比操作	地理で学んだ多文化共生の実例について、その内容を説明することができる。	現実の社会で困っている人たちの現実の状態を考え、その人たちが理想の状態を考えることができる。	下のグループ内で考えた諸課題の解決方法と、自分のこれからのキャリアを関連させて、自分の意見をプレゼンテーションとして未来思考で作ることができる。
全体関係	多文化共生について地理で学んだ地域ごとに区分し、それがどのような理由で行われてきたのかを歴史的は背景を踏まえて説明することができる。	現実にお社会で困っている人たちにどのように支援すれば、その人たちの現状が変わるのかを自分のキャリアと関連させて考えることができる。	他のグループが作成したプレゼンを聞き、経済・社会・環境との関連や自分が作成したプレゼンの共通項や差異を考えることができる。

⑤評価について

思考コードのルーブリック（※2）による3観点による評価で実施。

※1：The Question Formulation Technique の略称
※2：首都圏模試センター作成のものを参照

外部とのつながりから多文化共生の文化づくりへ

愛媛県立土居高等学校
越智　由佳

全校児童・生徒数（2022年1月現在）	241名	学校教育目標	新しい時代を生きる「人間力」の育成と「学校力」の向上　～愛顔を育む学舎を目指して～

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

愛媛県の東部に位置し、隣は香川県になる。四国のどの県庁所在地にも約2時間かからず、高速道路で移動が可能で、まさに「四国中央市」である。紙製品関連の売り上げが約7500億円と日本一であることもあり、工業の盛んな町である。
本校生徒は、四国中央市の紙関係の企業に就職する生徒が70%以上を占める。外国にルーツや関係のある生徒の数は少数で、生活言語が日本語である生徒がほとんどで、困り感は少ないようである。工業が盛んであるため、外国人労働者が町に多くいるが、移住する人が少ないこともあって、分断されている感じを受ける。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

人権啓発教育に力をいれている市であり、人権教育を通して、多文化共生教育に取り組んでいる。
私自身は、国際理解教育を英語の授業を中心に行い、グローバルな視野を身に付けることを目指している。また、他者や多文化を受容するために、自己肯定感を高める教育を行いたいと考えている。

■ これまでに取り組んでいること

行事―地元の保育園・小学校との交流学習

- 「いもほり体験」「稲刈り体験」など
  本校は、普通科ながら、農業コースや生活コース（家庭科の科目を多く選択する）が設置されているため、そのコース選択生を中心に、本校の農場で交流を実施している
- 農産品の販売を通じての地域の方たちとの交流―幅広い世代や地域の様々な人たちとの交流

ミカン狩り

いもほり体験

学校内のデザインー男女を明記しない手洗いの設置

- 校内にSDGsのロゴを掲示―保健室・手洗い、職員室など
  関連がありそうなロゴを掲示している。

外部との連携―協力隊 OB、海外で働いている地元出身の方

- JICA 教師海外研修で知り合った方などに話してもらう

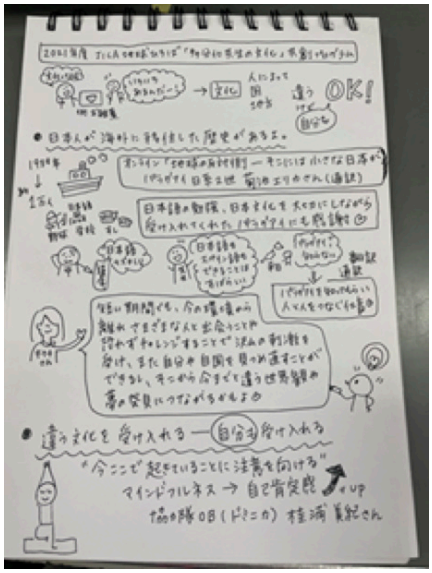
今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

■ 本年度（2021 年度）の取り組み

1.「ミャンマーでサッカーを教えている井川太士さん（四国中央市出身・協力隊 OB）」
ミャンマーから緊急帰国されていたこともあり、本校に来てもらって、現状を話して頂いた。また、ミャンマーでは、ろうあの方を対象としたサッカースクールのコーチとして働いているので、障害者を取り巻く環境なども聞くことができた。

2. 日系社会について知り、日本人が海外に渡って暮らしていることを知る。
タイトル「地球の反対側　そこには小さな日本が」
パラグアイ　アスンシオン在住　菊池　エリカさん（日系3世）日系3世としてパラグアイに育ち、13歳のときに、JICA の研修で初来日。その後、スペイン語と日本語の能力を生かして通訳・翻訳者に。（JICA 教師海外研修のときに通訳をしてくださった縁で今回お願いした。）

3. 日本人として海外で働くこと　　青年海外協力隊 OB　桂浦　美紀さん
ドミニカ共和国で働いた経験から、「今、ここに生きる」ことを大切にしたいと思うようになった。そのことを生徒たちに伝えたいという気持ちでお話してくださった。自己肯定感を高めるマインドフルネスもみんなで実践した。



■ 今後取り組んでみたいこと

- 修学旅行のフィールドワークで鶴見などの多文化共生の先進地域を訪れる。
- 地域の日本語教室に生徒とともにボランティアに出かける。
- さまざまな文化ルーツをもつ若者にゲストスピーカーとして学校に来てもらう。

「誰もが公平に尊重される学校文化」構築のための、学校としての取り組み・教員へのアプローチ

岐阜県立東濃高等学校
和田 さとみ／安田 誠（箕面自由学園中学校・高等学校）／大和田 彩（高知県立室戸高等学校）

全校児童・生徒数（2022 年 1 月現在）	327名	学校教育目標	知・徳・体の調和のとれた将来有益な人材を育成する。

※異なる学校で勤務する3名の参加者が協働で、外国につながる生徒の集住地域にある岐阜県立東濃高等学校を対象に取り組みを考えた。

学校背景（外国にルーツや関係のある児童・生徒等の就学状況、地域的背景など）

岐阜県立東濃高校は、岐阜県御嵩町にある創立 125 年、岐阜県下では4番目に古い歴史をもつ高校である。平成 18 年に外国人生徒選抜が実施されてから、外国につながる生徒数は年々増加傾向にあり、**令和 3 年度は、全校生徒 327 名のうち、148 名の生徒が外国につながる生徒で全校の 45%を占めている。今年度の外国につながる生徒の国別内訳人数は、フィリピン（85 名）、ブラジル（56 名）、中国（3 名）、ペルー（1 名）、ドイツ（1 名）、ルーマニア（1 名）、パキスタン（1 名）である。**

【東濃高校の特徴、及び方針】
① 自分自身で学ぶ科目を選べる単位制の学校
② 一人ひとりの理解度に合わせて学べる学校
③ 幅広い進路に対応できる学校
④ 豊かな心を育む、様々な活動に取り組める学校
　～ボランティア、部活動、地域貢献～
⑤ 7つの類型で進路実現を目指す。

自身の学校における多文化共生教育や、「多文化共生の文化」醸成を目指した取り組み状況

これまで、増え続ける外国につながる生徒に対するハード面（人的資源）における指導・支援体制が各種整備されてきた。現行の外国につながる生徒に対する支援体制は主に以下の3点である。①日本語指導を必要とする生徒に対して、3 年間、少人数で構成される「国際クラス」が設置されていること、②学校設定科目として「日本語」が各学年に3～4単位設定されていること（「日本語Ⅰ」・「日本語Ⅱ」・「日本語Ⅲ」）、③外国人適応指導員、及び通訳支援員が 5 名（タガログ語 2 名、ポルトガル語 2 名、中国語 1 名）配属されていることなどである。外国人適応指導員、及び通訳支援員は主に、国際クラスの各教科授業に入り込み母語支援を行い、また保護者対応をはじめとする各種翻訳業務にあたっている。岐阜県として、外国につながる生徒の指導者育成体制が十分とはいえない中、東濃高校では日々、教育活動を模索している。

今後、学校で「多文化共生の文化」を醸成・推進するためにどのようなことに取り組みたいか

東濃高校には、ソフト面（校内環境）に関しては多くの課題がある。例えば以下のような校内の指導体制に関わることである。

1：学習面

- 各教科と日本語学習との隔離（日本語科と教科間の連携体制が希薄である）
  背景：「国際クラス」「 通常クラス」どちらに所属していても評価は一律同じ。
  「国際クラス」の生徒は、日本語力不足が一因となり、教科の授業が十分理解できず、単位取得が困難に陥る生徒が多い。
- 国際クラスの教科担任のあり方
  背景：「国際クラス」には各教科教員が 2 名ずつ配属されているが、指導の工夫（習熟度別・分割授業実施など）は十分とは言えない。基本的に T1・2 で一斉指導が行われているのが現状である。

2：生徒指導面

- 問題行動を起こした生徒に対しては特別指導（反省文）が実施されるが、生徒の日本語能力への配慮措置はない。作文は問題行動によるが、2000 字程度の作文課題が複数出される。
  背景: 日本人生徒との公平性のための措置。特別指導の間、問題行動を起こした生徒は、授業が受講できず、別室にて作文指導を受け、自主学習を行う。作文に関しては担任が添削するが、問題行動を改めることよりも、作文指導になっている実態がある。

3：教育相談面

・外国につながる生徒の基礎情報（在日歴・国籍・在留資格など）は校内で一括情報共有システムが存在しない。
背景：　各分掌が都度必要な生徒情報を収集している。全職員で情報共有がされていない・情報が活用されていない実態がある。

4：生徒理解面

・外国につながる生徒に関する教員向けの研修は、校内に存在していない。

東濃高校は毎年多くの生徒が退学している。進級に必要な単位が取得できないことによる原級留置、及び退学の選択をする生徒は、平成30年では43名、令和元年は31名、令和2年は22名と過去3年間で平均32名に及ぶ。
東濃高校生徒の退学理由は、主に進路変更（転学）、学習困難、人間関係、意欲の喪失、経済的問題などである。そのうち学習困難を理由として退学していく生徒について取り上げる。「国際クラス」に所属する生徒は、日本語教育、及び通常の専門教科の授業で適応指導員・通訳支援員による母語支援が少人数制で受けられる、という支援が得られるものの、通常クラスの生徒と比べて、著しい日本語力不足は否めない。そのために各教科の用語が理解できない→授業内容についていけないといった学習困難者が多い実態がある。ただ学習困難者は、外国につながる生徒のみならず、普通クラスに所属する日本人においても例外ではない。

東濃高校の教員は「公平性」を重要視している実態がある。校内には外国につながる生徒のほか、多様な日本人生徒も在籍している。この場合の「多様」とは、学力が著しく低い生徒や、学習障がいのある生徒、特別支援を要する生徒などが該当する。東濃高校の教員は、「すべての生徒に公平な教育指導体制を整えていくべきである、」という考えに基づき、外国につながる生徒に対する特別な教育的支援に対して、必要性は理解しつつも、総じて慎重な姿勢を示している。学力が校内の評価基準に達することができないために単位取得が叶わないのは、外国につながる生徒だけではなく、日本人生徒も同様だからである。

⇩

学習困難を理由に退学をする生徒を減らすために、現行のシステム下で、
多様な考えを持つ教員に対して、どのようなアプローチができるかを考えたい。

参考：令和3年度の取り組み事例（夏季休業中の教科指導研修）
本年度の夏季休業中に、東濃高校の外部連携機関の一つであるNPO法人可児市国際交流協会の主催で「外国につながる生徒に対する教科指導のあり方について」のオンライン研修を東濃高校の有志教員向けに企画・実施した。講師として、教科指導と日本語指導の統合学習に先進事例のある東京都立一橋高等学校（定時制）の先生方をお招きし、東濃高校では有志教員（10名）が参加した。

その後、研修のフォローアップとして、夏のオンライン研修での他県の先行事例を、どのように東濃高校における教科指導に生かしていけるかについて話し合う場を9月に校内で設けた。夏の研修が不参加だった教員も数名参加し（参加者13名）、日頃の指導を見直すきっかけとなった。

校内には「外国につながる生徒」に対する指導のあり方に興味関心のある教員は少なくないが、そういった教員をどのように巻き込むかについては試行錯誤の段階である。（有志研修となった経緯：岐阜県では働き方改革に鑑み、研修は削減傾向にするべきとして管理職の指示のもと、必須研修にすることはできなかった。）

東濃高校では、外国につながる生徒は今後も増加の見込みである。そのため来年度は職員会後の短時間でも外国につながる生徒に関する研修を校内で位置づけたいと考えている。時期や内容についても系統的に提案・実施を検討中である。

■ 今後、取り組みたい具体的な案について

(1) 学校組織としての取り組みの必要性

学校として、優先的に検討すべき事柄は学校目標や教育方針など、私立学校においては建学の精神であることには明らかである。それらは多くの学校で、目標や方針がHP等に掲載されている。では、それらを具体的にどのように実現していくのか、を教員1人1人が意識し実行していかなければならない。すなわち、目標や方針に対して、様々な教育活動をどのように定義づけていくのか、仕組みをどのように設計していくのかを教員間で検討したい。
東濃高校の特徴及び方針の中に、「一人ひとりの理解度に合わせて学べる学校」とあり、「少人数授業」「習熟度別授業」などの取組みがあげられている。これらの授業が外国につながりのある生徒にとっても有益であることは言うまでもない。外国につながりのある生徒が増えてきている状況においては、以下の5点に取り組んでいきたい。

①学校設定教科・科目のさらなる活用

文部科学省「高等学校における日本語指導の在り方に関する検討会議」の議論でもあるように、小・中学校において現在行なわれている「特別の教育課程」を高校でも組むことができるように年間10～280単位時間を認める方向で検討されている。これまでの様々な高校での取組みを後押しする形での検討である。

これまでも日本語指導が必要な生徒の在籍が多い高校では、日本語に関する学校設定教科・科目を設置し指導してきている。また、必履修科目の多くを 2 年次から学び、1 年次においては中学校段階までの学び直しの科目を設定している学校もある。例えば大阪府のエンパワメントスクールにおいては、基礎国語や基礎数学、理科入門、社会入門などを 1 年次の教科として設定している。さらには、一部の授業時間を 1 時間あたり 50 分から 30 分に分割し集中しやすい時間で実施することで学び直しへの工夫もしている。これは外国につながる生徒のみならず、多様なバックグラウンド生徒達に対応できる仕組みでもあろう。また、選択科目として「多文化研究」や「中国語入門」、「朝鮮文化演習」などを配置し、「多文化共生」を促す仕組みも取り入れる工夫も考えられる。これらを元に高校生としてふさわしい内容かつ多文化共生に沿う形でのカリキュラムを考えたい。

3 年間の中で、学校目標をどのように実現していくのか、それはカリキュラムの中で教科・科目をどのように配置するかにおいても追求できることだと考える。そして、それは「豊かな心を育む 様々な活動に取り組める」ということにもつながる。

②転退学者を減らす取り組み

残念ながら、どの高校においても一定数、転退学者があるのは事実である。しかし、その数字を減らす取り組みは必要であろう。例えば大阪府の作成している「中退の未然防止のために」によれば、ある高校では「高校生活支援カード」を入学時に配布、記入・提出してもらうことで、個別に必要な支援を把握し、中退率を下げる取り組みも実施されている。生徒指導を中心に生徒支援を行うだけでは中退率を下げることは難しいということに基づく。この「高校生活支援カード」を核として、生徒支援委員会を発足させ、情報の共有と共に生徒全員を支援の対象として、学校全体として支援をするという姿勢で取り組んだ高校もある。学校は生徒と教員の協力も大切であるが、それと共に学校と家庭の協力があってこそ、生徒が安心して学校生活に臨めるものである。保護者に対して、必要性を丁寧に伝え、「高校生活支援カード」を有効に、ICT もうまく活用しながら共有していくことで、生徒の安心感を引き出すことが大切であり実行していきたい。

③キャリア教育と国際理解教育／開発教育の取り組み

昨今キャリア教育は、どこの高校でも実施しているようになった。ではこれからの時代に求められるキャリア教育とは何なのであろうか。終身雇用制度を前提としていた時代から、終身雇用制度から脱却する動きもある現在の日本において、何が必要になるのか。また、海外の大学に進学をしたり外資系企業に就職をしたり、海外で働く日本人の数も増えつつある。一方で ICT や AI の発展、そしてそれに伴う「10 年後になくなる仕事」も話題となった。これらを総合的にカバーするキャリア教育を考えることは恐らく難しい。しかし、これまでよりも海外を意識したキャリア教育にしていく必要性はあろう。すなわち、キャリア教育に国際理解教育／開発教育を絡めていくことに意義はある。国際理解教育／開発教育は、その推進が体制などを整えることや教材選びなどの面で難しい場合もある。しかし、多文化共生の文化が校内にあれば、それが必ずヒントになるであろう。すなわち、教室に外国につながる生徒がいることは国際理解教育／開発教育の実施にプラスに作用する可能性が高い。外国につながる生徒の置かれている状況にもよるが、日本と世界のつながりを考えるきっかけになりうる。生徒の関係する国の文化や国の置かれている状況と日本との比較、あるいは日本との関係性などを知ることから始めていきたい。それらはキャリア教育上も有益である。

④進路指導への取り組み

多様な進路を選択する生徒が在籍する場合に、進路指導は多岐に渡り担任や進路指導の教員は忙しくなる面もある。生徒がどの進路を選択するにしても、指導上有効であることは作文指導や面接指導などである。特に大学・短大進学にしても、専門学校進学にしても最近では総合型選抜入試（旧 AO 入試）による入学者が増えている。学力面も問われない訳ではないが、やはり自分が高校3年間でどのような事を経験し考えてきたかがポイントになる。上級学校への進学であれ、就職であれ、高校3年間で何を学び、どのように活動をしてきたかを考え、フォーカスさせることを前提に高校1年生から指導を重ねていけば、準備は十分に出来るはずである。その準備の1つが作文指導を中心とした表現活動である。もちろん生徒の得意・不得意があるので文章力に差がつくのは当たり前である。しかし、不得意だからと言って避けるのではなく、少しずつでも積み重ねていく指導があれば良いのではないであろうか。その際に前述の学校設定科目を上手に使う、また必要に応じて外部人材への協力依頼、表現活動を学ぶ教材の活用、そしてICTの利用などが挙げられる。これらを積み重ねていけば、面接指導にもつながり、多様な進路に対応出来る。外国につながる生徒の中には日本語の苦手な生徒もいる。例えば、茨城県立並木中等教育学校の校長を勤められていた中島先生が提唱されている「R80」の取り組みを参考にしつつ、80 字程度の短めの文章を書かせる習慣づくりからはじめて、学校をあげて作文指導を中心とした表現活動に取り組みたい。また、生徒1人1人の3年間をポートフォリオとして ICT を活用しながら丁寧に蓄積していくことも、生徒の自己肯定感向上に役立ち、ひいては進路指導に生きてくる。高1の段階から進路を意識させ、教員も生徒も準備していく体制づくりを実施したい。

⑤体制づくりについて

学校組織として担任に負担がいかないように、校内だよりなどの面で出来るだけフォーマットを作成する校内体制としたい。最初は大変ではあるが、文部科学省の「かすたねっと」や文部科学省総合教育政策局国際教育課「外国人児童生徒受入れの手引き」などを元に、カスタマイズをしておおまかなマニュアルのようなものがあると、担任の負担も減ると思われる。他にも、小島祥美編著『Q&A でわかる外国につながる子どもの就学支援「できること」から始める実践ガイド』（明石書店、2021）の第4章の資料編も大変参考になる。学校としての形をマニュアル化・文章化してしまい可視化してみることで問題点は浮き彫りになり、対応策も考えやすくなる。

⑥小括として

外国につながる生徒のみならず、どの生徒でも学校生活において困りごとがある場合はある。これらに丁寧に向き合うことは人的資源の限られた学校としては限界があるのも事実である。しかし、原級留置や転退学者が多いことは学校にとっても生徒・保護者にとってもよい状

況ではない。学校として学校設定教科・科目を活用したカリキュラムを考え、生徒を支援する体制を学校全体で作り、キャリア教育・進路指導を積み重ねていけば、多くの生徒にとって有意義な学校生活になるであろう。そして、それが外国につながる生徒にも有益であり、多文化共生の文化作りにつながると考える。

（2）校内研修とその前提について

①校内研修について

外国につながる生徒等への日本語の修得については、令和元年 6 月に施行された、「日本語教育の推進に関する法律」においても国と自治体の責務が明確となり、教育委員会にも通達が出ている。これと前述の「高等学校における日本語指導の制度化及び充実方策について（報告）」を全教員で共有することが必要な第一歩だと考える。どの教員も同じ問題意識を前提として進めないと、問題を解決する方法にはなりにくい。学校教職員の忙しさもあるが、やはり全教職員が集まる場での研修として、これらを共有する時間を作りたい。

全国的に、外国につながる生徒と全高校生を比較した際の、高校での退学率の高さや、卒業後の進学率の低さなどは文部科学省の調査で指摘されている通りである。これらを解決する取り組みは、今後の高校のあり方として求められることであると考える。この取り組みの必要性と様々な国との関係性が今の日本社会を支えている現状なども含め、全教員で知る研修も必要である。外部講師を招いて講演・研修をすることもひとつの手である。解決に向けて一歩ずつ、校内の意識を変えていきたい。それが出来れば、それがどの生徒にとっても良い効果をもたらす変化になると考える。

②前提として、特に「公平性」について

東濃高校の令和 4 年度の入学者選抜の概要によると、「第一次選抜（標準検査）」、「帰国生徒等に係る入学者の選抜」、「外国人生徒等に係る入学者の選抜」、「追検査」そして「第二次選抜」が予定されている。このうち、「追検査」に関しては新型コロナウィルスに関する内容なので、ここでは議論から除外する。すると、第一次選抜以外にも3種類の入試形態があり、標準検査とされる第一次選抜とは内容が異なる。この段階で、学力のバラつきが出ることは想定されることである。また、外国につながる生徒については、場合によっては来日した時期が違う可能性もあり、日本語の修得状況は異なる。田中（2021、108-112）によると、外国につながる生徒について「日本語ペラペラまで二年、勉強スラスラまで七年」と指摘しており、「周囲からの日常的な問いかけに対して不自由なく応えることができるようになった子どもであっても、必ずしも学習するための日本語の力が十分であるとはかぎらない」とする。すなわち、日本語が高校での学習に対応していない生徒もいることが前提で考えていかないと必ずしも公平とは言えないと考える。言葉の差は、そもそもの学習のスタート地点が異なることになるからである。それぞれの生徒が安心して学習に臨んでいける環境を整えてこそ、生徒にとっての公平なスタートになる。学校としての限界はあるが、出来るだけ生徒の安心感を担保できる体制で生徒の学習を進めていきたい。

※補足：「公平性」と「平等性」

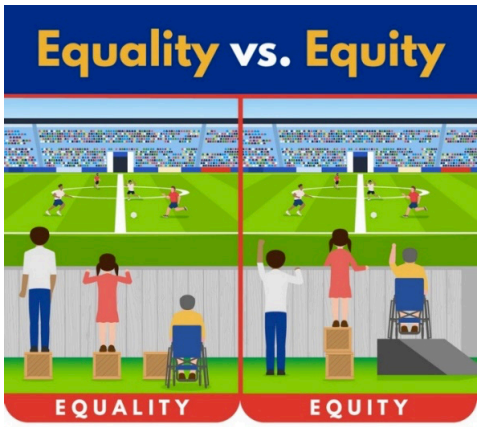
United Ways of the National Capital Area によると、以下がそれぞれの定義付けである。

★公平性　地域社会の現状を把握し、必要に応じて資源や機会を配分することで、地域社会のすべての人々に等しい成果をもたらすこと。

★平等性　各個人や集団が、その状況にかかわらず、同じ資源と機会を与えられること。

混同されがちなこの2つの概念だが、教育現場において、公平性がそれぞれの生徒の全ての要素を包括的に捉えて対応するのに対して、平等性はあらゆる生徒に対し同様の対応をすることを示す。

例えばディスレクシアの生徒に対して、その他の生徒と同じ条件下での板書写しを課す（平等性）のか、パソコンを使っての筆記を許可する（公平性）のか。肢体不自由児に対しその他の生徒と同じ身体運動をさせる（平等性）のか、その生徒に合った運動を認める（公平性）のか。



画像引用：United Way of Whitewater Valley

多様な生徒を抱える教室においては、「全ての生徒を同じ条件下で教育する」ことにとらわれすぎると、真の意味での公平性が担保されないことに留意する必要がある。

（3）ICT の活用について

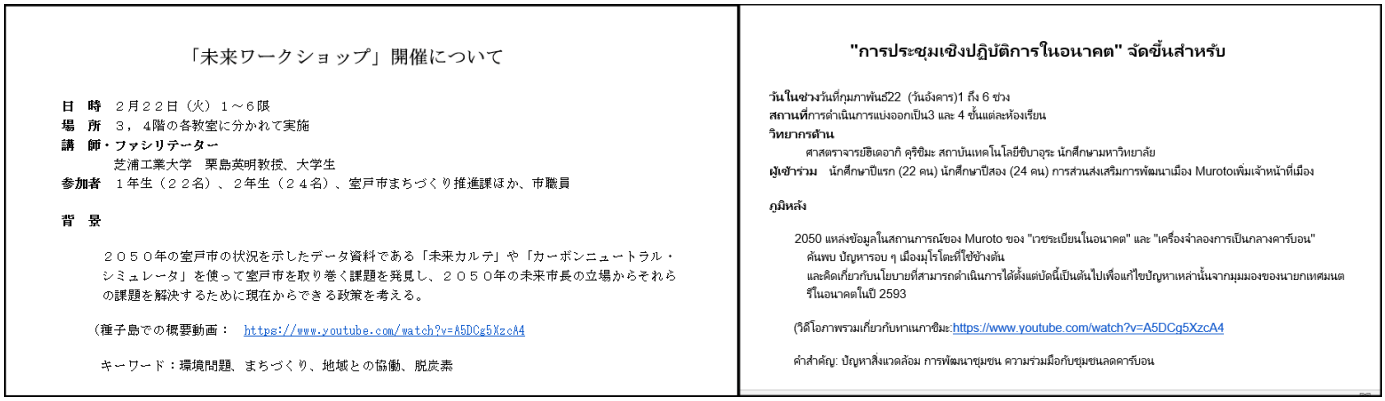
教育現場において言語の障壁が存在する場合、いかにしてそれらを取り除くかが円滑な教室運営の鍵となる。ここではコミュニケーションツールとしてのICT（Information and Communication Technology）の活用について考えたい。今回は、ターゲット言語の運用能力の向上以前に、日常的なコミュニケーションや、生徒が学習活動を行ううえで言語が障壁とならないための配慮という観点からの ICT の活用について提案したい。そのため、今から紹介するアプリケーションは多様な場面（授業運営、ホーム運営など）での活用を想定している。

①活用例1：Google ドキュメント（翻訳機能を使ったワークシートや通信の翻訳版作成）

ワークシートや通信を Google ドキュメント上で多言語に翻訳できる。翻訳の精度について学校側で確認ができない場合は生徒や保護者との情報のすり合わせが必要。

「ツール」→「ドキュメントの翻訳機能」→ 言語選択 → 選択した言語でコピーが作成される

例：日本語→タイ語



「未来ワークショップ」開催について

日　時　２月２２日（火）１～６限
場　所　３，４階の各教室に分かれて実施
講　師・ファシリテーター
芝浦工業大学　栗島英明教授、大学生
参加者　１年生（２２名）、２年生（２４名）、室戸市まちづくり推進課ほか、市職員

背　景

２０５０年の室戸市の状況を示したデータ資料である「未来カルテ」や「カーボンニュートラル・シミュレータ」を使って室戸市を取り巻く課題を発見し、２０５０年の未来市長の立場からそれらの課題を解決するために現在からできる政策を考える。

（種子島での概要動画：　https://www.youtube.com/watch?v=A5DCg5XzcA4

キーワード：環境問題、まちづくり、地域との協働、脱炭素

"การประชุมเชิงปฏิบัติการในอนาคต" จัดขึ้นสำหรับ

วันในช่วงวันที่กุมภาพันธ์22 (วันอังคาร)1 ถึง 6 ช่วง
สถานที่การดำเนินการแบ่งออกเป็น3 และ 4 ชั้นแต่ละห้องเรียน
วิทยาการดำน
ศาสตราจารย์ฮิเดอากิ คุริชิมะ สถาบันเทคโนโลยีชิบาอุระ นักศึกษามหาวิทยาลัย
ผู้เข้าร่วม　นักศึกษาปีแรก (22 คน) นักศึกษาปีสอง (24 คน) การส่วนส่งเสริมการพัฒนาเมือง Murotoเพิ่มเจ้าหน้าที่เมือง

ภูมิหลัง

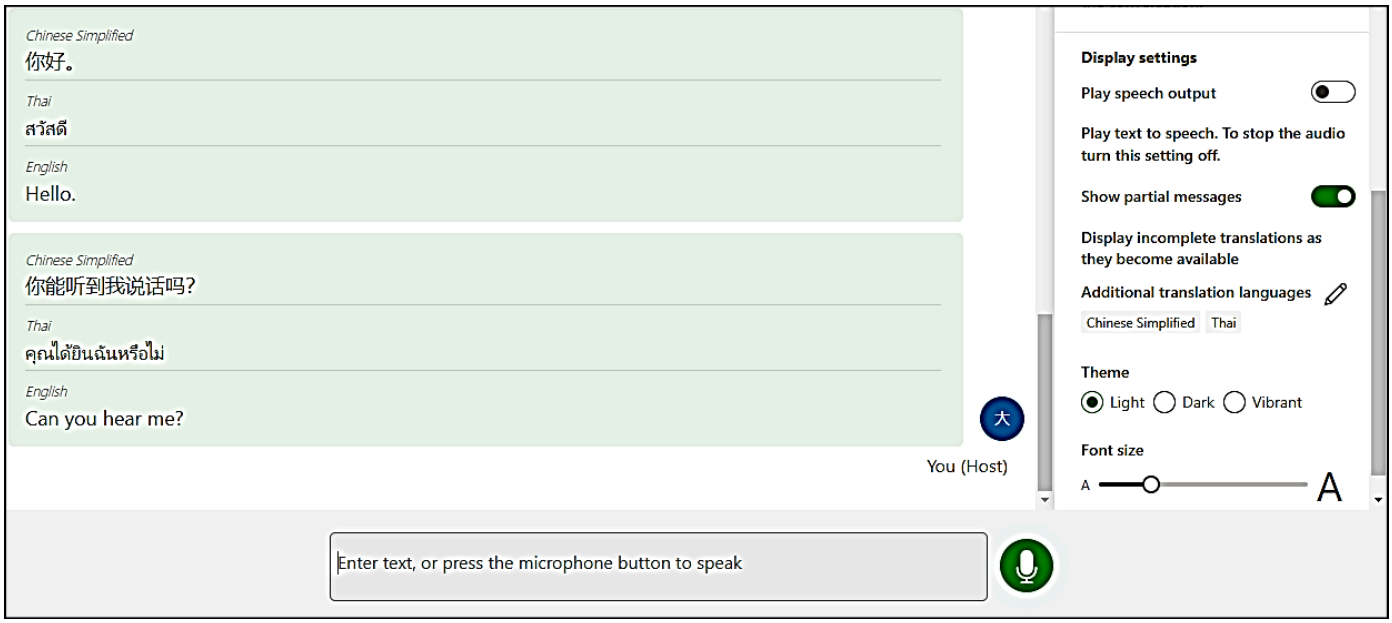
2050 แหล่งข้อมูลในสถานการณ์ของ Muroto ของ "เวชระเบียนในอนาคต" และ "เครื่องจำลองการเป็นกลางคาร์บอน" ค้นพบ ปัญหารอบ ๆ เมืองมุโรโตะที่ใช้ข้างต้น
และคิดเกี่ยวกับนโยบายที่สามารถดำเนินการได้ตั้งแต่บัดนี้เป็นต้นไปเพื่อแก้ไขปัญหาเหล่านั้นจากมุมมองของนายกเทศมนตรีในอนาคตในปี 2593

(วิดีโอภาพรวมเกี่ยวกับหาเนกาชิมะ:https://www.youtube.com/watch?v=A5DCg5XzcA4

คำสำคัญ: ปัญหาสิ่งแวดล้อม การพัฒนาชุมชน ความร่วมมือกับชุมชนลดคาร์บอน

②活用例2：Microsoft Translator(音声、チャットの同時通訳・翻訳)

音声、チャット内容を互いが設定した言語に翻訳する機能。
また、会話の内容はテキスト保存が可能なので、会話内容を確認、他者と共有することもできる。

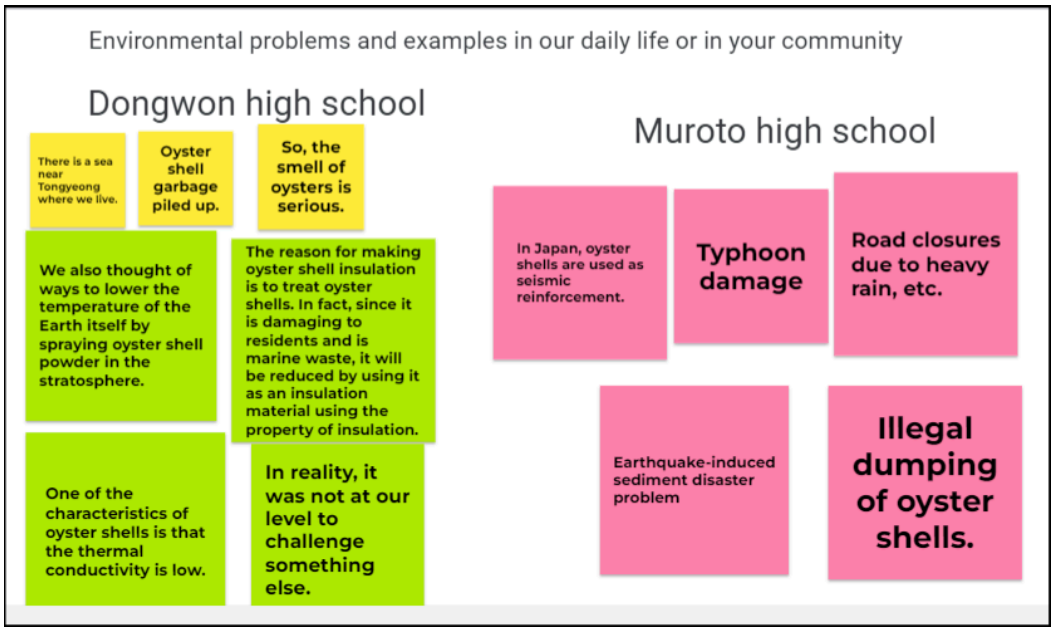


③活用例3：Google 翻訳拡張機能（ウェブページの多言語翻訳）

Google Chrome の拡張機能に Google 翻訳を追加することで、ウェブページをまるごと多言語に翻訳可能。
言語にとらわれずに情報収集ができる。

④活用例4：Google Jamboard（ふせんツール）

ふせんを使った情報共有をオンラインで行うイメージ。オンラインで行うことで、それぞれの母語を共通言語に瞬時で訳すことができる。



韓国と日本の高校生が環境問題について意見交換を行った際のスライド）。英語で話すにはテーマが難しかったため、Microsoft translator でディスカッションを行い、その内容を Google 翻訳も活用しながら Google Jamboard で共有した。

⑤その他：マルチリンガル教科書（多言語に対応したデジタル教科書）※小中学校

⑥小括として

学校現場におけるテクノロジーの活用の一番の魅力は「個別最適な」教育機会の提供である。ICT の活用は、言語の壁をはじめとしたそれぞれの生徒の抱える多様な課題を超えた包括的な教室を作ることにおいて、大きな可能性を持っている。ただし同時に、新たな試みは常に不安や負担感をもたらすのも事実だろう。テクノロジーの活用には予測できないトラブルつきものである。しかし、教員が試行錯誤し、トラブルに柔軟に対応しようとする姿勢を生徒に見せることができるのもまた、テクノロジーの活用の魅力となりえるのではないだろうか。

「新しい時代を生きる子供たちに、学校教育は何を準備しなければならないのか（文部科学省）。」多様な生徒を迎え、試行錯誤しながら教育活動を行っている東濃高校はまさに「新しい時代」の教育を経験できる場であり、そしてICTの活用は未来への教育を拓く礎石となるのではないだろうか。

■ 最後に

日本の生産年齢人口は減少の一途をたどり、海外からの労働者が増加している。彼らも日本社会を支える一員であり、その子どもたちが安心して学ぶことができる学校づくりはこれからの教育現場に不可欠な視点である。しかし、多様な課題に対応するためには、教職員の努力のみならずステークホルダーとの協働体制の構築を推進する必要がある。また同時に国家規模の体制づくりも進んでいる。そのことは文部科学省が定めた 2023 年度から高等学校での日本語指導を卒業単位としての認定において、民間の日本語教師の補助的な役割が認められる（朝日新聞）ことからも読み取ることができる。「誰一人取り残さない」学校の体制づくりは今後もますます進んでいくだろう。

今回、岐阜県立東濃高校における様々な課題や学校の取り組み、先生方の努力、展望を語るにあたり分かったことは、「多文化共生の文化」を創り上げる努力は、結果として外国につながる生徒に限らず、多様な背景をもつ日本の子どもたちへのより良い教育の提供にもつながるということである。互いの違いを認め、尊重し、対等な関係を築きながら生きる社会の実現に向けて、まずは目の前の全ての子どもたちに何ができるか、いかにして外部組織との連携を進めるか、私たち教員が希望をもって教育実践を日々積み重ねていくことが大切なのではないだろうか。

東濃高校では来年度、新しい分掌として「国際部」が立ち上がり、その先進的な取り組みは、SDGs 時代に相応しい学校教育の在り方を示す試金石となるだろう。そういった中、異なる背景を持つ三校（岐阜、大阪、高知）の教員が本研修で得られたつながり、多文化共生への新たな視点や知見を活用し、協働しながら教育を語ったこの報告書が、東濃高校に限らず、誰もが公平に尊重される学校文化の構築につながることを期待したい。　東濃高校では、来年度新しい分掌として「国際部」が立ち上がる。本研修で得られたつながり、多文化共生への新たな視点や知見を、誰もが公平に尊重される学校文化の構築につなげていきたいと強く考えている。

【参考ホームページ、及び文献一覧】

（1）参考 HP・参考文献

- 大阪府 HP「エンパワメントスクールに関すること」 https://www.pref.osaka.lg.jp/kokosaihenseibi/empower/index.html
- 大阪府立布施北高校 HP http://www.osaka-c.ed.jp/fusekita/
- 大阪府立長吉高校 HP https://www2.osaka-c.ed.jp/nagayoshi/education/
- 大阪府立東淀川高校 HP https://www2.osaka-.ed.jp/higashiyodogawa/folder_3/post-33.html
- 大阪府教育委員会（2015）「中退の未然防止のために～1年生を中心とした取組みの要点と具体例～実践事例集」（2022.1.8 確認）https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/6362/00000000/tyutaijissen.pdf
- 文部科学省 高等学校における日本語指導の在り方に関する検討会議（2021)「 高等学校における日本語指導の制度化及び充実方策について（報告)」https://www.mext.go.jp/content/20211013-mxt_kyokoku-000018412_02.pdf（2022.1.8 確認）
- アクティブ・ラーニング（中島博司氏）ALを学力向上につなげる「AL指数」と「R80（アールエイティ)」https://find-activelearning.com/set/309（2022.1.8 確認）
- 文部科学省の「かすたねっと」https://casta-net.mext.go.jp/ （2022.1.8 確認）
- 文部科学省総合教育政策局国際教育課「外国人児童生徒受入れの手引き」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm（2022.1.8 確認）
- 小島祥美編著『Q&A でわかる外国につながる子どもの就学支援「できること」から始める実践ガイド』明石書店、2021 年

（2）参考HP・参考文献

- 田中宝紀『 海外ルーツの子ども支援 言葉・文化・制度を超えて共生へ』青弓社、2021 年
- United Ways of the National Capital Area「Equity vs. Equality; What’s the Difference - Examples & Definitions」（公平性と平等性 - 例と定義）https://unitedwaynca.org/blog/equity-vs-equality/（2022.1.16 参照 ）
- United Way of Whitewater Valley「Equity vs. Equality: The Difference between Two Similar Words」（公平性 vs. 平等性 - 似たような 2 つの言葉の違い）https://givetheunitedway.com/equity-vs-equality/(2022.1.16 参照)

（3）参考 HP・参考文献

- Google. Google Workspace. https://www.g-workspace.jp/googleworkspace/
- Microsoft. 教育のためのマイクロソフト翻訳. https://www.microsoft.com/ja-jp/translator/education/
- 文部科学省 中央教育審議会資料「2030 年の社会と子供たちの未来」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364310.htm
- 啓林館. マルチリンガル教科書. https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/chu/text_2021/multilingual/

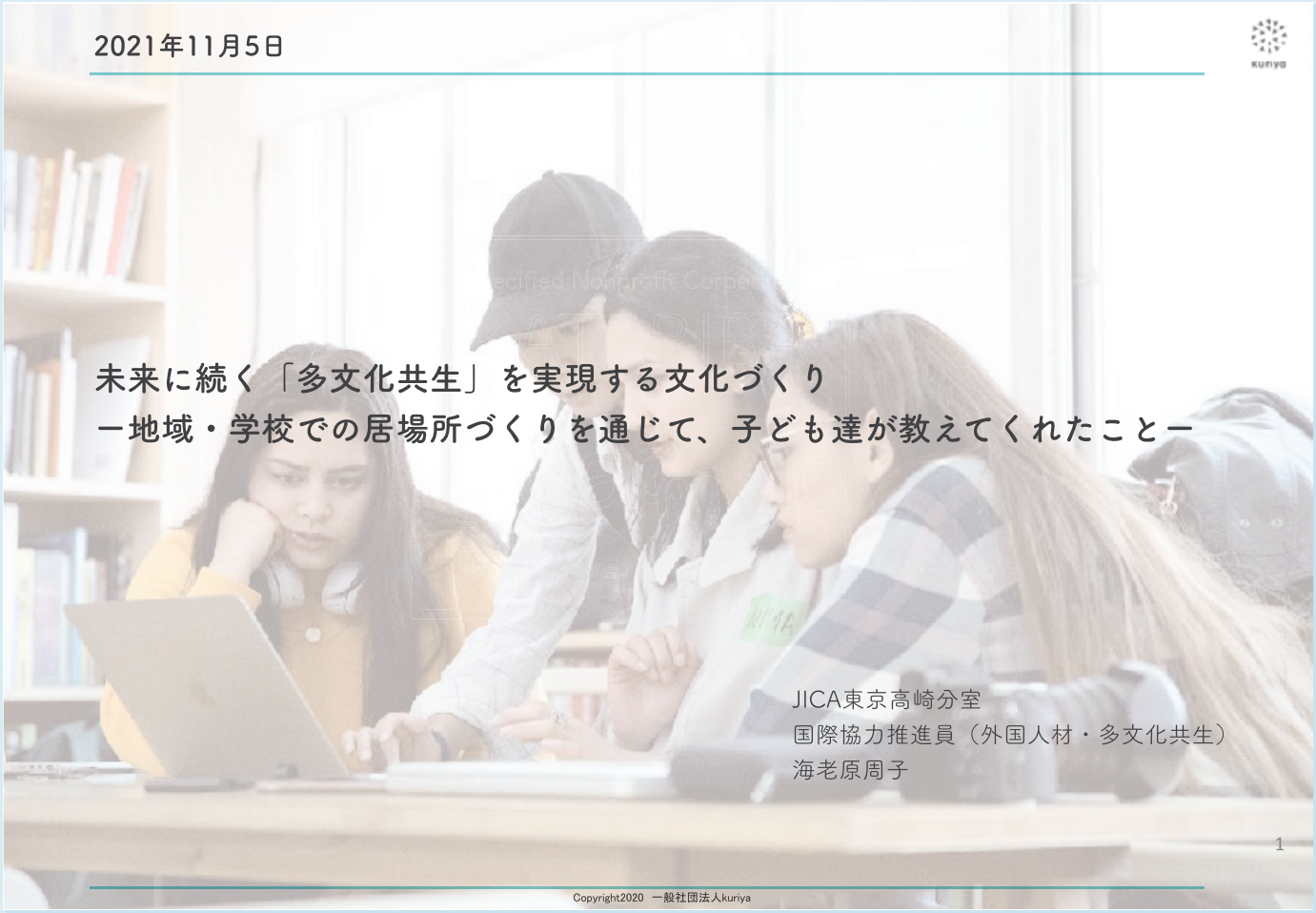
■「最後に」 参考 HP

- 朝日新聞「外国籍高校生らに「日本語」授業、単位認定へ 文科省が 23 年度から」（2022.2.5 閲覧）https://www.asahi.com/articles/ASQ1S6K1FQ1SUTIL010.html?iref=pc_ss_date_article

5 資料

(1) 研修資料

JICA 東京 高崎分室 国際協力推進員（外国人材・共生）
海老原 周子氏　講演資料



ねらい・本日の流れ

「これからの学校において、多文化共生の文化をつくるとは？」

●目的・ねらい

考えるヒントとなるような

①視点や考え方

②多文化な場づくりの工夫

③多様な子ども達を受け入れる仕組み・体制

●本日の流れ

1. 自己紹介（これまでの活動紹介）
2. 概観　（日本における外国ルーツの子どもの現状と課題）
3. 実践例　（学校内外の居場所づくりの取り組み）
4. まとめ　（多文化共生の文化とは？）

2

Copyright2020　一般社団法人kuriya

自己紹介

●自分と多文化共生　→マイノリティとして育った自分

・中学時代のイギリスでの「外国人体験」→ 言葉の壁、文化適応、人種差別、親の通訳

・寄り添ってくれる学校の先生や大人達の存在

・日本では？帰国してから気がついたサポートの不在

●プロフィール

ペルー、イギリスで育つ。慶應義塾大学卒業後、（独）国際交流基金・国連（IOM国際移住機関）で勤務。2009年に外国籍の中高生と地域とをつなぐ多文化理解ワークショップを立ち上げた事をきっかけに、2016年一般社団法人kuriyaを設立。外国籍等の高校生のキャリア育成に着手し、定時制高校での放課後の居場所づくりを通じて、中退防止やキャリア支援に取り組んできた。また、多文化理解教育として、映像や写真を通じた外国籍等の子どもや高校生の表現活動も行なう。東京を中心に、これまで100回のワークショップを実施し、500人以上の子ども・若者と接してきた。

2019年　文部科学省 外国籍等児童生徒教育アドバイザー

2020年　東京都教育委員会スーパバイザー

2021年よりJICA東京高崎分室にて、国際協力推進員（外国人材・多文化共生）

3

Ã 2020一般社団法人kuriya

これまでの取り組み

1. Art Workshop　学校外での居場所づくり

・映像・写真・ダンス・音楽などを通じた多文化交流ワークショップ
・主に東京を中心に、茨城のブラジル人学校やネパール人学校でも実施
・児童館や地域団体との連携

2. After School　學校内での居場所づくり

・定時制高校にて週1回～3回の放課後部活動として実施
・留学生、大学生との多文化交流
・高校・大学・NPOによる三者連携

3. 政策提言

・高校中退や進路の調査を提案 → 高校中退率や非正規雇用の高さが明らかに
・高校生のための包括支援体制整備を提案 → 補助事業の一環として実施
・在留資格「家族滞在」の資格切替の要件緩和を提案 → 一定要件のもと、切替可能に

©2019一般社団法人kuriya

kuriya

現状と課題

外国ルーツの子ども・若者

●本日の流れ

1. 自己紹介（これまでの活動紹介）
2. 概観　（日本における外国ルーツの子どもの現状と課題）
3. 実践例　（学校内外の居場所づくりの取り組み）
4. まとめ　（多文化共生の文化とは？）

5

Ã 2020一般社団法人kuriya

現状と課題

日本に在住する外国人は約2%

総人口に占める割合令和元年６月末

日本人の人口は10年連続で減少　→ 約1億2470万人
外国人の人口は前年末に比べ3.6%増　→ 約282万人

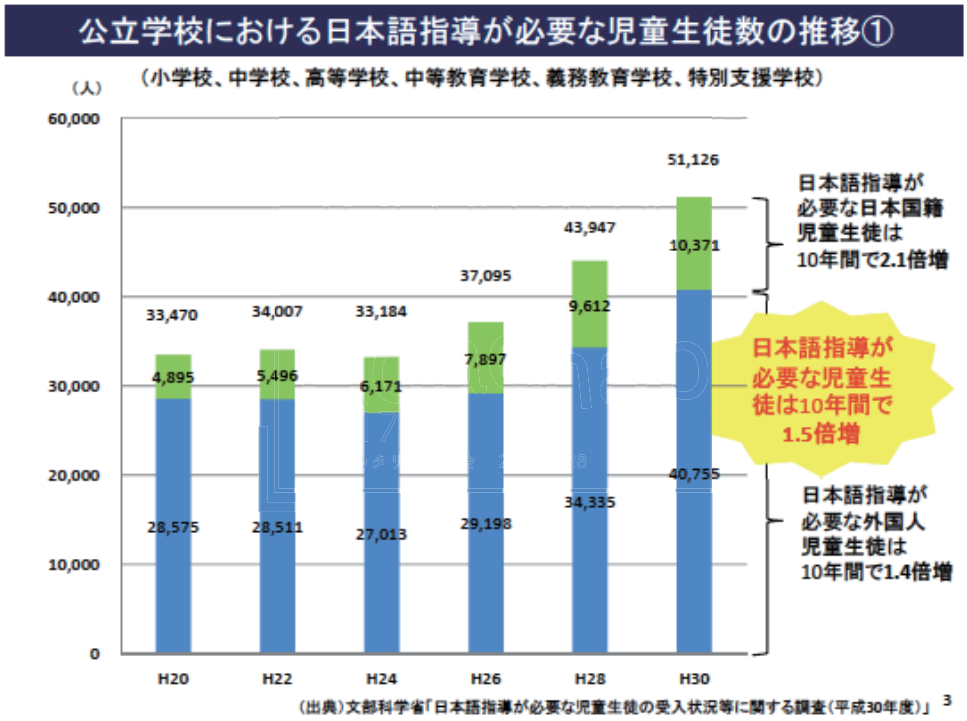
(令和元年１月１日の住民基本台帳に基づく)

留学生、技能実習生、会社員など
学ぶため、働くために来日する外国人

家族と暮らすために来日した
外国ルーツの子ども・若者

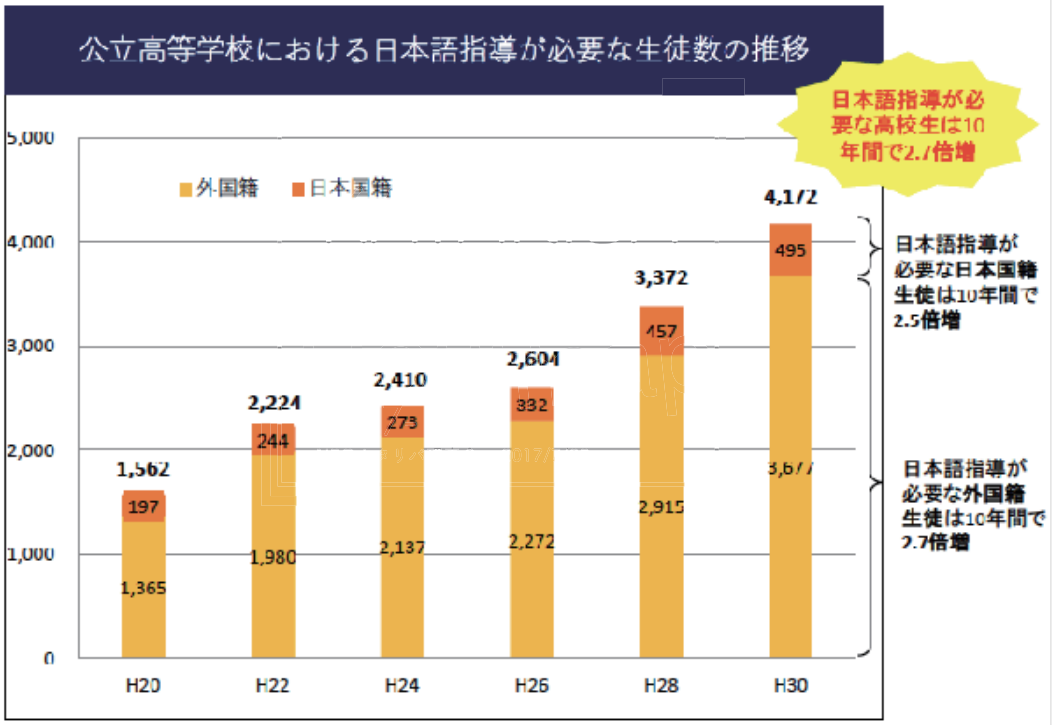
©2020一般社団法人kuriya

現状と課題



Copyright2020　一般社団法人kuriya

現状と課題



（出典）文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」

8

Copyright2020 一般社団法人kuriya

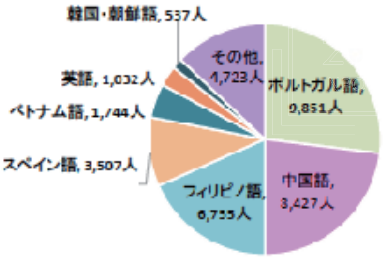
現状と課題

共生社会の実現に向けた帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援

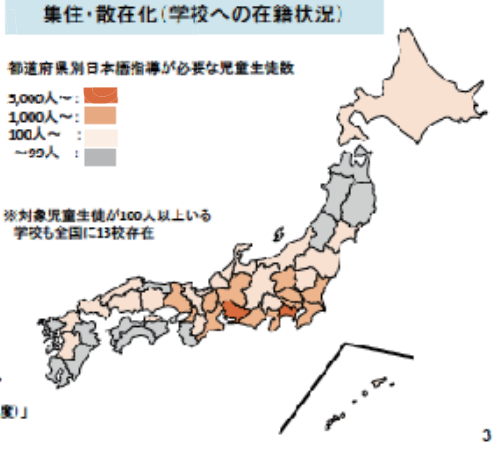
- ○ 外国人がその保護する子を公立義務教育諸学校へ就学させることを希望する場合、国際人権規約等を踏まえ、無償で受け入れており、日本人児童生徒と同一の教育を受ける機会を保障。
- ○ 公立学校における日本語指導が必要な児童生徒（日本国籍含む）は10年間で1．5倍増（平成30年度に5万人超）。
- ○ 他方、こうした児童生徒のうち2割以上が、日本語指導等の特別な指導を受けることができていない。
- ○ また、令和元年度の調査では、約2万人の外国人の子供が、就学していないか、就学状況が確認できていない状況にあることが明らかに。

⇒ 外国人の子供の就学促進を図り、日本語指導が必要な児童生徒に対する指導・支援体制を充実させるとともに、日本人と外国人の子供が共に学ぶ環境を創出することにより、活力ある共生社会の実現を図る。

多様化の進展（外国人児童生徒の母語）



集住・散在化（学校への在籍状況）



※公立小・中学校に在籍する日本語指導が必要な外国籍児童生徒数 36,576人

出典：文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査（平成30年度）」

9

Copyright2020 一般社団法人kuriya

kuriya

1 外国ルーツの高校生の高い中退率、低い進学率

2 外国ルーツの子どもが適切なサポートを受けられない

日本語教育が必要な高校生と公立高校生の中退率と進路状況

	日本語教育が必要な高校生	公立高校生
中退率	9.61%	1.27%
進学率	42.19%	71.24%
非正規就職率	40.00%	4.62%
進学も就職もしていない生徒の率	18.18%	6.50%

日本語教育が必要な高校生は公立高校生と比べて

- ▶ 7倍以上の割合で中退
- ▶ 進学率は約6割
- ▶ 約9倍の確率で非正規就職
- ▶ 約3倍の確率で進学も就職もしていない

出典｜2018年9月30日 朝日新聞より

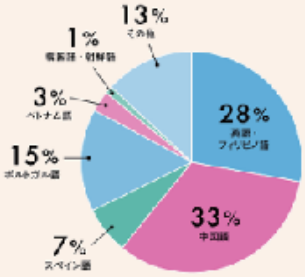
Copyright2020 一般社団法人kuriya

kuriya

背景 | 日本人と共に育つ外国人の若者たち

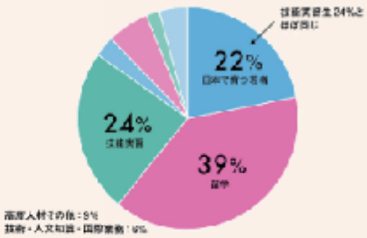
- 東京の新成人の8人に1人。英語やアジアの言語が出来る。
- 16歳～26歳で見ると、日本で育つ外国籍の若者は、技能実習生と同じくらいいる。
- 未来の納税者、子どもを産む世代 → これから伸びる人口・社会保障の担い手にも

言語の力



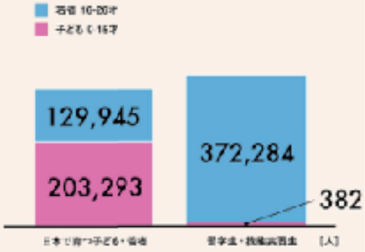
定時制高校の生徒たち

若者16～26才



技能実習生24%とほぼ同じ

子ども・若者



技能実習生＋留学生とほぼ同じ

Copyright2020 一般社団法人kuriya

子ども達が直面する課題

「日本語が出来ない」

「言葉の壁」は氷山の一角

自己肯定感

友達や相談先

文化の壁

家庭状況

経済状況

子ども・若者

12

Copyright2020　一般社団法人kuriya

子ども達が直面する課題

13

教員

「言葉が通じない」
「日本語ができない」

先生が見えている課題

複合的な課題・壁

言葉の壁

日本語が出来ない

進路の壁

未来が描けない

学校生活の課題

友達がいない

学力が足りない

進路の課題

情報の不足

ロールモデルの不足

「外国人」ならではの課題

在留資格

差別偏見

文化アイデンティティ

家庭状況・経済面の課題

お金がない

保護者の理解がない

虐待 DV

課題の背景

これまで３００人の子ども・若者と接してきて必ず言う言葉

どうしていいかわからない

©2020 kuriya All Rights Reserved.

子ども達が直面する課題

これまで出会ってきた子ども・若者が必ず発する言葉は？

「・・・・・・・・・」

子ども・若者

Copyright2020 一般社団法人kuriya

子ども達が直面する課題

「友達がいない」　「相談する相手がいない」

子ども・若者

・これまで育ったコミュニティから切り離されて来日。
・親にも頼れない状態

日本社会との関係性・・・・社会関係資本の少なさ
↓
居場所づくり

Copyright2020 一般社団法人kuriya

居場所づくりの取り組み事例

地域との連携・学校との連携

●本日の流れ

1. 自己紹介（これまでの活動紹介）
2. 概観　（日本における外国ルーツの子どもの現状と課題）
3. 実践例　（学校内外の居場所づくりの取り組み）
4. まとめ　（多文化共生の文化とは？）

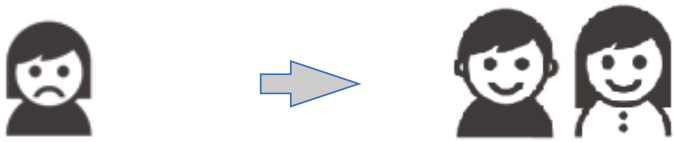
16

Ã 2020一般社団法人kuriya

事例１ 映像・写真・ダンス・音楽のワークショップを実施

kuriya

子どもの変化



「友達ができた」・「ここにいると素の自分でいられる」

17

©2020一般社団法人kuriya

居場所づくりの工夫・子どもへのアプローチ

kuriya

「友達ができた」・「ここにいると素の自分でいられる」

工夫①・・・その子の「強み」を見つけるストレングス・アプローチ

例１）タイルーツの小学校５年生

例２）フィリピンルーツの中学校1年生

工夫②・・・グループワークを取り入れ、子ども達同士が共通事項を発見

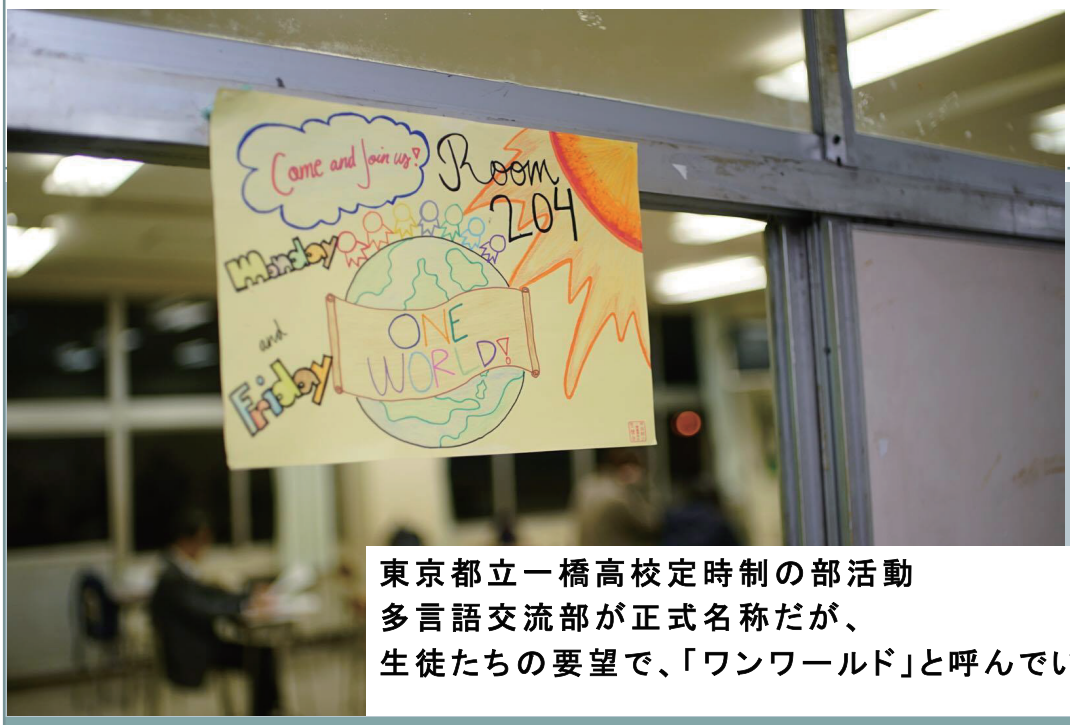
例１）アイスブレーキングの時に、「ルーツ」から入らない

例２）好きなこと、関心のあることでつながる。

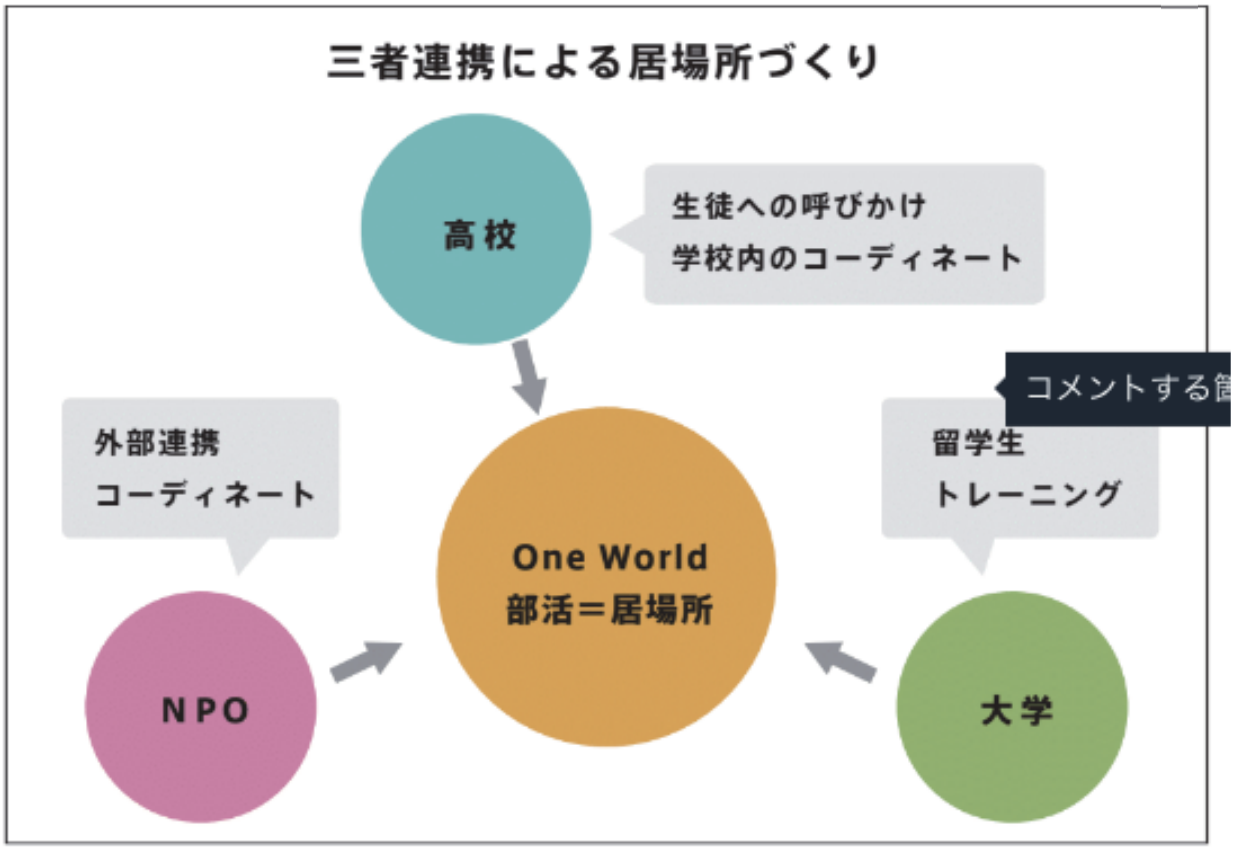
18

©2020一般社団法人kuriya

多言語交流部（One World）について



東京都立一橋高校定時制の部活動
多言語交流部が正式名称だが、
生徒たちの要望で、「ワンワールド」と呼んでいます。



©2020一般社団法人kuriya

1. 第1期・立ち上げ期：居場所をつくる
写真と映像の表現活動
Community Building through Storytelling

コメントする箇所を選択

- **実施期間**：2016年1月～3月（毎週月・金 16:30 – 17:30）
- **合計実施日数**：19日
- **実施場所**：東京都立一橋高校 定時制

©2020一般社団法人kuriya

2. 第２期・試行期：自己肯定感をつくる言葉と文化の交流活動

Community Building through Language and Culture

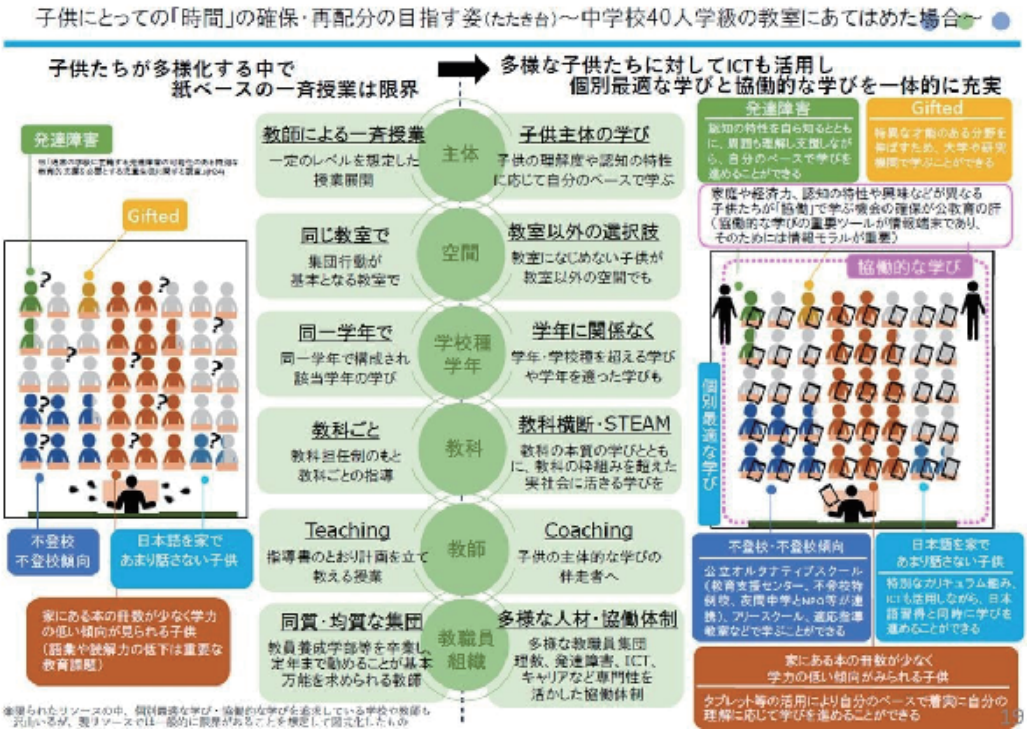
●実施期間：2016 年 4 月～9 月（毎週水・金 16:30 – 17:30 ）

©2020一般社団法人kuriya

22

現状と課題　・・・　クラスに1人は、日本語を家であまり話さない子がいる状況に

引用：内閣府　総合科学技術・イノベーション会議教育・人材育成ワーキンググループ（第3回）資料１より抜粋



23

Copyright2020　一般社団法人kuriya

事例 2 | 社会にはたらきかける

Phase 1：自らを知る・行動する

自らの強み・弱みを知る
Life Mapping

↓

自らの持つリソースを知る
Resource Mapping

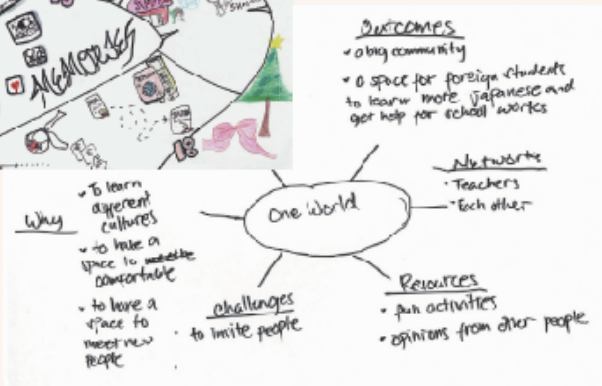
↓

自らの課題について考える
Action Planning

↓

強みやリソースを活かして
課題解決ができるという自信

参加者がつくった
「Map」の一例



©2019一般社団法人kuriya

kuriya

第３期：運営期（役割を作る）

●生徒が主体的に活動やプログラムをつくる

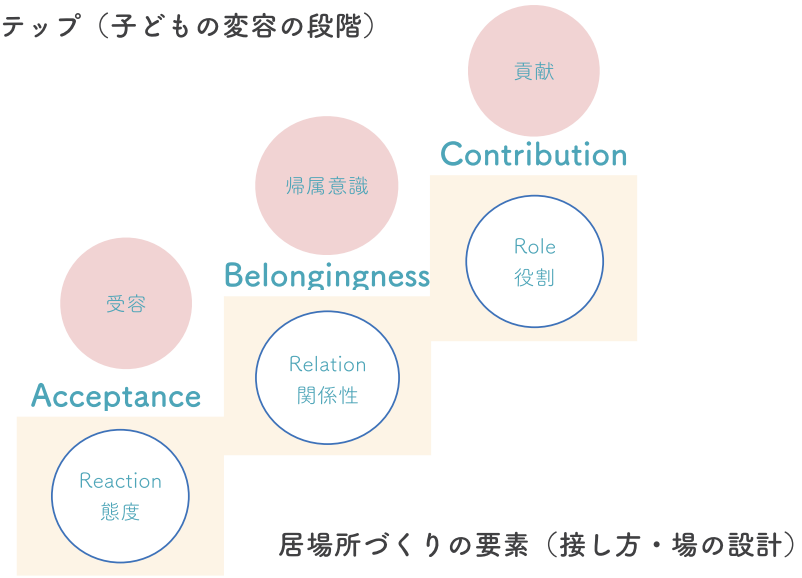
①多様性を考える「多文化ルービック・キューブ」
②留学生との交流プログラム
③後輩への進路ガイダンスなど

©2020一般社団法人kuriya

居場所づくりでの工夫・場の設計

kuriya

居場所づくりのステップ（子どもの変容の段階）



26

Copyright2020　一般社団法人kuriya

まとめ

多文化共生の文化とは？

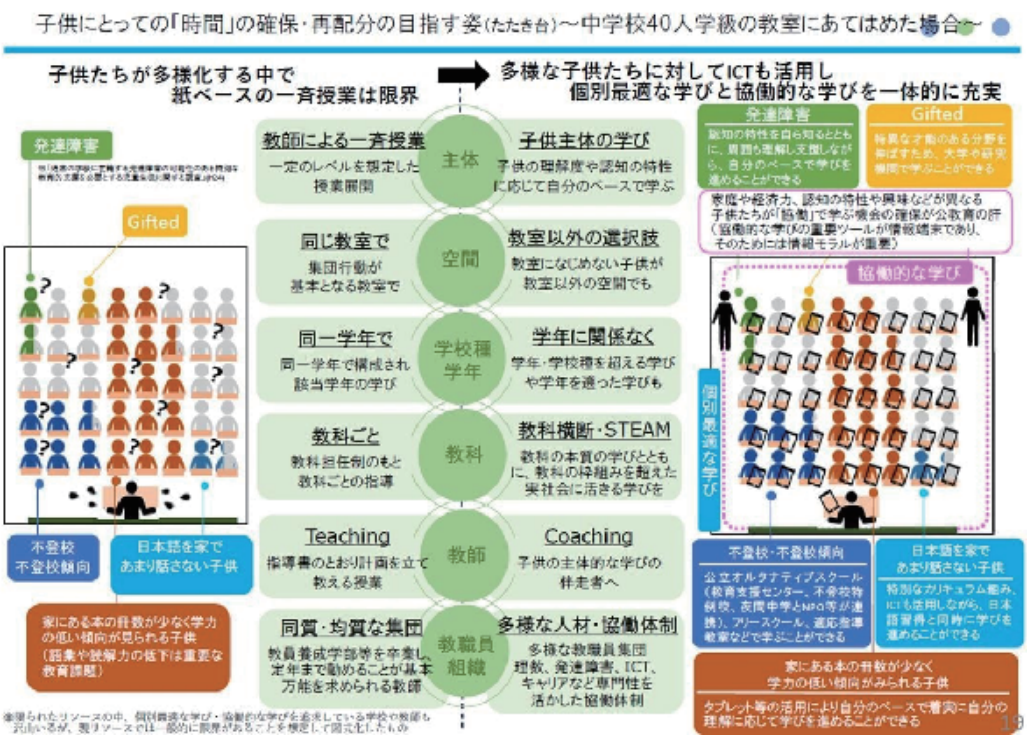
多文化共生をつくる仕組み・体制

27

Ã 2020一般社団法人kuriya

現状と課題　・・・　クラスに1人は、日本語を家であまり話さない子がいる状況に

引用：内閣府　総合科学技術・イノベーション会議教育・人材育成ワーキンググループ（第3回）資料１より抜粋



28

Copyright2020　一般社団法人kuriya

まとめ

「これからの学校において、多文化共生の文化をつくるとは？」

↓

居場所づくりの実践を通じて、子ども達が教えてくれたことの中にヒントが

その子と「共に」を考える文化

「〇〇さん」がより楽しく学校生活を送るためにどうすればいいかな？
　と考える子ども達

大多数に合わせることや、できないことを面倒・邪魔と排除するのでなく、
「何ができるかな？」を考えること

でも現実は・・・・

29

Copyright2020　一般社団法人kuriya

現実は・・・

多様な児童生徒への対応・・・手間も時間もコストもかかる

↓

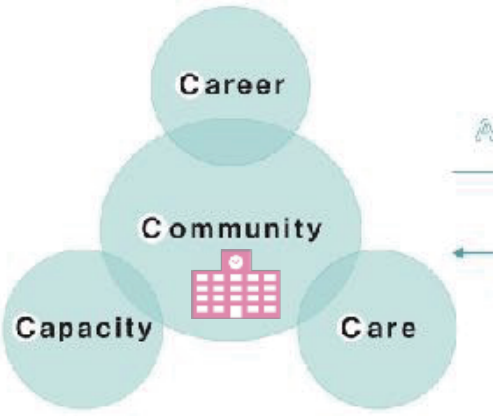
だからこそ、仕組みや体制が必要

30

Copyright2020 一般社団法人kuriya

多様な児童生徒に対応するための包括的な学校モデル

多文化共生のための包括的な支援体制（４Cモデル）



Community	・・・学校：相談できる場、安心できる居場所
Care	・・・ソーシャルワーカー、弁護士等：専門的な支援
Capacity	・・・日本語教育等：日本語、スキルなどの開発・育成
Career	・・・キャリアカウンセラー等：就労・進学などのキャリア

31

Copyright2020 一般社団法人kuriya

現実は・・・

とは言えども、先生1人、学校単体で、複合的な機能を担うことは限界がある。

だからこそ、多様な人材や団体と「共に」連携していくことが重要

・きく力　・・・　こういう人や団体を探していると聞く
・つながる力　・・・　外部の人材や団体とつながる
・頼る力　・・・　それぞれの「強み」を活かして役割分担する

32

Copyright2020　一般社団法人kuriya

未来に続く「多文化共生」を実現する文化づくり

「日本で育って良かった」と
子ども達が、大人になった時に思えること

ご静聴、ありがとうございました

33

Copyright2020　一般社団法人kuriya

（2）多文化共生のための参考文献・教材・資料リスト

※児童生徒向け

No.	種別	タイトル	著者	出版社	価格（税込）	出版日	関連サイト
			ひとことレビュー				
1	エッセイ	ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？	ロビン・ディアンジェロ	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	
			ホワイトフラジリティとは「白人の心の脆（もろ）さ」。差別を否認することはマジョリティの特権性につながる・・・どうしたらお互いを理解できるのかを問いかけます。				
2	教育実践	多文化クラスの授業デザイン——外国につながる子どものために	松尾知明	明石書店	¥2,420	2021年3月19日	
			外国につながる子どもたちへの学びの支援は何が必要か。教科をベースに学習言語と学習方略の支援へのアプローチを紹介しています。				
3	教育実践	多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック	多文化共生のための市民性教育研究会編著	明石書店	¥2,200	2020年4月2日	
			日本社会の多文化共生に向けたシティズンシップ教育の実践を提案しています。「違いを認める」ことは大切だが、個人の「思いやり」だけでは解決しない。アクティブラーニングの具体的なテーマから考えます。				
4	研究書	「人種」「民族」をどう教えるか—創られた概念の解体をめざして	中山京子他編著	明石書店	¥2,860	2021年1月8日	
			社会的に創られた概念であるのに、実体化されて差別や偏見を生んでいる「人種」「民族」をどう教えるか。学術的見地からみた正しい認識と、これまでに日本や海外で行われた授業実践の蓄積を踏まえて、教師が教えるための小・中・高の授業プランを提案する。				
5	国際理解教育	国際理解教育を問い直す—現代的課題への15のアプローチ	日本国際理解教育学会	明石書店	¥2,750	2021年4月2日	
			国際理解教育の原点を問い直す・・・国際理解教育の歴史をたどると共に、これからの国際理解教育はどうあるべきか、授業のあり方などを考えます。				
6 ※	作品集	横浜（koko）——「外国につながる」ではひとくくりにできない中高生の作品集	Picture This Japan（監修），横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト写真集編集委員会（編集）	明石書店	¥1,980	2021年5月7日	
			外国につながる子どもたち（インターナショナルユース）の目線で切り取った「横浜」の写真集。見た目や言語にとらわれず、自分らしい表現がたくさんあります。とてもステキな写真集です。				
7	実践ガイド	Q&Aでわかる外国につながる子どもの就学支援「できること」から始める実践ガイド	小島祥美（編著）	明石書店	¥2,200	2021年3月1日	
			何から取り組めば良いのか？Q&Aでわかりやすく伝えます。				
8	実践ガイド	外国人児童生徒受入れの手引 改訂版	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画強制社会学習・安全課	明石書店	¥800	2019年4月25日	
			外国人児童生徒の公立学校への円滑な受入れに資することを目的として、文部科学省が作成した「外国人児童生徒受入れの手引き」です。				

9	ノンフィクション	芝園団地に住んでいます：住民の半分が外国人になったとき何が起きるか	大島 隆	明石書店	¥1,760	2019年10月1日	埼玉県川口市芝園団地は住民の半分が外国人。一つの団地に二つの世界。どんな感情が芽生え、それをどうしていけば良いのか、実際に芝園団地に住む著者の記録です。
10	ノンフィクション	にほんでいきる	毎日新聞取材班 編	明石書店	¥1,600	2021年2月22日	外国籍の子ども達が日本でいきるためには何が必要なのか、その実態を取材しました。子ども達の「学ぶ権利」は守られているのでしょうか。差別や格差について考えます。
11	ノンフィクション	アンダーコロナの移民たち——日本社会の脆弱性があらわれた場所	鈴木 江理子	明石書店	¥2,750	2021年6月1日	現在のコロナ禍は外国につながる子ども達とその家庭にとって大きな危機となっています。どうやって支援をすべきなのかを考える一冊です。
12	評論	日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション——人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別	デラルド・ウィン・スー	明石書店	¥3,850	2020年12月18日	いろいろな場面で現れる無意識でありながら重大な差別と言われるマイクロアグレッション。マジョリティとマイノリティが共に尊重し合うためにはどうすれば良いのかを考えます。
13	エッセイ	他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ	ブレイディ みかこ	文芸春秋	¥1,595	2021年6月25日	アナーキーとエンパシーは繋がっている。自分の靴を脱げなければ、他者の靴は履けない。共感だけではたどりつけない、生き抜くために必要な力とは何か、作者は様々な場面から問いかけます。
14 ※	教材・読み物	未来の授業 SDGs ダイバーシティ BOOK	佐藤直久監修	宣伝会議	¥1,980	2021年12月28日	「ダイバーシティ」というテーマを通して自身のあり方を深める教材です。みんなが活き、活かされる社会を創るためにはどうすればいいのか、小学生から大人まで、豊富なマンガやイラストを通して学べます。
15	評論	海外ルーツの子ども支援 言葉・文化・制度を超えて共生へ	田中宝紀	青弓社	¥2,000	2021年5月25日	日本の学校で学ぶ海外ルーツの子どものうち、1万人以上が何の支援もない状態にあり、地域ボランティアたちによる日本語教室の活動にも限界が迫っています。日本語を母語にしない子どもたちへの支援活動を続けてきた経験に基づく現状と提言です。
16	実践ガイド	学級担任のための外国人児童指導ハンドブック	菊池 聡	小学館	¥1,800		教室での「困った！」をズバリ解決！国際教室のスペシャリスト菊池先生がマンガで登場、指導のコツとポイントをわかりやすく解説します。
17 ※	マンガ	まんが アフリカ少年が日本で育った結果	星野ルネ	集英社	¥1,100	2018年8月20日	カメルーン生まれ、日本育ちのアフリカ少年のニッポン観察日記。「あたりまえ」って何だろう？前向きなパワーに元気が出ます！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）
18 ※	マンガ	まんが アフリカ少年が日本で育った結果 ファミリー編	星野ルネ	集英社	¥1,100	2019年3月30日	ファミリー編はフルカラー＆総ルビでさらにパワーアップしています！ ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）

19 ※	マンガ	まんが アフリカ少年が見つけた 世界のことわざ大集合 星野ルネのワンダフル・ワールド・ワーズ！	星野ルネ	集英社	¥1,210	2020 年 5 月 26 日	単なる世界のことわざ辞典ではありません。星野ルネさんの体験を通じたことわざから、世界が広がります。 ※星野ルネさんの本は、教材として使用することができます。（申請不要）
20	ノンフィクション	外国ルーツの若者と歩いた 10 年	海老原周子	公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京	無料（HP から DL）	2021 年 3 月 15 日	本研修でもお話いただいた海老原周子さんの著書。外国ルーツの若者を取り巻く現状やワークショップの現場で見えてきた課題、次の 10 年に向けて取り組むべきことの提案などを、活動の記録と共に記しています。リンクから PDF が DL できます。
21	教育実践	多文化社会で多様性を考えるワークブック	有田佳代子、志賀玲子、渋谷実希〔編著〕／新井久容、新城直樹、山本冴里〔著〕	研究社	¥2,200	2018 年 12 月 17 日	さまざまなバックグラウンドを持つ人々が一緒に生きる社会で、仲間と考えを伝え合いながら理解を深め、あらためて多様性を考え得るワークが掲載されています。子どもから大人までアレンジして使えます。
22 ※	教育実践	〈超・多国籍学校〉は今日もにぎやか！多文化共生ってなんだろう	菊池　聡	岩波ジュニア新書	¥820	2018 年 11 月 20 日	国際教室での取り組みを現場からお伝えします！困難や問題を解決するヒントがたくさんあります。
23 ※	マンガ	となりの席は外国人	あらた真琴	ぶんか社		2012 年 4 月 2 日	もと小学校教員の作者が外国につながる子どもがたくさんいる学校に赴任した！気軽に読めるマンガです。
24	教育実践	チャレンジ！多文化体験ワークブック：国際理解と多文化共生のために	村田晶子 / 中山京子 / 藤原孝章 / 森茂　岳雄 編	ナカニシヤ出版	¥2,200	2019 年 6 月 30 日	授業や学生主体の交流活動、地域の国際交流活動でも使える Chapter は「問い」と「活動」で構成されています。ワークシートもついているので振り返りや報告会にも活用できます。
25 ※	エッセイ	ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー	ブレイディ みかこ	新潮社	¥1,350	2019 年 6 月 30 日	ここはイギリス、中学生の「ぼく」はイエローでホワイト、その中で考える多様性とは、アイデンティティって何だろう？？読みやすいエッセイから考えます。成長した「ぼく」の親離れを描く「2」もあります！
26 ※	教材・読み物	WE HAVE A DREAM 201 ヵ国 202 人の夢× SDGs	市川太一編	いろは出版	¥2,860	2021 年 6 月 12 日	世界 201 ヵ国の若者たちが語るそれぞれの夢。その夢が繋がるところに何が見えるでしょうか。それぞれの夢がどの SDGs に関連しているかも考えます。英語版もあります。

27 ※	写真集	Daily Bread: What Kids Eat Around the World	Gregg Segal	powerHouse Books	¥5,720	6月4日2019年	世界の子ども達は、何を食べているのでしょうか？セネガルやブラジル、インドネシアなど世界の子ども達と彼らが1週間で食べたものを美しい写真で紹介しています。
28	報告書・ワークショップ集	教師国内研修報告書＆ワークショップ集 多文化共生 ～困難さを豊かさに変えるプロセス～	―	JICA横浜	無料（HPからDL）		誰ひとり取り残さない持続可能な社会へ向けて、日本から海外に渡った日本人移住者の歴史や、海外から日本に戻ってきた人々の暮らしに触れることを通して、多文化共生について理解を深め、研修で得た知識や経験をもとに、「持続可能な社会」「誰ひとり取り残さない」をテーマとした参加型学習教材（ワークショップ）を作成しました。
29 ※	教材・読み物	世界の教室から	―	JICA東京	無料（HPからDL）		世界14ヵ国の教室の様子を写真とメッセージで紹介。外国につながる生徒の背景がわかります。
30 ※	実践ガイド	今日から私もバディさん	―	JICA中部	無料（HPからDL）		外国の人たちは「地域で共に生きる仲間です」バディさんは、地域で外国の方が安心して暮らすことができるように手助けをする仲間・相棒です。バディさんになるための入門書！
31	報告書・ワークショップ集	多様な社会を考える学びのプログラム集	―	JICA中国	無料（HPからDL）		はじめて開発教育・参加型の学習を実践しようとしている方や、多文化共生、多様な社会の構築について考えたいという方が、すぐに活用できるように作成しました。
32 ※	雑誌	JICA広報誌 JICA Magazine	―	JICA 広報部	無料（HPからDL）	偶数月発行	偶数月に発行されるJICAの広報誌です。中高生向けの記事もたくさん掲載！美しい世界の写真はスマホやPCのオリジナル壁紙としてDL可能です。電子書籍でも購読できます（無料）
33 ※	ポッドキャスト	「世界は可能性でいっぱい」presented by JICA Magazine	―	JICA 広報部	無料（HPからDL）	隔月配信	国際協力のゲートウェイJICA Magazine編集部のポッドキャスト番組です。世界各地、多種多様な職種で活動するJICA海外協力隊員や、専門家などを毎回ゲストに迎え、生の声をお届けします。現地で見た、聞いた、食べた、感じたことを編集部員がインタビューし、世界に目を向けるきっかけとなることを目指したトーク番組。
34 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」アフリカ篇（アフリカ全体）	―	JICA アフリカ部	無料（HPからDL）	2021年5月1日	主に中学生を対象とした開発教育用の教材です。知っているようで知らないアフリカのことと、アフリカ全体とアフリカの10か国について紹介しています。生徒向けの冊子、教員用の指導書および導入用の動画の3本立てで公開しています。ご希望の方には冊子を送付いたします。 問い合わせ先：広報部地球ひろば推進課　mptgp@jica.go.jp

35 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」アンゴラ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈アンゴラ編〉海辺に広がる大都会！石油とダイヤモンドの国の内線のきずあとと復興			
36 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」ジブチ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈ジブチ編〉中東とアフリカ、アジアとヨーロッパを繋ぐ「海上輸送の要」ジブチ！！			
37 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」ベナン	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈ベナン編〉行ってみたい！「ICT 産業」「観光産業」二つの顔を持つベナン！			
38 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」南アフリカ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈南アフリカ篇〉なぜラグビーが人々の心を厚くするのか。南アフリカが目指した「ワンチーム・ワンカントリー」とは？？			
39 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」南スーダン	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈南スーダン〉武器ではなくスポーツで競いあうことを体験。若者が活躍する国へ！南スーダン共和国！			
40 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」モザンビーク	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈モザンビーク編〉日本との不思議な縁を結んだ海野シルクロード。織田信長の家臣、黒人の侍「弥助」はモザンビークの出身だった！？？			
41 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」リベリア	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈リベリア編〉内戦やエボラウイルス、多くの困難に立ち向かう、たくましきリベリア。国民の平均年齢は 19 歳！！！			
42 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」ルワンダ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈ルワンダ編〉内戦を乗り越えて・・・ICT による国づくりがぐんぐん進む「アフリカの奇跡」ルワンダ！			
43 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」ウガンダ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈ウガンダ編〉「困ったときはお互い様」寛容な心を持った人々の国、ウガンダ！			
44 ※	教材・動画・指導書	「みんなが知らないアフリカのこと」サントメ・プリンシペ	ー	JICA アフリカ部	無料（HP から DL）	2021 年 5 月 1 日
			〈サントメ・プリンシペ編〉知る人ぞ知る幻の島。青い海に浮かぶ生き物の楽園！！			

JICAって?

日本

途上国に協力できる知識や技術を持った人がいます。

JICA（ジャイカ）

途上国と日本をむすぶ架け橋となって働いています。

開発途上国

世界人口の8割の人がさまざまな問題を抱えています。

「信頼で世界をつなぐ」を合言葉に、国際協力を行う日本の政府機関です。
開発途上国の課題解決に協力し、SDGsに貢献しています。

（※）JICA（ジャイカ）はJapan International Cooperation Agencyの略称です。

SDGs達成に向けたJICA（国際協力機構）の取り組み

食料増産

1.9倍

人口増加に伴い、コメの消費量が急増しているアフリカ。JICAでは日本の稲作技術を生かし、サブサハラ・アフリカにおけるコメの生産量を1.9倍に拡大させた。

※基準値（1,400万トン）と2016年（2,611万トン）の比較

2 飢餓をゼロに

安全な水へのアクセス

8,050万人

給水施設整備支援による給水人口（1999～2019年度）。安全な水を持続的に供給するために、水道や井戸の整備、行政能力や利用者組合設立など、ハードそソフト両面の支援が行われている。

6 安全な水とトイレを世界中に

母子手帳

34カ国・地域

2,000万冊

戦後日本で作られた母子手帳は、1990年代以降、各国の実情に見合った形に改良され、34カ国・地域および日本での推計年間発行数は約2,000万冊。母子の健康の記録として活用されている。

3 すべての人に健康と福祉を

防災

9割以上

2015年のネパール地震で被災した住宅のうち、耐震基準を満たし再建・着工された住宅は9割を超えた。

※JICAの支援対象世帯（56,516）を基準とする2018年7月現在の状況（51,230世帯、90.6%）

11 住み続けられるまちづくりを

学びの改善

1,500万人以上

JICAの支援を通じ、学びの改善に向けた質の高い教育環境を提供された子どもの数は、2015～2017年度の合計で1500万人以上に上る。

4 質の高い教育をみんなに

青年海外協力隊

45,786人

青年海外協力隊の累計派遣人数（1965～2020年度）は4万5千人超。JICAでは、青年海外協力隊の他にも、シニア海外協力隊など、開発途上国のために役立ちたいと望む人を世界各地に派遣している。

17 パートナーシップで目標を達成しよう

出典:「JICA 2021 ANNUAL REPORT」から一部抜粋・再編集

学校で活用できる JICA国際理解教育／開発教育支援プログラム

JICAでは、開発途上国の暮らしの現状や地球が抱える問題について、より多くの人に知ってもらうため、さまざまな教育支援を行っています。教材やウェブコンテンツを始め、JICA海外協力隊経験者が講師として伺う出前講座もあります。また「地球ひろば」では、国際協力とはどのようなものなのかを見て・聞いて・触れて体験できる展示を常設し、みなさんの訪問をお待ちしています。

先生・生徒のお役立ちサイト

JICA地球ひろばホームページにて、授業や家庭学習で活用いただける映像や教材のPDFデータや、下記のプログラムなどを公開しています。

https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/index.html 詳しくはコチラ JICA　先生のお役立ち 検索

ぼくら地球調査隊　小冊子５種（小中学生向け）

環境、保健、教育、食料、水など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、マンガを読みながら学ぶことができます。

世界の水問題
（環境）

学校に行けない
世界の子どもたち（教育）

砂漠化する惑星
（環境）

いのち、輝け!
（保健・公衆衛生）

世界の食料
（食料）

授業や家庭学習で使える10分映像

「難民」「イスラム」「国際協力」「教育」の四つのテーマについて、それぞれショート映像にまとめました。それぞれのテーマについての学習指導案や、学びを深める参考資料も掲載しています。

持続可能な開発目標（SDGs）を学べる教材

持続可能な社会を考えるヒントに、印刷して使えるSDGsカードやサイコロ、SDGsを学べる冊子教材、動画等を紹介しています。

国際理解教育　開発教育支援事業

興味のある方は右ページのJICAの国内窓口、国際協力推進員にご連絡ください

国際協力出前講座

教室や職場に、JICA職員やJICA海外協力隊経験者を講師として紹介し、開発途上国の生活や文化、国際協力活動などをお話しします。環境、キャリアなどご希望のテーマもご相談ください。

施設訪問の受け入れ

児童・生徒の皆様をJICA国内機関にお迎えし、施設案内や講座等を実施しています。

中学生・高校生エッセイコンテスト

国際社会の中で、自分たちがどう行動すべきかについて考えてもらうことを目的として、国際協力をテーマにしたエッセイコンテストを実施しております。

教師海外研修

国際理解教育／開発教育に興味のある学校の先生を対象に、10日間ほど開発途上国で研修を行い、その経験を元にした授業を実践いただくプログラムです。

JICA地球ひろば

JICA地球ひろばには、世界の人々の暮らしや直面している課題などを、展示を見て・聞いて・さわって体験できる「体験ゾーン」があります。この体験ゾーン見学と、開発途上国での活動経験者の体験談やワークショップを組み合わせた団体訪問プログラムもご用意しており、修学旅行などでご利用いただいています。また、国際協力や開発途上国のある国や地域に関するセミナー、各種イベントなども多数開催しています。併設のJ’s Cafeのランチタイムには、開発途上国のエスニックメニューをご提供するとともに、フェアトレード商品の販売も行っております。

JICA地球ひろば

- **開館時間**：10時～18時
  ※JICA地球ひろばが主催するイベント・セミナーを開催する場合は19時まで
- **休館日**：年末年始・毎月第1・第3日曜日
- **入館料**：無料
- **所在地**：東京都新宿区市谷本村町10-5
- **お問い合わせ**：（代表）03－3269－2911
  （地球案内デスク）0120－76－7278
- **URL**：https://www.jica.go.jp/hiroba/

なごや地球ひろば

- **開館時間**：**平日**10時～18時
- **休館日**：年末年始・月曜日（祝日の場合は翌平日）
  （カフェ・クロスロードは月曜・祝日も営業）
- **入館料**：無料
- **所在地**：愛知県名古屋市中村区平池町4丁目60-7
- **お問い合わせ**：（代表）052－533－0220
- **URL**：https://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/

ほっかいどう地球ひろば

- **開館時間**：**平日**10時～17時30分（年中無休）
  ※地球案内人による案内は平日のみ
- **入館料**：無料
- **所在地**：北海道札幌市白石区本通16丁目4-25
- **お問い合わせ**：（代表）011－866－1515
- **URL**：https://www.jica.go.jp/hokkaido-hiroba/

詳しくはコチラ JICA　地球ひろば 検索

あなたの近くのJICA国内窓口

●国内窓口

JICAには北海道から沖縄まで、地球ひろばを含めて全国に15の国内窓口があります。ここでは、海外からの研修員の受け入れや、市民のみなさんから国際協力に関するご質問、ご要望にお答えしています。

https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/ index.html

詳しくはコチラ JICA　国内拠点 検索

●国際協力推進員（JICAデスク）

あなたに一番近いJICAです。開発途上国で活動した経験を持つ国際協力推進員が、国際協力を伝える活動等行っています。

https://www.jica.go.jp/about/structure/suishin/

詳しくはコチラ 国際協力推進員 検索

[発行]

独立行政法人 国際協力機構（JICA） 広報部　地球ひろば推進課

TEL：03-3269-9022
〒162-8433　東京都新宿区市谷本村町 10-5　JICA 市ヶ谷ビル

[編集]

JICA 地球ひろば・教員向け研修運営事務局
一般社団法人　グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

E-mail：jica-edu@j-gift.org
TEL：03-4577-6767
〒141-0021　東京都品川区上大崎 2-15-19　MG 目黒駅前ビル 2 階

[発行]　2022 年 3 月

ジャイカ
JICA